

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文化学部人文学科等)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
導入プログラム	フレッシュャーズ・キャンプ	この授業は1年次第1クォーターの必修科目にあたる。本学に入学したばかりの学生に対して、学生自身が他の学生とともにキャンパスを出、直接異文化の中に身を置きながら他の学生との情報共有などを経ることで、その後の学習において協力し合える関係性を学生間で持てることをめざす。加えて、本学の学びの中で特に重要な「自身の意思の伝達」、「他者の理解」、「自文化・多文化の認識」について身につけることを目的とする。この授業を経て大学の学びに向き合うことにより、教員、学生同士の関係を深め、より横断的な視野で学習することができる。	
	クリエイティブ・ワークショップ	本学での学びは、各専門分野にとじこもるのではなく、分野を超えた中での新たな価値観の発見を通じ、これからの社会をよりよくできる人間の育成を目的とする。そのために必要な相互理解と発展の第一歩として本授業においては今ともに学ぶ隣人がどのような専門性と将来像を描きながら学んでいるのかを各領域の教員の講義や上回生の事例を紹介しながら学ぶこととする。自らの専門の枠を超えた学びを描けることによる視野の拡張で、これ以後の学びの可能性を広げ、自らの学習計画の向上と改善ができることをめざす。	
共通教育科目	コミュニケーションスキル1	学問・芸術においては自らの思考を言語化し、発信し、コミュニケーションをとることが重要である。全学部生1年次必修となる本科目は、身近にある「読む」「書く」「話す」を通じて、ことばの多様性を理解し、自分のことばに関する強み、弱みを自覚し、エッセイや感想文、評論文により他者に向けて実践することを目的とする。1,000～2,000字で与えられたテーマをもとに繰り返し実践を行うことで、思考力を磨き、受け手を意識し、主体性を持ってことばを使える能力を身につける。	
	コミュニケーションスキル2	「コミュニケーションスキル1」で修得したことばを使う基礎能力をもとに、さらに「読む」「書く」「話す」の実践を深め、ことばを使える応用能力を身につける。自分の活動や思考した内容を膨らませて長文化したり、他者に伝えるトレーニングを行いながら、主体的かつ積極的にことばを使うコミュニケーション力を伸ばさせることを目的とする。最終段階では自身の生活や創作活動に関連した「ことば」の表現能力を高めていくことをめざす。	
	アカデミックスキル1	1年次第1クォーターの必修科目である本科目では、大学での学習の基礎となる「調べる」ことについての能力習得を目指す。「調べる」ことは私たちの日常的な営みのひとつであり、物事を多様な方法で知ることは、個々人にとっても社会にとっても重要なことである。この授業では、調査に関わる基本的な知識、技術を習得することによって、「調べる」ことの重要性、社会科学の基本的な考え方、量的調査・質的調査の方法論、調査倫理を学ぶ。さらに方法論の観点から実証研究を評価する視点を学び、現代の社会について主体的に考察する方法を学ぶ。	
	アカデミックスキル2	この授業では、「論文とはどのような文章なのか」といった初歩から始める。大学での学びは、「聴く」ことや「読む」ことといった受動的な学びに、「問う」ことや「書く」ことといった能動的な学びが伴って、初めて完結する。「考えるという行為」と「書くという行為」の相関を論じた基礎的な文献『知的複眼思考法』を教科書にして、大学で学ぶためのリテラシー能力の向上に努める。『知的複眼思考法』は全国の多くの大学で、「論文の書き方」の教科書として使われている。「『問い』を意識しながら読み、『問い』を意識しながら書く」という、すべての科目に共通する初年次教養教育を、少人数のゼミナール形式で展開する。	
	アカデミックスキル3	4年生の口頭試問や卒業発表展への参加、協力することを通じ、自らが4年次になった際のイメージを獲得するとともに、これまで培ってきた力を卒業論文、卒業制作へとまとめ、展示・発表へといたるために必要な表現力、プレゼンテーション能力を修得することをめざす。授業は4年次の卒業研究演習への参加と、授業内での模擬発表などを中心とするものであり、自身の先輩たちの姿を見ることで、次の年の同じ時期の自らを投影し、実感をもって4年次の学びへ向かうこととなる。	
表現科目			

アカデミックスキル4	卒業論文や卒業制作におけるポートフォリオなど、4年次ではこれまでの授業では求められなかったボリュームの論文を各学部でまとめなければならない。そのために必要な構成力、論理力、表現力を身につけることを本授業における目的とする。これらの力は卒業論文やポートフォリオの作成だけでなく、今後社会に出てからも必要となることだろう。各自はそれぞれの専門において取り組んできたテーマについて自身で振り返るとともに定期的な相互共有を通じ、他の専門で学ぶものたちの考え方やものの捉え方も同時に理解することとなる。培った専門的視野と他者から知る横断的な視野による複層的な視点をもって、これまで体験してこなかった論文の執筆へと向き合う力を獲得する。	
デッサン1	あらゆる表現の基本は「見ること」、「聞くこと」、「読むこと」、から始まる。対象を観察することにより、それまで気づかなかった世界がそこにあることに気づく。しっかりと対象を観察することを重視し、見えたもの捉えたものを伝えるために表現するデッサンの基礎を習得する。デッサン1では、そのために必要な知識や描写の基本を学び、幅広い様々なデッサンの表現を通じて観察力と描写力を養い、表現の礎を築く事を目的とする。	
デッサン2	表現を追求する上で、または思考を整理し編集・表現していく上において、対象物を良く観察し、見える形として表現する事は重要である。デッサン2では、デッサン表現の基礎要素となる、形、線、タッチ、調子、材質感、遠近感、構図、材料などの基礎を学び、描写する力、表現する力である、基礎描写力を身につけることを目的とする。また、より幅広い身近の環境、現象、興味に意識を向け、デッサン表現の幅を広げていけることを目標とする。	
デッサン3	デッサン表現は、対象を「観察する」ことから始まり、次に捉えた「要素を抽出・理解」し、手を動かし「表現する」といった一連の流れが複雑に往復しながら絡み合い成立している。この流れを繰り返すことにより、よりの確な表現として成立する。デッサン3では、表現するうえで必要となる、より深化させた観察力や描写力を様々なデッサンで養う事を目標とし、さらには解剖学的な知見から、人体の形態と機能、その外形と内部構造の関係などを知ることによって、表現力の効果的な向上を目指す。	
デッサン4	この授業では履修者が「デッサン3」までに獲得した力をもとに、デッサンによる表現のさらなる展開として、単に「描写する」、「表現する」だけにとどまらず、さまざまな「表現のバリエーション」を実践しながら、デッサン表現による「作品としての成立」までを目指すこととする。そのため、表現手段や手法といった構成要素も検討するだけでなく、モチーフやテーマの設定を構想し、デッサン表現の「可能性を追求する」ことを目標とする。	
グラフィックデザインソフトスキル	本授業では、コンピューターグラフィックの基本を修得する。具体的には、コンピューターグラフィック作成アプリケーションソフトのスタンダードであるAdobe Photoshop®とAdobe Illustrator®の入門から基本操作の修得を目標とし、ビットマップ画像の補正・加工・合成、ベクトル画像によるロゴやイラストの作成をはじめ、印刷物作成をベースとしたグラフィックデザイン手法の基礎を学修する。本授業で修得したスキルは、個展やグループ展、コンサートなどの社会に向けてのアプローチを告知するポストカードなどの案内物の作成に活用が可能である。また、企画などのプレゼンテーション資料作成においても活用が期待できる。	
芸術学	本講義では、視覚的イメージをコミュニケーションのためのメディアと考え、ヴィジュアル・リテラシー（視覚的な読み書き能力）について理解を深めることを目標とする。扱う対象は、絵画、映画、マンガと多岐にわたるが、それらが「意味」をどのように作り上げているのか、そのメカニズムについて理解を深めていきたい。さらに、そのような理解の上で、近代における「芸術」という制度の成立や「デザイン」という概念の誕生、その変容を幅広く見ていくことによって、芸術と近代社会・文化との関わりを再考する。絵画、彫刻、デザイン、さらには音楽における近代主義（モダニズム）の確立と変容を通じて、私たちが今日受容している「芸術」というものがどのような歴史的、思想的プロセスを経て成立してきたのかを問いたい。このようなプロセスに関する知識を得ることで、受講生自らが学んでいる文化制作を相対化することを目標とする。	

美学概論	<p>美学は論理学や倫理学と並んで人間の認識と行動を対象とする哲学の一分野である。とくに美学においては、美に代表される感性的な価値の判断を出発点として、様々な美的認識と芸術制作を対象とする。計算によって導き出される価値や、道徳や伝統によって定められた価値ではない、純粋な美的価値の存在とそれをめぐる議論について親しむことがこの授業の目的である。</p> <p>授業全体は7つのテーマについて「問題提起」の回と「解説」の回を繰り返すことにより成り立っている。「問題提起」の回の終わりには扱っているテーマに関するアンケートを実施し、次の「解説」の回にその結果を発表・解説するので、そのテーマに対する自分の立場を客観視する手立てとすること。また後述の通り、計7回の「解説」の回で扱ったテーマに関するレポート課題を発表するので、授業時間外に取り組んで各テーマに関する復習とすること。</p>
現代美術概論	<p>本講義では、主に20世紀から21世紀の世界の美術を、履修者側の予備知識のないところから、具体的な作品に即して、説明する。ある作家が、どうしてそういう作品を作るにいったのか（たとえば、どうして便器が「泉」（マルセル・デュシャン・1917年）なのか）、そのような作品が生み出された時代や世相などの背景や、作者自身の理由を学ぶことで、各地での美術館で開催される現代美術の展覧会をどう楽しむのかを解説する。</p>
美術史	<p>美術史（art history）とは何か？ それをかみ砕いてみると、美術にまつわる「ひとびとの物語（story）」と理解することもできる。この「物語」は、空想やファンタジーではなく、事実として「過去にあったできごと」である。</p> <p>この基本姿勢に基づいて、本講義では、世界各地の美術品（=過去に人間の手で作られたもの）を彫刻、絵画、建築・工芸の三つのジャンルに分類し、それについて、最低限知っておくべき特徴、作者、制作背景を紹介する。授業を通じて有史から現代にいたる「美術の物語」のおおまかな見取図のインプットを目的とする。</p>
日本美術史	<p>日本の美術は世界の中でもたいそうユニークな性格をもっている。だが、根底にはアジアに共通するものがある。それは仏教美術である。古くインドを発祥としながら各地でさまざまな形で変化をしたこの大きな基盤の上に、アジア各地で独特の美術が育まれていった。したがって、日本の美術をより良く把握するためには、まず仏教美術について学ぶことが重要である。本講義ではまず仏教美術に関する概説を行ったのち、仏教美術の影響について解説しつつ、日本美術の特徴を見極めていきたい。</p>
東洋美術史	<p>わが国では近代以降、西洋からの影響が大きくなると、教育現場で東洋美術の歴史や実技を学ぶことがほとんどなくなってしまった。</p> <p>今では多くの西洋の芸術家の名前や作品が一般的に知れわたっているのに対し、東洋については知られていることが極端に少ない。本授業ではまず、多くの人々が現在は忘れてしまった東洋の優れた作品を紹介するとともにそれらの作品の生まれた時代などの背景などを解説する。履修者にはまず東洋美術に興味をもってもらうことを目的とした。</p>
西洋美術史	<p>本講義では、西欧のルネサンスから十九世紀までの絵画様式を皮切りに美術史への理解を深めることを目的とする。単に個人的な好き嫌いだけでそれらの作品を判断するのではなく、複数の視点から作品を鑑賞する方法も身につけていく。それぞれの絵画にはそれらの作品が生まれた時代や地域ごとの特色がはっきり現われており、その時代その時代の背景や、各地域の当時の様子などをふまえつつ、その特徴を丹念に整理しながら把握していく。</p>
工芸概論	<p>古代から制作されてきた漆芸、染織、陶芸、木工、金工などは、明治時代（近代）になると「工芸」としてくられることになる。この講義では、とくに漆芸、染織をモデル・ケースとして取り上げ、前近代から近代にかけて、これらのジャンルがどのように変化したか、あるいは、変化しなかったのかを検討し、それらの素材の特性や技術、デザインの変遷を理解する。さらに、各分野において、近代化にどのように向き合い、発展をとげてきたのかその歴史をまなぶことで、現代の工芸制作とデザインの方法を考える。また、適宜その日紹介した作品や事項について、自分の意見・感想をまとめてもらう。</p>
デザイン論	<p>今日のわれわれが日常生活に使う大抵の物には「デザイン」が施されている。そしてそれらはさまざまなメディアを通じて人々に対して紹介され、選択され、そして購入されている。この授業では、近年の情報メディアの変化と、デザインとの関係を軸としたうえで、現代社会において、デザインに求められていることとはなにかについて、考えていく。「人に対して望ましい状況であることを中心に考えて実践する」というデザイン本来の意義に対する認識を確かなものとしながら、デザイナーの視点や発想や手法への理解を深め、その社会的な価値を自覚することが当授業の目標である。</p>

<p>素材論</p>	<p>ものづくりでは「素材」とその「加工技術」及び「応用」に関わる知識習得は重要である。更にそれらは技術の進歩とともに急速に変化しており、芸術計画、建築計画や商品開発、CMやアート制作における加工技術もその進歩に対応せざるを得ない。現在では複数技術の融合による多岐にわたる領域にまたがる技術の進歩がその礎になっている。芸術造形・デザイン・建築制作時に最低限必要な、伝統的素材と最新素材及びその加工技術を学習する。</p>	
<p>音楽概論</p>	<p>現在の音楽文化を知る上で、私たちが未知の音楽に出会ったときどのような姿勢で聴き、受け止めているのか、あるいは、私たちが慣れ親しんでいる音楽を私たちがまったく違うバックグラウンドをもつ人々がどのように聴き、受け止めているのかを考えることはとても重要である。技術の発達により音楽の行き来する範囲が大きく広がっている現在、世界中のあらゆる国々でそれまでふれることのなかった音楽に出会うことがあたりまえとなりつつある。この講義では、音楽や芸術、文化を考える方法について、世界のさまざまな地域で行われている音楽実践の事例を通して学ぶ。さらにそれを通して、自分たちの慣れ親しんできた音楽について、それを未知とする人々に対し、自分の言葉で説明する技術を身につけることを目指す。</p>	
<p>ポピュラー音楽論</p>	<p>『ポピュラー音楽史』では、「媒介～メディアエーション」という考え方を中心に、音楽の制作、流通、聴取に係る技術がどのような歴史の変遷を遂げ、それがポピュラー音楽の作られ方、聴かれ方にどのような影響を及ぼして来たかを紐解いてゆく。レコードやCD、あるいはネットやラジオやテレビを通して耳に届くポピュラー音楽は、逆に言えばレコーディング技術やメディア技術なしには成立し得ない現象であり、作り手と聴き手を結ぶこれらの媒介がなければ、音楽は《表現》としてさえ成り立たない。本講義では音楽そのものに耳を傾ける一方で、社会学、政治経済理論、メディア論などの方法を通し、その音楽を可能にしている力学を見極める能力の獲得を目標とする。</p>	
<p>身体表現論</p>	<p>この授業では、身体表現における特に「演劇」を核として学ぶ。何かを「演じる」という行為は学生にとっては縁遠いものも多いことだろう。しかし、幼いころには、多くの子供たちが友人や兄弟、姉妹らとともに「ごっこ遊び」に興じた記憶をもっているのではないか。しかし、いつの間にか子どもはごっこ遊びから「卒業」してしまう。一方で演劇は古代より続く文化の源流のひとつと言え、神話や文学、音楽などのさまざまな文化は演劇という行為とともに発達してきた。この授業では、子どもの遊びのひとつである「ごっこ遊び」と古代から続く演劇との共通点についてさまざまな演劇を紹介しながら感じてもらう。そして人々が演じること、演者を見ることで感じてきたことを理解する。演劇を通じて広がった文化について知ること、文化に対する教養の枠を広げることへとつなげることを目的とする。</p>	
<p>身体文化演習 1</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に国内における諸文化について学ぶ。特に華道、茶道、柔道、剣道、などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>身体文化演習 2</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に海外における諸文化について学ぶ。特にヨガ、太極拳などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>表現と社会</p>	<p>個人としての表現者が自身の作品を出す先は社会である。一方で表現者自身が属しているものもまた社会であり、たとえ表現者個人がその作品を生み出したとしても、そこには社会の影響が少なからずある。生み出されたさまざまな作品と社会とのかかわり、表現者自身と社会との関係性について、特に現代社会に焦点をあてて考えたい。授業では、さまざまなデジタル機器とインターネットの発達により、すべてのひとびとが表現者となり得、かつそれを手軽に社会に発信できる現代社会の特性についても考察する。</p>	
<p>表現と倫理</p>	<p>表現活動においては、常に倫理の問題がかかわってくる。ときにそれは表現者とその題材となった対象との関係であることもあり、時に法、社会との関係であることもある。とくに現代社会においては、多様な価値観の中で、ひとびとの倫理観も変化をかさねており、少し前には問題のなかったことでも、批判の対象となることもある。表現者は倫理的な問題を常に認識し、ときに対峙しながら活動をしていくこととなる。この授業では、現代社会における表現活動と倫理のあり方について、歴史的な事例や、現代において生じた裁判、事件、マスメディアの批判、インターネット上での炎上などさまざまな事例を紹介し、考察していく。</p>	

表現科目	表現と知的財産権	表現活動を職業にするということは、自らを好き勝手に外部に発信することではない。表現活動は、社会的行為である以上、社会を規律する法律と切り離すことはできない。表現活動を守り支える法律を知り、使いこなすことができること、それは、クリエイターが身につけるべきリテラシーとして重要な地位を占めている。著作権法をはじめとする表現活動を規律する法律の基本的知識と、具体的な表現活動に法律がどのように影響しているかを、具体的事例を交えながら解説する。		
	写真技法	この授業では、カメラや写真表現の経験のない、あるいは浅い履修者を対象とし、写真表現やポートフォリオを作成するために必要な基礎知識と、技術を学ぶことを目的とする。実際に各自が持ってきたカメラを使い、そのカメラの機能と基本操作から授業を始め、ある程度の基本操作を学んだ後、写真スタジオなどを使ったライティングの習得と、Adobe Photoshopなどの写真編集ソフトを活用したデジタルレタッチテクニックの基礎を学ぶ。		
共通教育科目	グローバル科目	日本文化概論	近年「日本文化」に関するテレビ番組や雑誌記事が数多く制作されるなど、国内外で「日本文化」に注目があつまっている。しかし、そうしたメディアの情報では、表面的な部分しかとりあげられないことも多い。本講義ではいわゆる「日本文化」について、現在ある事象と、そこにいたる歴史の変遷や背景について学び、「日本文化」について考えるための基礎的な知識を習得することを目標とする。「日本文化」と一言で言っても、分野もさまざまであり非常に幅広い。そのため、京都精華大学があり、受講生にも身近な場所である「京都」を中心におき、「京都」にかかわりの深いものを中心にとりあげる。	
		英語 1	「英語 1」では、まず、英語を使う上で必要となる基礎的なコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認したうえでレベル別にクラスを配当し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図り、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認することをめざす。	
	英語 2	「英語 2」では、「英語 1」に引き続き、英語を使う上で必要となるコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。英語 1と同じ習熟度別クラスのなかで履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図るとともに、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認する。		
	英語 3	「英語 3」は必修科目として配置されている。日本語を母語とする国内学生を対象とした必修科目である「英語 2」までに身につけた能力をふまえ、英語による「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能の運用能力を発展的に高め、学術目的で使われる英語を理解するとともに、自分の考えを英語で的確に発信できるより高度な技術を身につけることを目標とする。また、授業を通して、多様な文化に関する知識と理解を深め、国際的な視野を身に付けることもめざす。		
	英語 4	必修科目である「英語 3」につづくこの「英語 4」においては、担当教員が紹介する資料や各自の持ち込んだ資料などを通じ、英語の文章構造とそれに伴う単語や文法について学習することを通じ、学問や芸術分野について履修者が英語でディスカッションできるようになることを目標とする。さらに英語によるライティングの力を伸ばすことで、自分自身の専門分野における研究活動や表現活動について、英語でプレゼンテーションできる力を身につけることを目的とする。		
	日本語 1	「日本語 1」では、大学でレポートや論文を書くための基本的な技術を養う。与えられた情報を整理し、レポートや論文にふさわしい形式と組み立て方で、自分が言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。文体レベルで気を付けるべき句読点や記号の使い方について学び、さらに事柄に視点をあてた客観的な文、主述関係、引用のしかた、参考文献表の書き方、アウトラインの作り方、報告型のレポートの書き方などを学ぶ。レポートや論文にふさわしい基本的な「形式」を身に付けることを目標とする。		
	日本語 2	「日本語 2」では、大学でレポートや論文を書くための基本的な技術を養う。与えられた情報を整理し、レポートや論文にふさわしい形式と組み立て方で、自分が言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。文体レベルで気を付けるべき句読点や記号の使い方について学び、さらに事柄に視点をあてた客観的な文、主述関係、引用のしかた、参考文献表の書き方、アウトラインの作り方、報告型のレポートの書き方などを学ぶ。レポートや論文にふさわしい基本的な「形式」を身に付けることを目標とする。		

日本語 2	「日本語 2」では、大学で学ぶために必要な、レポートを作成する方法を学ぶ。的確な表現を使い、正しい構造の文で、論理的な文章を書く力を身に付ける。また、さまざまなジャンルの作品における記述や批評をレポートし、合評における自分の作品のコンセプトや説明に役立てる。さらに、ショートショート、短編小説、エッセイ、新聞記事、論説文などさまざまなテキストを読み、あらすじをつかむ力を身に付け、解説文の必要な項目に着目する力を養う。また、簡単な批評や論文などを読み、作品のどこに着眼して批評が行われているかを考察する。	
日本語 3	「日本語 3」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。文字・語彙、聴解、文法、読解の問題を解きながら、日本語への理解を深める。また、現代小説やエッセイに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばし語彙力を身に付ける。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、本文について話し合いレポートを作成することで、アカデミックな文章を書く技術も養う。	
日本語 4	「日本語 4」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。漢字力と語彙力を伸ばし、時間や様子、関係性などを表す機能語について理解を深める。また、現代小説やエッセイなどに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばす。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、アカデミックな文章を書く技術を養うため、論理的なレポートを作成する実習を行う。	
Business English	情報化社会では世界中から発信される様々な情報を的確に読み解く外国語リテラシーが必要となります。本授業は、「聞く・話す・読む・書く」の4技能の側面からビジネスの場面で必要となる基礎的なコミュニケーション力を養成することを目的とします。ビジネス英語特有の語彙・表現を身につけると同時に、多様な価値観や異文化への理解を深め、異なる意見に耳を傾け、多角的に判断する思考力を身につけることで様々な場面で応用可能な英語による交渉力を向上させます。	
English discussion	この「English discussion」では、少人数のクラスにおいて、英語によるスピーキング力を徹底して強化し、アカデミックな環境で必要とされるディスカッション能力の育成を目標とする。この授業はすべて英語でおこなう。各回で講師が紹介するテーマに関するリーディングもおこなった上で、履修者の身近な関心事など、さまざまなテーマについて話しあう練習を重ねることで学生自身が英語でディスカッションできるようにしていくことを目的とする。	
Effective presentation	この「Effective presentation」では、各自がそれぞれの題材を設定し、構成方法、視覚資料の使い方、効果的な言語・非言語メッセージの伝え方など、英語での他者へのプレゼンテーションにおいて不可欠なスキルを学んでいく。授業においてはノートパソコンの持込を必須とし、各自のパソコンにインストールされたプレゼンテーションソフトを利用する。また、基本パターンをベースにアウトラインを作成し、回を追うごとに徐々に長いプレゼンテーションができるようにする。	
English for studying abroad	この授業は、主に海外大学への留学希望者のための授業である。留学時に必要となるTOEFLやIELTSなどの試験対策、スピーキングセクションの訓練などを行うとともに、ノートテイキングや口頭発表など、留学先の大学でのアカデミックな活動にスムーズに参加するための英語によるコミュニケーション能力を養成する。すでに留学先についての候補が決まっている学生についてはその留学先に適したテーマなどをもとに授業の課題を設定するなどの指導もおこなう。	
中国語 1	日本においても中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。この授業では、中国語の発音や基礎文法とともに、実用的な会話を習得する。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力の向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。	

中国語 2	日本においても、中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。「中国語 2」では、「中国語 1」で学習した内容を踏まえ、基本文法の習得を進める。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。	
韓国語 1	日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語固有の文字であるハングルの読み書きとともに、自己紹介などの基本的な会話ができることをめざす。また、朝鮮半島のことを理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
韓国語 2	「韓国語 1」につづき、日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語の基礎文法の学習と会話の練習を通じて、基本的な日常会話と読解、作文ができることをめざす。また、朝鮮半島のことを理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
フランス語 1	この「フランス語 1」は、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、自己紹介や自分の住んでいる場所、好きなものなどについて初歩的な語句を使って会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、簡単な文章を読む練習をおこなう。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
フランス語 2	この「フランス語 2」は、「フランス語 1」に引き続き、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、量や時間の表現、未来や過去の表現、比較表現などについて会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、「フランス語 1」よりも長い文章を読む練習を行う。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
タイ語	「タイ語」では、発音記号を用いて学習し、簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。タイの文字は子音文字と母音符号によって成り立っている。授業ではタイ文字の書き方を練習し、簡単な読み書きができることも目指す。さらに、総合的な学習として、タイの文化を紹介し、タイをより身近に感じ、タイ語および文化への理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
ベトナム語	「ベトナム語」で履修者は、ベトナム語を学習するにあたって基礎となる発音、文字の読み方、書き方からはじめ、基本語句、基礎文法を学ぶ。ベトナム語の基礎文法、初歩的な表現を習得することを目標とする。授業では、発音、文字の読み書きを学んだ後、基礎的文法事項を学んでいく。音声も用いた具体的な会話表現の中から文法事項を学んでいき、重要な定型表現は暗記することをめざす。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
インドネシア語	インドネシア語はインドネシア共和国の共通語として多くの人々に話されており、マレーシア語とマレー語とも非常によく似た言語で、それらの隣国でも通じる。表記は、アルファベットで、しかもローマ字読みすれば、大体通じるので、発音も構造も比較的簡単である。インドネシア語では、文字の発音から始め、初歩的な文法や文章を使って、インドネシア語の日常会話や旅行の時に役に立つ会話の修得を目標とする。授業は、口頭の練習を中心に進めていく。	

スワヒリ語	「スワヒリ語」は東アフリカ（タンザニア・ケニア・ウガンダなど）を中心に、地域共通語として広く話されている。この授業では、スワヒリ語の初級文法について学び、簡単なスワヒリ語文の作成の能力と、簡単な会話の能力を身につけることを目標とする。スワヒリ語にまつわるエピソードとして、タンザニアを中心とした、スワヒリ語圏の国の文化についても紹介する。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
ドイツ語	「ドイツ語」では、ドイツ語のアルファベットの紹介と発音練習からはじめて、ドイツ語の基礎的な文法事項について学ぶとともに、授業で出される練習問題をおこなないながら、簡単なドイツ語の文章が読め、会話できることを目標とする。また、言語の学習と同時に、ドイツ語圏の国々のさまざまな文化や社会についても触れ、異文化理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
スペイン語	スペイン語は20カ国以上、約4億人に話されており、国際共通語のひとつと言われている。「スペイン語」では「読み・書き」よりも「聞く・話す」ことに重点をおきながら、スペイン語の基礎を学んでいく。まず、スペイン語の音に慣れ、発音を身につけ、自己紹介、挨拶表現などを学ぶ。また、文法ではスペイン語に特徴的な点を学び、文法で学んだことを用いながら会話学習、聴解練習を通じて、自分の身の回りのことが表現できるようになることを目指す。	
イタリア語	「イタリア語」では、初めてイタリア語に接する学生を対象に、発音から始め、基本的な文法を学習しながら、さまざまなシチュエーションに応じたイタリア語表現を身につけ、簡単な会話ができるようになることを目標とする。言語の学習と並行して、イタリアの文化をより深く理解するとともに、イタリアと日本の文化間の違いや自己表現の違いなども学ぶ。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
サステナビリティと社会	人類の経済・社会活動に起因する地球環境問題が世界中で顕在化する中、現代の世代が将来の世代の利益や要求を充足する能力を損なわない範囲内で環境を利用、生活していく「持続可能性」が、人類がこの地球環境問題を克服するための一つの指針として重要視されている。 この授業では、各分野における持続可能な社会に向けての取り組みの状況と課題を学習する。 また受講生が大学4年間で獲得を目指す専門との関係も含めて、持続可能な社会のためにどう取り組むかを考える。 最終回の授業では、本人の理解を得たうえで受講生から提出された期末レポートを発表してもらい、その内容についてのディスカッションを行う。	
現代社会の諸問題	現代社会の諸問題について、倫理、社会、文化、政治、経済など様々な観点からアプローチする。新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどのメディアで報道されている現在進行中のトピックスをケース・スタディとして取り上げながら、さまざまな立場・視点から考察を加える。対立構造にある問題については、自らの意見をまとめて表明できるようにするとともに、他者の立場や視点を俯瞰的に理解し、問題の本質をたどる姿勢・態度を身につける。	
海外ショートプログラム入門	「海外ショートプログラム入門」では、現在のわたしたちを取り巻く世界の諸課題を改めて認識するとともに、短期あるいは長期の旅や留学等を通じた、海外への渡航体験の意義を考察する。履修者は各自の専攻や共通科目でこれから在学中に体験するであろう海外でのフィールドワーク等の調査技術を身につけるとともに、異文化適応のための心理学に触れ、危機管理の方法についても学び、各自のこれからの渡航、滞在と調査のための計画を発表する。	
世界と食	2050年には世界の人口は100億人に達すると言われ、食の問題は益々注目を浴びていくことになる。しかし、食の問題は、カロリーの問題であるばかりか、共食による社会的紐帯を確かめ合い、加えて、味覚という人間の嗜好や快楽の問題にも結びつく。この講義では、世界の食文化を通じ、我われの食の問題を見直し、将来の食糧問題の解決策を探る。受講者は、自らの食生活を顧み、グローバルな問題として食の問題を考察することが求められる。	

グローバル科目	日本語学概論	この授業では、「日本語学」の基礎知識を学ぶとともに、周囲に溢れるさまざまな「言語現象」、学内にも多く在籍しているさまざまな国から来ている外国人留学生の存在に目を向けることで、21世紀を生きる上で必要とされる論理的思考力および自らを相対化して客観的に物事を分析する力を養う。授業は主に講義形式でこない、授業の指定教科書の第1部「社会・文化・地域」、第5部「言語一般」、第6部「日本語の構造」の内容を中心に進める。	
	言語学	この授業では、「ことば」について学ぶ。各回のテーマとしては、すべての言語に共通する特徴や、人間が使うことばに対し、動物はどのようなコミュニケーションをとっているのか、ことばはどのように、なぜ変化してきたのか、などの具体的な問題を取り扱うことを予定している。これら各回のテーマに触れることで、ことばとはそもそも何なのか、どのように働くのか、という根源的な問いについて、受講者自身がその答えを見出すことをめざす。	
共通教育科目	自由論	この「自由論」は本学が標榜する「自由自治」ということばを自らのことばとして語れるようになるための入り口としての役割を担う。本講義の主たるテーマは、いわゆる意思としての自由ではない。本講義で論じるのは、誤解されやすい哲学用語という必然にたいしての意思の自由ではなく、市民としての自由、社会における自由についてである。逆にいえば、個人にたいして社会が正当に行使できる権力の性質、およびその限界を論じたい。	
	シティズンシップとダイバーシティ	「シティズンシップ」とは「市民権」を指すが、「日本では市民社会が不在である」あるいは「未熟である」と、常套句的に言われる。そのとき、「市民社会の不在」ないし「未熟」とは何を指しているのだろうか。そして、それが本当のことだとするならば、私たちは何を知り、考えなければならないだろうか。本講義では、毎回折々の時事ニュースを素材に、日本社会で起こる事件等の背景としての「日本の市民社会の諸問題」に接近する。	
	創造的思考法	こんにちの多様化・複雑化が加速する社会では、問題解決や価値創出の手段として、様々な要素を有機的に組み合わせ、全体としての新しい価値を創出して行く創造的思考が求められる。このような思考をはじめ、アートあるいはデザイン的な視点やアプローチなどを学び、世界を捉えることで、各自の属する専門分野を超えたクリエイティブな発想力と提案力を身につけることを目標とする。授業ではアートシンキングやデザインシンキングなどのさまざまな思考法とそれを活かすような事例などを紹介するとともに、各自の問題意識、専門分野などをもちよることで、視野の拡張と思考の深化、拡大をめざす。	
	情報と倫理	今日のインターネットの普及は、電子メール、Webによる情報検索、オンラインショッピングなど、私たちの生活にさまざまな恩恵をもたらしている。しかし、便利になった反面、個人情報の流出、著作権の侵害、ネット上での詐欺など、いろいろな問題が起こっている。さらに、インターネットや携帯電話の利用者が低年齢化するとともに、児童や生徒を巻き込んだトラブルや事件も目立つようになってきた。 本講義では、初めに、インターネットの「光と影」（便利な点と危険な点）について解説する。次に、インターネット社会（情報社会）におけるルールやマナーを考えていく。ネット被害やセキュリティについても学習する。また、個人情報とプライバシー、知的財産全体について概説したい。	
	リベラルアーツ科目	人権と教育	人権とは「人が人として当然に有する権利」である。しかしながら、過去から現在に至るまで、規模の大小や国内外を問わず、日々人権侵害が発生しており、特に、マジョリティ（多数者）中心にシステムが構築されている現代社会においては、マイノリティ（少数者）は絶対的に社会的弱者の立場にあるがゆえに人権侵害を受けやすい傾向にある。そこで、こうした現状を踏まえ、マイノリティを巡る人権侵害事例を中心に扱いながら、人権とはそもそも何なのか、そして、人権を守る手段には一体どういったものがあるのかについて学ぶことを目的とする。 なお、本講義では従来の一般的な講義形式にとらわれず、ビデオ教材などを使用することによって、より身近な問題として感じられるように配慮をし、また、グループワーク等を通じて、受講生自身が主体的に考え、学べるような授業を行う予定である。

グローバル化と社会	<p>私たちが住まう日本という国の抱えるさまざまな問いを皮切りに、世界の現状と来歴（どのような経緯で今のようになったのか）、これからどう変動していくのか、私たちはその奔流のなかで人間として尊厳を保ちあえるのか、といったことを考えてみたい。果たして日本は先進国なのか、「日本の常識は世界の非常識」といわれるのはなぜか、平和憲法を持ちながら戦争で利益を得ている矛盾、移民問題など、日本に暮らす中でもさまざまな問題を感じる機会があるだろう。あまり抽象的な次元で議論するのではなく、現代の国際社会が直面する具体的問題を手掛かりに、視野を広げる作業をしていく。</p>	
障害学	<p>現在の社会において、障害者は圧倒的に少数派（マイノリティ）である。少数派であるということは単に「数が少ない」という意味にとどまらず、多数派（マジョリティ）のこじか考えずにつくられた社会の中で、さまざまに抑圧されたり、不利益を受けていることを意味する。障害者の場合、「障害があるから、いろんなことができなくても仕方がない」と考えられてきた歴史が長くあった。さまざまな障害者が何を考え、どんなふうに住んでいるのか、その「なまの声」を知らない人が圧倒的に多いのではないか。この授業では、さまざまな障害者の姿、経験、意見などを紹介し、その背景を考えることを通して、私たちをとりまく「社会のあり方」を多角的にみつめていく。「目からうろこ」の経験をしたり、障害のことを考える・行動するのは「おもしろい、やりがいがある」と思えるためのきっかけを提供できればと思う。</p>	
哲学入門	<p>ポスト・トゥルース（真実の後）の時代、そう現在が呼ばれ始めている。真実や事実というものがないがしろにされ、政治的効果を狙った根拠がない誹謗中傷や噂話、すなわち「デマ」が猛威をふるっており、実際に世界中でその効果は大規模に出現している。だが、たとえば、諸君が愛するもの、愛する人についてデマしか知らなかったとしたらどうであろう。そのような悲しいことが他にあるだろうか。このような衰弱が、許されてしかるべきなのか。わたしたちは、このような趨勢に抵抗するために、芸術的な創造行為は政治的な創造行為と切り離せないことを確認しつつ、「真理の芸術（アート）」としての哲学を考えたい。端的に創造行為に「役に立つ」ように、具体的に芸術家や音楽家などの名前をあげつつ、「哲学的芸術入門」としても受講できるように配慮する</p>	
政治学	<p>本講義では、現代政治の構造を、とりわけ「階級」と「ナショナリズム」に着目しながら、考察する。「階級」は、「1%と99%」の標語に象徴されるように、現代世界を引き裂く巨大な力として現れている。他方、「ナショナリズム」は、同胞意識を基礎として、分裂を縫い合わせる事が期待されている。しかし当然、現実には、止めどなく分裂が進行し、ナショナリズムは排外主義へと転化しているのが実情である。なぜ、現実がこのような状況になっているのか。本講義では、近代の政治史を振り返りつつ、日々現れる時事的トピックにも言及しながら、現代世界の政治状況を解析する。</p>	
法学	<p>この授業では、身近なニュースや問題を題材に、憲法・刑法・民法という代表的な3つの法律を学習する。法律について日常的に身近に感じることはまれかもしれない。日ごろ、無縁に感じる法律について、「難しい」と思っている方も多いだろうが、一方で、我々は知らず知らずのうちに法律のバリアに守られ、法律にしたがいながら生活をしている。刑事裁判とも無縁なつもりでも裁判員として関わることも起こり得、些細な日常のやりとりにおける損害でも法律が機能する事もある。選挙権は憲法改正への投票権をもつこととなる。普段の何気ない風景や場面に潜む「法」を発見し、「法学」という視点からものごとを考える力を養うことを目標とする。</p>	
日本国憲法	<p>「憲法」はテレビや新聞で見聞きするものだけでなく、私たちの「あたりまえ」の生活にも「憲法」が大きく関係している。そうした「憲法」の働きを広く知り、それに基づいて考える能力を身につけることが、この授業の狙いである。現在、「憲法」を改正しようという議論もさかんになっている。そうした議論を少しでも身近なものとして考えられるようになるため、授業では、身近なニュースや問題を題材に、そこに潜む「憲法」を発見し、最終的には「憲法」についての自分の意見を表現できる力を身につけることを目指す。</p>	
物語論	<p>「物語」の発生と展開を知り、その特色について、関連する諸事情にも広く目を向けて考えられるようにする。世界各地で生まれた「物語」はどのようにして生みだされたか、生み出された物語が神話、演劇、文学などへと発展し、生成されていったか、各地のさまざまな事例を紹介しながら学ぶ。世界中で生み出された物語について、地域、時代などの背景に触れ、その類型化などの分析を行う。加えて、現代でも生み出されるさまざまな物語についてもこれらの物語と比較することで、「物語」とひとびとのかかわりについて考える機会とする。</p>	

考古学	考古学とは、その地に生きていた人々が地上や地下に残したさまざまな痕跡（遺跡・遺構・遺物）から歴史を考える学問である。考古学の「遺跡や遺構や遺物のような物質的な資料から歴史を読み取る」という独特な手法は、文献資料から歴史を見る方法とは根本的に異なる方法である。授業では、このような考古学の特徴とその方法を具体的に解説したうえで、環境と道具に関連してエジプトを、思想と文化に関連して中国を取り上げた後、日本の古代はどうとらえられるのかを探っていく。	
民俗学	「民俗学」というと、古いことや過去について学ぶ学問であると考えられることが多いが、この授業では、現代を生きるわたしたちの問題として「民俗」を考える。そのためにこの講義では、盆や正月の行事など、私たちにとってできる限り身近な民俗的事象を多く取り上げる。それらの行事の検討を通じて、現代の生活と民俗との深い関わりを認識し、自分自身の考え方や行動を、民俗の視点から、今一度見つめなおすことを目的とする。	
情報科学概論	この「情報科学概論」では、情報科学技術のさまざまな基礎事項を理解し、コンピュータ・ソフトウェア、知識情報処理、情報理論、数理科学とその応用、ネットワーク、データマイニング、アルゴリズム、モバイルシステムでの情報伝達等の現代社会に広がるさまざまな分野の概要や研究動向を学ぶ。履修者は現在社会において生活の中に溶け込むものの中にある技術的な面を知ることから、これからの時代におけるさまざまな表現活動と技術の関係性を理解し、在学中の表現活動における広がりや可能性を見出すとともに、社会の可能性と問題を認識する事を目的とする。	
データサイエンス入門	データサイエンスは、21世紀を切り拓く分野であり、ビッグデータ分析、人工知能などの新技術を包含するだけでなく、社会、ビジネス、自然環境における意思決定、問題解決に不可欠な基盤的な科学となってきた。本講義は、データサイエンスの今日的な意義、歴史・将来展望、基礎的な知識、学習方法を俯瞰的に学習するとともに、実際にデータサイエンスのもたらすビジネス・社会的なインパクト事例や最先端な研究トピックスを紹介する。これらの講義を通じてデータサイエンスの重要性について理解を深める。	
統計的思考法	あらゆる学問分野、産業分野で、調査・実験・観測などの様々なデータを数学的に扱うには、確率と統計が必要となり統計によりデータを整理・分析するための手法が提供され、確率はその基礎的な数理となる。この「確率統計的思考法」においては、統計データ解析をおこなう際に必要となる確率と統計の基礎を、扱う。入学するまで数学を苦手とする学生においても、コンピュータの基本ソフトを活用しながらその数字の意味や背景を知ること、自然と思考方法を習得できるようになることを本授業の目的とする。	
プログラミング1	こんにちの社会において、ひとびとの誰もが日常的に触れているインターネットだが、このインターネットにおいては、ウェブ上のプログラミングは欠かせない。プログラミング分野において得に身近なものであるこのインターネットについて、この授業ではWeb標準技術であるHTML5、CSS3、JavaScriptの基礎的な要素をまんべんなく修得して、この授業の合間や、修得後も自学・自習をしながらプログラミング開発できることをめざす。	
プログラミング2	今日の社会において日常の中に隠れているプログラミングについて理解をするため、「Python」などのプログラミングに慣れていない履修者でも取り組みやすいアプリケーションを用いたデータの加工、分析、可視化技術を身につける。このようなスキルを修得することを通じ、問題解決力や論理的思考力、創造力を養うために、オンラインコンピュータゲーム上で建造物や自動装置、論理回路などの製作をプログラミングで実現する演習を実施する。	
プログラミング3	コンピュータは、極めて高度な情報処理を人手を介さずに行っているように見えても、どのような手順で情報を処理・加工するかを指定する命令の列（プログラム）に従ってのみ動作している。プログラミングとは、コンピュータを思い通りに動作させるためにプログラムを作成する行為である。本授業では、演習を通して実際にプログラムを作成することで基本的なプログラミング技術を習得し、コンピュータの基礎知識を習得することを目的とする。なお、本授業では、プログラムを記述する言語（プログラミング言語）として、現在最も勢いのある言語のひとつであるPythonを用いる。	

プログラミング 4	今日の社会においてさまざまな場所でデジタル画像は普及している。特に、スマートフォンの爆発的な普及でより身近なものになった。一方で技術的な進歩もめざましく、計算機による画像処理は科学から娯楽まであらゆる分野で精力的に研究されている。この授業では、授業で紹介するいくつかの課題を通して、画像処理とそのプログラミングによる実装を学ぶ。またグループワークによって実際に動作するシステムの構築に挑戦し、理解を深める。	
情報テクノロジー 1	スマートフォンなどの情報端末は、情報社会において生活やビジネスに欠かせないツールとなりつつあり、通信の技術革新と生産技術の進化で今や社会基盤として世界的にも広く浸透するに至った。また今後も新しい技術により、情報端末はウェアラブル端末などの新しい形に進化し、益々生活に浸透するものとなると思われる。本科目では、情報端末の歴史をたどりながら、情報端末の通信方式やサービスの仕組みについて学習する。また、スマートフォンによるアプリやインターネットサービスの活用、画像や動画などのマルチメディアコンテンツの作成方法などを通じてビジネスへの有効活用ができることを目指す。	
情報テクノロジー 2	デジタル技術の発展とインターネット利用の拡充は、様々な情報サービスや新しいビジネスモデルを創出しただけでなく、人間社会へ多大な影響をもたらした。本科目では、アナログ情報のデジタル化から圧縮技術の基礎を学び、その上でインターネットの利便性の広がりに伴う様々な技術的取り組みを理解する。さらに、これらの技術革新が産業構造や一般生活にもたらした影響と変化について、事例を以って理解し、様々なサービスモデルの創成と人々のITスキルの向上が今後の社会をどのように変化させていくのか、その考察も試みる。	
人類と人工知能	本講義はビッグデータと人工知能についてこれまでの歴史、我々との関わり合いを事例を挙げながら紹介する。人工知能とは人間の思考プロセスをモデル化した処理を含むソフトウェア技術である。ビッグデータに人工知能を適用することにより、これまで知られてない新たな知識の発見、蓄積、統合、配信を実現している。ビッグデータ分析は人工知能が適用されることにより、次世代の新たな人智を築く基礎となりつつある。本講義では、実際のビッグデータに人工知能を適用することによってどのような知識エコシステムを生むのか、事例を紹介しながら、その適用手法について学ぶ。	
教職コンピュータ入門	教職課程履修者を中心に、マルチメディアを扱うためのソフトウェアの使い方を学ぶ。画像処理、3DCG、表計算ソフトを用いた二進数十六進数の計算などを理解することで、コンピュータの使い方だけでなく構造を学習する。以上の講義をふまえて教職課程上必須となる知識を学ぶとともに、教職免許取得後の教育現場において、各々が生徒へコンピュータの操作や仕組みを説明できるだけの技術と知識を修得する事を目的とする。なお、教職課程履修者を主な対象とした科目であるが、今日の社会において必要不可欠なものとなるこれらの技術を修得することは教職課程対象者でなくとも必要な知識では全くない。	
自然科学概論	人類は自然科学と向き合い、その発達とともに今日の社会を築いてきたといえる。この「自然科学概論」では、物理学、科学、生物学、地球科学、天文学など自然科学の各分野それぞれの成り立ちや体系、解明をめざす問題、自然科学全体や社会とのかかわりなどについて学ぶ。自然科学全体を概観し、情報化時代の現代において、「人間とは何か」、「科学的認識とは何か」、科学技術が人間に何をもたらしているのかについて理解を深める。	
科学史	この授業では、古代から現在に至る科学の歴史を概説する。現代の科学や科学技術を考えるうえで、17世紀のヨーロッパにおいて起こった「科学革命」は重要なイベントである。この科学史上の特出すべき事象を焦点としながら、近代科学の方法論と自然観がどのように形成されてきたかを具体的に理解し、その特徴と問題点をさぐる。授業では、各時代に起きた特筆すべきできごとを紹介し、それらのできごとと現代社会との関係性などを紹介し、「歴史」と自身とのつながりについても考える機会とする。	
生物学	現生生物は長い地球の歴史の中、40億年近い時間をかけて多様に進化をしてきた。その長い時間の中で、生物領域に特有の様々な仕組みや形や働きが選択され分岐してきた。この講義では、生物多様性の重要性や、ひいては「ヒト」という生物の特性を理解していくことを目指す。具体的には、生物現象の一定の領域の諸事例を提示しながら、どのような構造と機能が、それを支え、そこからどういう生物学的意義が明らかになるのかを考える。	

リベラル アーツ 科目	数学的思考法	現代社会では、種々の社会現象、自然現象の分析に数理的方法や数学的思考がもち られている。数学とその基礎となる数学的思考は、さまざまな学問分野の基盤のひ とつとつとよいてよいだろう。この講義では、数学と数学的思考の歴史を概観し、数学 的思考の基礎となる数学的論理や方法を学び、芸術的・文化的学問との関係や異同に ついて、具体的な数学の領域を参照しながら学んでゆく。授業においては履修者自 身が実際に数学的な思考につながるワークに取り組むことで、実践的に思考法を身 につける時間を設ける。	
	行動心理学	心理学の中の特に「行動心理学」は、意識を対象とする「心理学」に対し、「全 体的行動の科学」としての心理学を総称するものにあたる。この授業では、その入口 として、比較心理学、動物心理学、エソロジー、行動生態学、比較認知科学、人類 学、進化生物学などの諸領域で明らかにされた知見を総合して、行動の機能、発 達、進化について概説する。進化心理学についても簡単に紹介する。さまざまな領 域を知ることにより、発達してきた心理学の体系を理解し、さらに心理学を考える 上での入口としたい。	
	スポーツ実習1	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツや身体表現の実践を 通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進をはかる。動きと表現、動 きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バスケットボール、テニス、バ レーボール、バドミントン、フットサルなど一般のスポーツ競技だけでなく、ダン スや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラスを構成する。自身が各種種 目、競技を体験することで、教員をめざすものにおいては、生徒を指導する際の技 術を実践的に学ぶものとする。	
	スポーツ実習2	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツ実習1につづき、ス ポーツや身体表現の実践を通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進 をはかる。動きと表現、動きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バス ケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサルなど一般のス ポーツ競技だけでなく、ダンスや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラ スを構成する。自身が各種種目、競技を体験することで、教員をめざすものにお いては、生徒を指導する際の技術を実践的に学ぶものとする。	
社会 実践 力 育 成 プ ロ グ ラ ム	大学連携プログラム	この授業は集中授業として開催を予定している。主に夏季休暇期間などを利用し、 国内外の大学間で連携した授業を開講する。各大学における共通した専攻分野ある いは異なる分野の学生が一同に会し、共同で1つの目的に沿ったワークショップや 演習などを通じ、それぞれの分野における学びを共同体験する中で生まれる新たな 知見や技術を修得する。授業はグループワークなども取り入れたものとなるが、各 グループは原則として別々の大学、学部のもの同士で構成されるものとし、授業を 通じた新たな視野の獲得に重きを置いた形で開催する。	
	インターンシップ1	この科目では、自由で創造的な未来を築くためにはどのような社会へのかかわりが 求められていくのか、社会問題解決に向けたイノベーションを実践するNGO・NPOで の活動を通して、「組織人」としてではなく「社会人」「地球人」としての社会の 関わり、働き方を考える。日ごろの大学での学びが社会でどのように役□つか、そ の社会的な役割や意義を□解するとともに、学ぶ楽しさや面白さの気づきを、「幅 広い業種での職場体験」を通じて検証する。	
	インターンシップ2	企業や行政機関が独自に募集を行うインターンシップ先や、全国の経営者協会等が 斡旋するインターンシップ先の中から、希望するインターンシップ先を探し出し、 許可を得てきた学生に対して、その自主的な活動をバックアップすることを目的に して開講されている科目である。自らが受け入れ先を探し、交渉まで取り組むこ とにより、自らの取り組みたい関心を深め、意欲を高め、より充実した体験を通じた 自らの職業観、社会人としての能力向上をめざす。	
	海外ショートプログラム	この授業では本学が用意する世界各地が舞台となる。海外の現場での学修を通し、 学生がグローバルな視野を獲得する契機とする。学修目的を大きく「語学研修型」 と「テーマ設定型」の2種類に分け、それぞれのプログラムごとの目標に向けて、 1週間から4週間程度、海外の教育機関等の現場で受ける実地研修を通し、異文化 での生活を体験しながら行う学びによって、グローバルな視野を獲得し、より高度 な学修への動機づけを行う。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れ る前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予 定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。	
共通 教育 科目			

社会実践力育成プログラム	国内ショートプログラム	この授業は本学が用意する日本各地が舞台となる。前期・後期ともに国内のフィールドを選定し、担当教員による事前指導の後、現地での約一週間の引率指導、地域研究を実施する。歴史、文化、自然、環境、生活、社会問題などを切り口にテーマを設定し、現地での見学、交流、体験、実践を通して、各フィールドにおける知識、理解を深め、そこから日本あるいは世界を相対視することを目的とする。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れる前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。		
	産学公連携PBLプログラム1	チームで活動するとはどういうことかを理解した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、本学が連携先とする企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自他肯定感」「自在に人と関わる力」を身につける。企業等からの課題は具体的であり、学内だけではなく学外でも積極的に活動することが求められる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。		
	産学公連携PBLプログラム2	「産学公連携PBLプログラム1」の受講を経て課題解決活動とはいかなるものかを体得した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自他肯定感」「自在に人と関わる力」をさらに伸ばすための科目である。特に受講生自身が設定した成長目標をどのように達成するかに重点が置かれる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。		
共通教育科目	キャリア科目	キャリア1	1年次の第1クォーターに置かれる、全学生対象の必修科目である。卒業生の実例をもとに卒業後の多様な進路の可能性を示すことで、入学者が抱える将来に対する不安を和らげ、進路に対する視野を広げ柔軟な考えを持てるよう促す。また、学生一人一人の強みや弱み、傾向を把握したうえで「将来何がしたいか」を考え、そのために「大学生活をどう過ごすか」の各々の目標設定を行い、大学での学びや生活と社会、進路との連続性に対する意識を醸成する。	
		キャリア2	インターンシップに関心を持つ学生を対象とし、インターンシップ参加前には学外企業や団体等とやりとりをする上で必要不可欠なメールや電話対応、文書作成等の一定のビジネスマナーを身につける。「インターンシップ1」「インターンシップ2」を受講する学生は本科目を必修とし、インターンシップ参加後はインターンシップで体験、観察、獲得したことについて振り返り、成果を報告書としてまとめ発表を行うことで、インターンシップに関心を持つ他学生への情報共有も行う。	
		キャリア3	主な進路として国内外の企業への就職を希望する学生が対象となる。業界や職種の種類や仕事内容、多様な働き方やその仕事に必要な要素に関する理解を深める。そのうえで、社会で自身がどのような役割を果たしたいか、それをどのような仕事を通して実現させたいか、大学時代のこれまでの学びから生かせる自身の強みは何か、その仕事をどう探すか、など、仕事に対する考えや意識を具体的に明確にし、それを他者に言語化して伝えPRにつなげるための実践的な授業を行う。	
		職業研究	この授業は、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、まず職種研究として、「営業職」「企画・管理職」「事務職」「サービス・販売職」などのいわゆる「職種」について理解することからはじめる。その次に、実際に仕事に従事している人をお招きし、個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。	
		ベンチャー・ビジネス論	高度な成熟化社会の到来とグローバルな視点での経営環境の変革期を迎えた中で、日本経済の持続的な成長のためには、イノベーションを成し遂げ新規事業を創造していくことが求められる。そして、その担い手として期待されるのが、企業家精神あふれるアントレプレナーに率いられたベンチャー企業存在である。本講義では、ベンチャー創造の枠組みについて、先進事例の紹介などもまじえ、イノベーションやアントレプレナーシップ、ベンチャー企業の誕生と成長など、幅広い視点で講義を進め、事業創造の主体としてのベンチャービジネスに求められるマネジメント能力などに関する知識の習得を図る。	

スポーツとビジネス	スポーツ産業における、特にイベントビジネスの位置づけと特性、イベントの構造や優れたイベント運営についての理解を深め、市民レベルのイベントを運営する際に必要な知見を学習する授業である。履修者は、本講義を受講することによって、(1)イベントの運営を評価する力や、(2)イベントの持つ社会的機能について考える力を身につけることができる。さらに、優れたイベントとするための運営ノウハウを習得することができる。	
表現活動と経済	「芸術と経済」は「水と油」のような関係として理解されるかもしれない。しかし、芸術活動も歴とした経済活動である。芸術の創造者は経済学の言葉で表わせば供給者であり、芸術作品を購入したり楽しんだりする鑑賞者は需要者である。このような供給者と需要者が、モノの売買取引する場を「市場」と呼んでいる。そこで、この授業では芸術作品に焦点を当てながら、市場取引の経済学的なメリットとデメリットを理解して欲しい。さらに、芸術を含めた文化財が市場主義に馴染まない側面についても言及していきたい。	
クリエイティブの現場	この授業では、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、主に「クリエイティブ」業界と言われる分野の職種について理解する。次に、特に履修者が卒業後の自身をイメージできるような卒業生を中心に、実際に仕事に従事している人から個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。	
日本の企業文化研究	本学に多数在籍する外国人留学生の中には日本での就職をめざす学生も多い。これから就職活動をはじめめる3年生の留学生には特にその点において苦戦する学生も多いことだろう。この授業では、外国人にはわかりづらい日本企業独特の制度や文化について学び、以後の就職活動における心理的な負担の解消と諸制度理解の不足による事務的な手続き等の失敗の防止を支援する。授業では、進路を決定した4年生の留学生をゲストとして招き、先輩からの助言を直接受ける機会も置くこととする。	
ポートフォリオ実習1	デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。厳しいクリエイティブ職採用の中、本格的な就職活動が始まってからでは準備不足が原因で不本意な結果が予想される。一度制作しても就職活動をしながら業界・職種別に更にブラッシュアップが必要となってくる。この授業ではポートフォリオ制作初心者が、最低限、今後の就職活動に必要な、採用に関わるポートフォリオの土台作りとして、必要な知識、スキルを身につける。	
ポートフォリオ実習2	デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。「ポートフォリオ実習1」の履修者を対象とする。したがってこの授業はポートフォリオ制作の経験を有するものを対象とする。デザイナー、プランナーなどのクリエイティブな企業をめざす学生に対して、今後の就職活動で必要となる採用に関わるポートフォリオについて、効果的に伝えるために必要な知識、スキル、テクニックやノウハウを身につける。	
コミュニケーション実践演習	この授業は、相手の考えや意見をきちんと理解し、自分の気持ちやアイデアをわかりやすく説明できる「コミュニケーション力」をアップさせることを目的とする。コミュニケーションのスキルは、定形を覚えるだけのマナー講座などでは身につかない。即興演劇、インタビュー、グーグルの社内研修で用いられているマインドフルネスなどさまざまな手法を使って、人前で自分をオープンにする姿勢を築き、その場しのぎではない本物の聞く力、話す力を養っていく。	
美術概論1	「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。この授業は、本学で学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野を通じて、人間がなぜ美術を必要とし発展してきたかといった、美術と社会、美術と生活などとの関わりを知り、芸術としての美術について理解を深めながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。	

美術史 1	この講義では、本学の学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野の表現の歴史とその作品や成り立ち、表現技法との関わりから現代にいたるまで、各分野における美術表現の変遷についてを学ぶ。また制作表現を行う上で重要な関係にあるこれらについて、理解を深めるとともに各自が自身の表現の立ち位置を確認しながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。	
美術リテラシー 1	「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。この授業では、本学で学ぶことのできる洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる分野それぞれの表現の基礎知識と、その表現方法を実践を通じて学ぶことによって、創造的な表現と作品の鑑賞の能力を身につけることで、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
美術リテラシー 2	造形芸術あるいは造形美術は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。美術リテラシー 2 では、美術リテラシー 1 に続き、洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる各分野の表現の基礎知識とその表現方法を実践を通じて学ぶことによって、さらなる創造的な表現と鑑賞の能力を身につけ、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
美術特講 1	20世紀半ば以降、文化や芸術に関わる理論的探究は、その裾野を狭義の美学や芸術学を超えた領域（たとえば記号論、精神分析、ジェンダー論、ポスト・コロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ、メディア論、など）にまで押し広げた。こうした経緯を念頭に、まず「表現」と「表象」の違いについて理解した上で、美術にとどまらず映画、音楽、演劇、文学などの幅広い領域から作品、作家、運動を紹介しながら、自らの「表現」の素材や契機として時代と社会から何かを掴み取るための思考を促す。	
美術特講 2	「現代アート」は、従来の枠組みを破壊し、新たな表現を求めることで発展してきた。それは、わたしたちの感性に訴え、理知的に問題を提起するとともに、一方で私たちの欲望を掻き立てている。こんにち、私たちの社会においてそうしたアートや芸術はどのような意味をもつのだろうか。あるいは、それをどのように経験することができるのか。この授業では、主に20世紀後半から現在までのアート作品を通じたこれらの問いへの答えを考察する。	
デザイン概論 1	デザイン学部にある、ビジュアルデザイン、プロダクトデザイン、建築、イラストをはじめ、ゲーム・アプリ・Webなどのインタラクティブデザイン、動きをデザインするモーションデザイン、地域や社会をデザインするソーシャルデザイン、インフォメーションデザイン、UIやUXなどの行動デザイン、人と人をつなぐコミュニケーションデザイン、デザインシンキングなど、世の中には様々なデザインと名前のつく物事がある。それら様々なデザインの事例と内容を紹介し、デザインの領域やデザインの役割など、デザインについての理解を深めデザインについての基礎知識を身につける。	
デザイン史 1	本講義では、産業革命以降のプロダクト、建築、インテリア、ファッションなどの近代デザインの歴史をたどっていく。住宅、車、テレビ、スーツ、椅子、スプーンなどのデザインされたものの生産史だけではなく、そのものがどのように流通し、私たちの生活空間のなかに受け入れられてきたのかを学んでいく。さらに、展覧会などを通して事例を紹介することで、それらの素材の特性や技術の仕組みを理解する。このような講義を通じて、作り手の立場から、いかにして近代デザインの歴史から今日のデザインを読み解くことができるのかを探っていきたい。	
デザインリテラシー 1	デザインという行為には目的とプロセスがある。デザインの目的は様々な課題を解決するためにある。そして、デザインを行うには考え方や進め方にプロセスがある。課題を見つけ出し、理解を深め、リサーチを行い、アイデアを導き出し、プロトタイプを制作して、テスト運用を行う。デザインの目的とプロセスを理解することで、デザインと人との関係、デザインと社会との関係、デザインとビジネスとの関係など、デザインの意義を学ぶ授業。	

デザインリテラシー2	デザインは社会とつながっており、社会とつなげるために必要な基礎的な概念の1つがマーケティングである。マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し（製品、サービス、そしてアイデアという形をとる）、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、主にマーケティングの基本概念的ななかから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身や自身の作品などを価値のある魅力的な商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
デザイン特講1	デザインという行為を届けるためのしくみがメディアである。メディア (media) という単語の単数形、メデイウム (medium) には、死者の言葉を現世に伝える「霊媒」という意味もあるように、それは発信者と受信者の「間」にあって、何らかのメッセージを運ぶ乗り物のような存在である。普段の生活ではあまり意識はされていないが、私たちはメディアを通じて、世界を理解し、世界にメッセージを送っている。本講義では、視覚文化研究 (ヴィジュアル・カルチャー・スタディーズ) の視点から、視覚的イメージと人間の関係、社会のなかでのはたらきを考えることを目指したい。	
デザイン特講2	考古学や人類学などの領域において、物質文化 (マテリアル・カルチャー) 論は、以前より重要な方法論として存在してきた。文献を資料とする歴史学とは違って、それらの分野は、過去の遺品や、異文化において使われた物品など——すなわち「モノ」——を第一次資料として、研究の対象としてきた。たとえば現代人が使っているさまざまなモノも、また物質文化として研究対象となりうるのである。本講義では、物質文化論の視点から、デザイン、建築、都市と人間の関係を再考することを目指す。	
マンガ概論1	マンガをマンガたらしめるものは何だろうか。現代において、マンガは絵画・文学・映画など様々な表現領域から影響を受けながら今日の隆盛を迎えるに至った。この授業では、それらのジャンルとマンガの共通点と相違点を踏まえ、マンガはどのような表現領域なのかを考察する。またマンガと他の領域とのインタラクティブな関係に目を向け、こんにちの社会や文化の中でマンガが果たしている役割とこれからの可能性について多面的に考察する。	
マンガ史1	マンガについて理論的に学び批評・制作を行なっていく上で、基礎知識となるマンガの作品・作家、出来事や研究状況について歴史的に考察する。ただし「歴史的に考察する」とは言っても、単に関連情報を年代順に羅列して覚えていくわけではない。視覚表現・メディアとしてのマンガを構成する諸要素やその時代の変化に注目しつつ、「マンガを読む」という行為が日常生活に定着するまでの歴史について、多角的に考察していくことを目標とする。	
マンガリテラシー1	マンガは線、コマ、フキダシ、擬音など様々な要素から構成されている。マンガに日ごろ触れることのない人がはじめて目にした際、「読めない」と聞く。この授業では、マンガが発展の中で生み出されてきたそれらの諸要素や効果をどのように活用し、意味やメッセージを伝えているのかを分析する。またその諸要素からどのようにしてキャラクターや世界観が生み出されているのかについても考察し、マンガを描くこととマンガを読むことがどのような営為であるのかを根本から考えることを目的とする。	
マンガリテラシー2	アニメーションとマンガは似ているようで異なる表現手段である。日本においてはマンガを原作とするアニメーション、あるいはアニメーションのコミカライズなどが多数生み出されてきた。本講義では日本のコンテンツにおいてマンガとともに発展してきたアニメーションに焦点をあて、その表現がどのようにして成立したかを歴史的に考察し、また技術的側面からもアニメーションという表現の特異性を探る。連続した絵や立体から動きを生み出すアニメーションという表現領域の持つ魅力を深く知ることを目的とする。	
マンガ特講1	マンガはその時代の社会が持つ様々な問題を内包し、それらと関わりながら発展してきた。本授業ではマンガと社会の関わりを様々な角度から考察し、マンガが社会の中でどのような役割を果たしてきたか、そして今後どのような役割を果たしうるのかを実践的に考える。その中で特に今日の社会において課題となるジェンダーや人権について改めて学ぶことで、その時代その時代における価値観の中で生み出されてきたマンガを批評的に読み、制作する態度を身につけることを目的とする。	

マンガ特講 2	日本は世界有数のマンガ大国であり、質・量ともに高いレベルのマンガを生み出し、読者はそれを享受してきた。しかし世界各地に目を向けると、それぞれの地域にはそれぞれのマンガ文化が存在し、それもスマートフォンなどのさまざまな技術の進化や各地の事情により変化してきた。それらはその地域の伝統も踏まえ、日本マンガにはない様々な魅力を有している。本講義ではそれら世界のマンガについて学び、マンガの持つ可能性を改めて認識し、また翻って日本のマンガの特異性を考えることを目的とする。	
メディア表現概論 1	この授業では、「メディア」とはどのようなものであるかについて概説する。具体的には、メディアと情報に関する環境と歴史を概観したうえで、メディアをどのように活用し、「コンテンツ」を作成していくかの表現技能について触れる。この授業を入口とし、専門的な学びに触れていく中で、最終的には、新しい価値を創造するための知識・思考力・表現技能を身に付けることで、他者理解や社会の課題解決に寄与する人材の育成を目指す。	
メディア表現史 1	この授業では、「メディア」を成り立たせている技術と表現の歴史的な相互作用について、人類史の観点から概観する。印刷技術や写真、録音等、情報の記録や複製を可能にするメディア技術は、社会の仕組みを再構成し、現在に至るまで生活の中に深く組み込まれている。そうしたメディアの歴史的背景や、メディアの普及とともに生まれた表現を理解することで、現在のメディア環境がもつ可能性についても洞察を深められるようになることを目指す。	
メディア表現リテラシー 1	大学におけるさまざまな授業では多様な機材を使用する。日常的に使用する機器の多くは、取扱説明書を読まなくとも使用できるものも多い。また、ユーザーは使用するうえで支障がなければ、機器の仕様などについても把握せずに使用しているものも多いだろう。しかし、授業で使用する専門的な機材においては、そのスペックを把握し、使用方法を熟知しておくことで格段に完成度の変わるものもある。本授業では、実際に使用する各種機器を使いながらその取扱説明書の読み方、スペックの把握を通じ、それらの機材の性能を100パーセント引き出すための術を身につけることを目的とする。	
メディア表現リテラシー 2	この授業では、授業で使用する機材に関する取扱説明書を作成することに取り組む。取扱説明書はその機材に関する性能や、期待される効果について熟知し、そのうえで、他者にわかりやすく伝えるための資料である。取扱説明書の作成を通じ、使用する機材について「完全に」その性能を理解するとともに、使用中に起こりうるさまざまなトラブルなどを検証する。この授業を通じ、学生は自ら、情報を獲得する術と、使用者の理解、他者へ伝える力を身につけることを目的とする。	
メディア表現特講 1	この授業では、「メディア表現」をめぐる今日の話題を取り上げ、さまざまな事例をもとに、多面的かつ徹底的に論じる。特に、音楽や映像、ゲーム、インタラクティブアートといった領域における先進的な表現に焦点を当て、メディアを駆使したクリエイティビティについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、当事者であるデザイナーやアーティスト自身を授業内でゲストに招き、講演やワークショップ形式による授業を実施する。	
メディア表現特講 2	この授業では、「メディア表現」をめぐる今日の話題を取り上げ、多面的かつ徹底的に論じる。特に、メディアを活用したビジネスやサービス、社会活動といったさまざまな領域における先進的な実践事例に焦点を当て、メディアデザインを通じた社会との関わりについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、実際に事業に取り組む企業などの当事者をゲストにお招きし、講演やグループワーク、ワークショップ形式による授業を実施する。	
和の伝統文化論	この授業は、日本の伝統的な文化や芸術の特質と意義を深く考察することで、今ある私たちの文化のあり方を見つめ直すことを目的とする。現代に脈々と受け継がれてきた能楽、歌舞伎、茶の湯、生け花など、幅広いジャンルの伝統文化について学習する。さまざまな伝統文化は、時代をさかのぼることで、その根底においてつながっていること、現代社会においてどう活かされているのかについて学ぶことで、現代に生きる我々の文化とのつながりを理解することをめざす。	

京都のまちづくり	この授業では、日本における京都の「都」としての位置づけとその後の展開過程について、各時代の変遷をたどりながら、地形、景観、建築、産業構造などさまざまな視点を軸とし、まちづくりの進められ方を考察する。また伝統文化や建造物が多く存在する「まち」として、その都市計画や景観づくり、産業、交通等が各時代においてどのように検討されてきたかを歴史的にたどり、現代の都市としての京都が形成される経過を学び、日本において特異な変化を重ねた京都と、他の都市との共通点、差異などを知る端緒とする。	
京都の伝統工芸講座 1	この授業では、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。	
京都の伝統工芸講座 2	この授業では、「京都の伝統工芸講座 1」につづき、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。	
京都の習俗	京都には、人々の暮らしの中で、食、住まい、ならわし、季節の行事、祭りといった様々な伝統文化が今なお息づいている。この授業では、それぞれの習俗がどのような歴史的な背景を持ち、現代まで継承されているのか、また途絶えようとしているのか、その意義と変遷について文献や聞き取り調査の資料を基に検証しながら解説する。変化する社会の中で変わり続ける価値観などを知り、現在に生きる我々にとっての習俗の意味について考察する。	
京都の伝統産業実習	この授業は、1200年以上の歴史を持つ京都の伝統工芸、伝統産業の現場で実習をするインターンシップを軸とする授業である。事前指導を受けた後に、受講生は本学が指定するさまざまな伝統工芸、伝統産業の現場で直接指導を受ける。「手技を学ぶ」、「歴史・文化的背景を学ぶ」、「環境を学ぶ」など、日ごろ、制作活動を学びの中心とする学生から、日ごろはことばを軸とした学びに取り組む理論系の学生まで、様々な学部、専攻の学生が実習できるプログラムとする。	
ファイナンス論	現在の日本では、証券市場やそれに関連する事柄が大きな注目を集めており、企業活動においても、また個人の生活においても浸透している。この講義の内容は、それを理解するために必要であるとともに、ファイナンス分野を理解するための基礎となるものである。授業では、(1) 証券に関する基本的な知識をつける、(2) 債券と金利の基本概念を理解する、(3) 企業財務の基本的知識をつける、という3つの大きなテーマについて学ぶ。	
マーケティング論	マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し（製品、サービス、そしてアイデアという形をとる）、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、マーケティングの基本概念的なことから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身の作品を商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
ビジネスモデル論	ビジネスモデルは、企業が収益を上げるためだけでなく、競争優位の確立・維持においても大変重要な概念である。特に近年、消費者と企業間の連絡手段として、インターネットなどの新たな情報技術を活用し、一連の商行為を整理、システム化し、収益性を高めた新規性のある事業形態が登場したことで、注目されるようになった。この授業ではビジネスモデルとは何かを理解し、それを踏まえて、各人が特定のビジネスモデルを想定し、現実的に創業できるレベルのプランを作成する。	

イノベーション論	国内外における企業のイノベーションの事例、国内地域の行政やNPO法人におけるソーシャル・イノベーションの実例を学び、イノベーションが何故生じたか、それらが如何なる工夫の中で完遂され、新たな価値創出が成されたかについて学ぶ中から、イノベーションの本質を自らのものとしていく。また事業化するための考え方・方法論を具体的なケースを通して知ることにより、現在学んでいる自分の専門について、将来の可能性を模索する。	
ソーシャルビジネス演習 1	近年、ソーシャル・ビジネスの台頭、営利企業のCSR/CSV戦略化、非営利組織の事業化、というように、異なる基盤を持つ多くの組織が「事業性」と「社会性」の両ミッション（デュアル・ミッション）追求という共通の方向性を見出すようになってきている。 この授業ではソーシャル・ビジネスを、これらを含めた大きなムーブメントの中でとらえ、その関連する諸概念、発展過程、経営の実際、課題を多面的に事例を紹介しながら検討する。	
ソーシャルビジネス演習 2	環境問題や少子化、高齢化、貧困、地域再生など、複雑化し成熟化した社会において浮上している昨今のさまざまな社会的課題は、これまでのように国や自治体が担う公共サービスや営利企業が市場の中で提供する商品やサービスだけで解決することは難しくなりつつある。すなわち、これまでの枠組みや仕組みに基づいてより良い社会を構想し、形作っていくことはもはや困難であり、従来とは異なる対処方法が求められている。こうした状況の中、近年、NPOや社会的企業、企業の社会貢献活動、各セクターの協働等、社会をより良くしていくことを目指したさまざまな取り組みが広がってきている。このような社会をより良く変えていこうとするさまざまな営みのひとつにソーシャルビジネスがある。 本授業では、各種事例や諸研究からソーシャルビジネスを概観し、特にその主たる担い手であるNPOに着目し、組織の特徴、意義、歴史、諸制度等の基本事項を学習し、そのマネジメントについて考える。マネジメントを考えるにあたっては、行政や企業など外部との関係に着目するとともに、一般論を踏まえ、できる限り具体的な事例に基づき考究する。	
アフリカ・アジア概論	2000年代以降の世界の政治経済、そして文化の台風の目となったアフリカ・アジア地域。これらの地域の「発展」の過程は、欧米のそれと同じものではない。テクノロジー、経済、政治、そのすべてが、20世紀までの大国の影響を受けつつ、これらの地域独自の路線を歩んできた。この講義では、これからこの地域について、あるいはこの地域で学ぶ学生の前提となる知識、すなわちアフリカ・アジアの歴史、地理、政治経済、そして人びとの生活に関する知識を学び、これらの地域に関して包括的に理解することを目指していく。	
アフリカ・アジア史	かつて開発途上国と呼ばれたアジア諸国、最貧国と呼ばれたアフリカ諸国は、過去には想像もつかないほどの「発展」を遂げつつあり、もはや「貧困」という枠組みだけからは、これらの地域を語ることは正しくない。そこで、本講義は、アフリカ・アジア諸地域の現在の概略を紹介し、現代のアフリカ・アジアの躍動の原動力を明らかにし、これからアフリカ・アジアを舞台に活躍する受講者が、どのようにアフリカ・アジアを理解すべきかを考察する足掛かりをつかむことを狙いとする。	
アフリカ・アジアリテラシー 1	文化が「知識、信条、芸術、法、道徳、慣習などすべてを含みこむ複雑な総体」（タイラー）であるとする、その多くは宗教によって下支えされてきた。私たちが学ぶアフリカ・アジア地域は、三大宗教が生まれ、そして現在までその形を様々に変えて宗教が人びとの生活に根付いている。そこで、この講義では、アフリカ・アジアにおける宗教動態に着目し、宗教と文化の関係を人びとの生活レベルからせり上げて理解することを目的とする。講義は、文化人類学や宗教社会学、そして宗教学の文献を読み込むことによるが、講師の生の体験は、履修者のアフリカ・アジアで受けるカルチャーショックを和らげることも目的とする。	
アフリカ・アジアリテラシー 2	21世紀に入り、中国の経済的台頭に伴い、世界の政治経済のパワーバランスは大きく変革した。今後、インド、アフリカの経済力上昇に伴い、さらにこのバランスは大きく変わっていくことが予測され、私たちの生活は、アフリカ、アジア抜きには語れなくなってくるだろう。この講義では、中国をはじめとするアジア諸国を中心とした現在の世界の政治経済の状況を踏まえつつ、インド、アフリカの将来展望を学び、未来志向型の政治経済のあり方を模索していく。	

共通教育科目	マイナー科目	アフリカ・アジア特講 1	アフリカ・アジアの多くの地域が温帯から熱帯気候の温暖な気候帯に位置している。人びとは豊かな自然から農林水産資源を享受し、巨大な人口を維持してきた。しかし、例えば、砂漠化や洪水、さらに土壌海洋汚染など、この地域の環境問題は近年益々深刻な問題となり、それは人びとの生活を脅かそうとしている。この講義では、現在アフリカ・アジアで起こる環境問題を概観し、現在の環境問題への取り組みを解説する。そして、現状を理解した上で、持続可能な社会を作るためにはどのようにすればよいかを考察していく。	
		アフリカ・アジア特講 2	その国、その地域の歴史を知ること、その文化や人を知る第一歩となる。しかし、本学科で着目するアフリカやアジアの歴史を、これまでどれほど学んできたのだろうか？受講者の多くが、これから活躍するアフリカやアジアがどのような過去をたどり、現在、どのような方向に進もうとしているのか。巨大な地域と人口を抱える、この地続きの大地には多様な歴史が埋もれているが、西欧との関係で考えたとき、共通項は思いのほか多いはずである。そこで、本講義では、近代以降のアフリカ・アジアの歴史の大きな流れをつかみ、講師が専門とする地域のいくつかの事例を学ぶことで、アフリカ・アジア地域の理解の端緒を開くことを目的とする。	
		日本事情理解	現在、日本を取り巻く環境は刻々と変化している。特に近年は外国人技能実習制度や日本に住む外国人の子どもなどの日本語教育の問題等、これからの日本のあり方を考えていく上で無視できない喫緊の課題が山積みとなっている。このような状況を踏まえ、本講義では、国際社会と日本の実情とを比較しつつ、これからの日本における「多文化共生」のあり方について様々な視点から深く考え、それらと日本語教育の実践とを関連づける能力を養う。	
		言語と心理	本講義では、日本語教育において重要である日本語学習者の言語理解を実現する情報処理のプロセス、推測能力、記憶のメカニズムをはじめ、言語教育に必要な言語習得の理論、認知過程に関する心理学、認知言語学等の基礎的知識について学ぶ。また日本語学習者が異文化との接触によって表面化する「心と文化」の問題について、特に発達心理学や異文化間教育の観点から深く考察し、言語教育における(心理的)学習のメカニズムについて学ぶ。	
		言語と社会	本講義では、広く国際社会の動向から見た国や地域間の関係性を踏まえ、現代社会においてはあたりまえに発生する「異文化接触」に伴って起こる「言語現象」や各国の「言語政策」、「言語変種」、「言語運用のルール」、「言語・非言語行動」、「社会文化能力」等を学ぶ。履修者は、さまざまな社会文化的背景を視野に入れ、個人々の言語使用を具体的な社会文化的状況の中で捉える力を養うことで、日本語教育において必要な基礎的知識を獲得する。	
		日本語学	本講義では、日本語教育において必要とされる現代日本語の音声・音韻、語彙、文法、意味、運用等に関する基礎的知識を学ぶことを第一の目的とする。これに加えて、一般言語学、対照言語学等の知見を活かして、日本語と他の言語とを比較する能力、さらには「言語現象」を客観的に分析する能力を養う。講義全体を通して、日本語学習者の誤用の原因を探り、履修者が日本語教育を担う際に、適切な指導を行うための基礎力を養成する。	
		日本語教育演習 1	この演習では、比較的少人数の授業で、日本語教員をめざす履修者に対し、日本語教員として必要とされる資質・能力をはじめ、コースデザインや各種シラバス、教授法、評価等についての基礎的知識を学ぶ。また教案作成や模擬授業等の実践活動を通じて具体的な日本語の教え方を学ぶとともに、学習者にとってどのような活動が教育的効果が高いのかを考える。以上の学びを通じて、変化の激しい現代の日本語教員として必要とされる総合的な教育能力を養う。	
		日本語教育演習 2	この演習では、「日本語教育演習 1」につづき、日本語教員をめざす履修者を対象に、日本語学習者の具体的な学習活動や教授法・評価の問題、学習者の誤用に関する問題、教材に関する問題等、日本語教育における様々な課題について、これまで蓄積されてきた研究論文等を精読し、それらの問題を解決するための具体的な方策について受講生全員で議論を行う。そこから得られる学びを通して多様化する日本語教育のいかなる現場でも柔軟に対応できる人材の育成を目指す。	

基礎演習科目	基礎演習 1	1年次第1クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学系の学びに即して学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、文学専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 2	1年次第2クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学系の学びに即して学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、歴史専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 3	1年次第3クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学系の学びに即して学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、社会専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 4	1年次第4クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、ディスカッションなどの基礎的な研究方法を、とくに人文学系の学びに即して学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。人文学科を構成する「文学」「歴史」「社会」「日本文化」の4専攻のうち、日本文化専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、人文学科の学びの一端を理解する。	
	基礎演習 5	2年次第1クォーターに置かれ、文学専攻、歴史専攻、社会専攻、日本文化専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。この演習は開講するすべての担当教員のクラスが開かれている。履修生は自身が所属する専攻のなかで、その間に異なるゼミ担当者のクラスを2つ参加した上で、2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。	
	基礎演習 6	2年次第2クォーターに置かれ、文学専攻、歴史専攻、社会専攻、日本文化専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。基礎演習5と同様に、履修生は自身が所属する専攻のなかで、異なるゼミ担当者が開講するクラスに2つ参加した上で、2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。	
応用演習科目	応用演習 1	2年次第3クォーターに置かれ、自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習1」は、これ以降、ゼミ内で取り組む卒業論文の作成にとっての第一歩であり、その意味では自らが定めたテーマを専門に研究するための導入科目となるため、所属するゼミの専門的な学びにとって基本となる文献の講読や現地調査、作品研究などに取り組むことによって、自身の卒業論文の作成にとって必須の専門知識や方法論を習得する。	
	応用演習 2	2年次第4クォーターに置かれ、「応用演習1」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習2」では、担当教員の指導のもとで3年次第1クォーターで履修する「長期フィールドワーク」での学びを、所属ゼミの学びに引きつけながら計画することによって、各自が自らの学問的な関心に従ってテーマを定め、調査・研究を行なう「卒業論文」に取り組むための自主性を身につける。	

応用演習科目	応用演習 3	3年次第1クォーターに置かれ、「応用演習2」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習3」では、自身が履修している「長期フィールドワーク」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「長期フィールドワーク」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
	応用演習 4	3年次第2クォーターに置かれ、「応用演習3」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習4」では、自身が履修している「長期フィールドワーク」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「長期フィールドワーク」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
	応用演習 5	3年次第3クォーターに置かれ、「応用演習4」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習5」では、各ゼミ内での専門的な方法論の習得と並行して、「卒業研究演習3」での上級生の卒業論文の口頭試問を聴講し、それについてのゼミ内でのディスカッションを行なうことによって、自身の卒業論文のイメージを確定させるとともに、これを完成させるために4年次の「卒業研究演習1」ならびに「卒業研究演習2」において習得すべき技能や知識や、実行すべき作業を自覚する。	
	応用演習 6	3年次第4クォーターに置かれ、「応用演習5」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習5」では、3年次第1および/あるいは第2クォーターで履修した「長期フィールドワーク」での学びと、これと並行して「応用演習3」で取り組んだ調査・研究に関する報告書を作成する。また、その内容を他者を意識しながら視覚的にも理解しやすい展示形式へと落とし込むことを演習形式で体験することによって、自らの学びの成果を他者へ伝達するための技能を習得する。	
	卒業研究演習 1	4年次第1クォーターに置かれ、「応用演習6」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文の構想の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の作成を進めていく。	
	卒業研究演習 2	4年次第2クォーターに置かれ、「卒業研究演習1」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文作成の途中経過の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の完成、さらに提出までを行なう。	
卒業研究演習科目	卒業研究演習 3	4年次第3クォーターに置かれ、「卒業研究演習2」の終わりに提出した卒業論文について、自身の所属する専攻のすべてのゼミからなる合同クラスのなかで、この専攻に所属する教員全員による口頭試問を受けるための必修科目である。所属するゼミ内での口頭試問の準備を通じて自身の卒業論文の優れた点と不十分な点を把握するとともに、他の学生の口頭試問を聴講することによって、自らの所属ゼミでの学びをいっそう広い専攻の学びの中に位置付け、学術的な視野を広げる。	
	卒業論文	4年次第3クォーターに置かれ、人文学科における4年間を通じた学習・研究・調査の成果をまとめ、学術論文として提出する。学生個人でテーマや課題を設定し、それに応じた研究・調査・論文作成計画を立て、一定の書式を整えた学術論文の作成に必要な知識や技能、研究・調査方法を身につけた上で、ゼミ担当教員の指導のもとで、1年以上の時間をかけて、24,000字から48,000字程度の分量で卒業論文を書き上げる。自らの4年間の学びについて、その内容を専門的知識や技能に依拠しながらわかりやすく説明する技能を獲得する。	

専門演習科目	卒業発表	4年次第4クォーターに置かれ、自らが作成した「卒業論文」の内容を分かりやすく、かつ印象的に他者に伝えるための方法を演習形式で実践的に学ぶための必修科目である。自身の「卒業論文」の主張ないし仮説、そしてそれを論証するための論理展開と説明とを、限られた情報量のなかにより要約することに加え、これを視覚的にも理解しやすい発表形式へと落とし込むことを演習形式で体験し、他者の視線を意識しながら自らの学びの成果を客観的に伝達するための技能を習得する。	
	国際文化概論1	グローバル化の時代と呼ばれるようになり久しいが、人びとの暮らしは、すでに何千年前から様々な地域との交流の中で成り立っている。私たちがその地域独特の文化だと考える人びとの文化的営みは、思いのほか様々な地域、文化の影響を受けながら作り上げられている。この講義では、歴史、文化、政治、経済と言った文化を構成する複合的な要素を概観し、現代社会の成り立ちを概説する。受講者は、そこから自らの興味関心を明らかにし、専門領域の基礎を上げることが望まれる。	
専門講義・演習・実習科目	国際文化概論2	日常的に私たちが接する様々な芸術。例えば、音楽や絵画、映画や詩は、作家の頭の中だけで構成されたものではなく、外の世界の様々な事象を異なる形に再構成し、表象されたものであると捉えることが可能だ。この講義では、世界的に影響をもったいくつかの芸術作品を事例とし、作家や作品がいかに構成されたか、また、それらが社会にどのような影響を及ぼしたかを知り、文化が持つ力を理解し私たちの生活における文化の位置づけを習得することを考えていく。	
	国際文化史1	わたしたちが日ごろ地域特有のものと思っている文化は、実は複数の文化が地域外から伝わり、長い時間をかけてその土地に根差していったものであることが多い。本講義では、いくつかの地域の文化交流史を紐解き、いかにその文化が交流し、変化し、固定化されていったのかをたどってみたい。そして、これらの文化交流が単なる偶然の産物ではなく、交流の背景には様々な文脈が隠されているはずである。この講義では、まず、歴史的な分析方法を習得し、いくつかの事例を通し、文化を史的な観点から理解することの重要性を理解することを目指す。	
	国際文化史2	この講義では、現存するアフリカ・アジアの文化事象を例にとり、その背景にある「宗教-政治-文化」や「社会運動-文化」と言った複合的な文化構成を学ぶ。これらの文化現象は、上部構造から押し付けられたものではなく、人間一人一人の生活や、人びとの交流からせり上げられたものであることが理解できるはずである。こうした視点に立てば、文化史は、年代記を超えた多文化間の交渉の観点から国際関係の変遷をとらえなおすし、グローバル社会の仕組みを習得することにもなる。本講義受講者は、事前、ないし同時に歴史学の基礎を学ぶ科目を受講していることが望ましい。	
	国際文化リテラシー1	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められる。「国際文化リテラシーII」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。アジアやアフリカの文化を事例として取上げ、多様な文化の存在を知り、その学び方を修得するとともに、自文化との差異を理解し、対等・平等に考える姿勢を身につける。	
	国際文化リテラシー2	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められる。「国際文化リテラシーII」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。言語、信仰、価値観、生活習慣の違いから生じる課題を理解し、文化を超えて相互理解し協働するために、どのような工夫ができるかを対話を通じて探索し、その方法を習得する。	
	国際文化特講1	人類はまだ誕生していなかった時代にも、「文化」と呼べるものがあつた。しかし現生人類が登場して以降、「文化」は人類社会の物質的、精神的な展開に必須のものとなった。この授業では人類出現以前の「文化」から、現代の「文化」まで、時間的にも、空間的にも縦横にテーマをとりあげ、さまざまな領域に関連させながら、人類にとっての「文化」の諸相を学ぶ。具体的には、「文化」の定義を明確化し、その定義が前提とする生物学的特徴を確認すること。「文化人類学」の諸分野について理解を深めることを狙う。	

国際文化基礎科目	国際文化特講 2	グローバル化にともない、日本にも外国人留学生や労働者が増えると同時に、海外に出る日本人も増えてきた。今後日本の生活文化についてその他のアジアの国や欧米の国々文化などと比較し、理解し説明することができる能力が必要とされている。本講座では、もっとも身近な日本文化を手がかりにしながら、常に世界の文化に興味を持つ姿勢を身につけ、それぞれの特徴や現代の課題を幅広い視点から探究することを目的としている。文化圏は、アジア諸国、欧米、アフリカ、南北アメリカ、アラブ地域など、テーマは伝統文化、宗教、現代社会、ジェンダー、芸術やメディアなど。(264字)		
	文学概論	上代から近代まで幅広く日本文学の諸作品を紹介しながら詩・小説・戯曲・随筆、評論といった様々な文学ジャンルの区別とそれぞれの特徴について理解した上で、フォーマリズムや物語の類型分析、ナラトロジーといった文学の内容と形式を分析するための構造主義的な方法論、さらに脱構築やクイア理論、ポストコロニアル理論といった文学に携わる主体のありようをも視野に入れた方法論を概観することによって、文学とは何か、文学表現とはどのような行為なのかといった根本的な問いについて考察するための視座を獲得する。		
専攻基礎科目	日本文学研究 1	上代、中古、中世の各時代から日本の文学作品が一つずつ取り上げられ、それらを主題とした研究が、各領域におけるその位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する文学専攻の学びと日本文学研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。		
	日本文学研究 2	近世、近代の各時代から日本の文学作品が一つずつ取り上げられ、それらを主題とした研究が、各領域におけるその位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する文学専攻の学びと日本文学研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。		
	歴史学概論	古代における歴史学の始まりから近代歴史学の成立にいたるまで、人類が様々な展開してきた「歴史の見方・語り方」に加え、それらの「歴史」と同時代社会との関わりを概観した上で、歴史学という学問的営みの特質、様々な歴史学の方法論の対象とその射程、歴史と叙述との関係などを理解する。また、社会史・民衆史といった近年の歴史研究の動向の意味を理解することによって、歴史学が持つ文化的・社会的な意義についても考察し、現代日本人として歴史を学ぶための基礎となる視座と歴史認識を獲得する。		
	日本史研究 1	古代、中世の各時代に関する研究がそれぞれに取り上げられ、各領域におけるその研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する歴史専攻の学びと日本史研究の具体的な研究調査手順を概観する。研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用実習2」「応用実習4・5」「卒業実習1・2」を選択するための指標を獲得する。		
	日本史研究 2	近世、近代の各時代に関する研究がそれぞれに取り上げられ、各領域におけるその研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する歴史専攻の学びと日本史研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。		
	現代社会論	日本の近代化から戦後の高度経済成長を経て今日にいたる日本社会の変化を視野に入れながら、現代日本社会がどのように形作られ変化していったのかを、産業構造の変化、都市化、家族の変化、メディア技術の発達といった観点から学ぶ。その上で、現代の私たちをとりまく社会の構造や人間関係がどのような様相を呈しているのかについて、ジェンダー、政治、自然環境、生活環境、経済活動といった複数のテーマに分け、具体的な問題や現象に関する報道などの紹介を交えながら理解することによって、現代日本社会が抱える諸問題を俯瞰的に見渡す視座を獲得する。		
	専門講義・演習・実習科目			

社会研究 1	理論的な性格の強い社会研究がいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する社会専攻の学びと社会研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
社会研究 2	実践的な性格の強い社会研究をいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する社会専攻の学びと社会研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業研究演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
日本文化論	能楽、歌舞伎、茶の湯、生花など、幅広いジャンルの日本の伝統文化に加え、今日、「日本」のものとして世界に発信されているマンガ、ファッション、ポピュラー音楽などのサブカルチャーを含めた現代文化について学習する。特に伝統文化については、その近接する他文化との影響関係と現代日本社会における継承のありよう、また現代文化については他地域での受容とそこでの変容のありようを考察することによって、「日本文化」を見つめ直すための包括的な視野を獲得し、ひいては伝統文化と現代文化に通底する日本文化の特質と意義を理解することを目的とする。	
日本文化研究 1	日本の伝統文化に関する研究がいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する日本文化専攻の学びと日本文化研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
日本文化研究 2	日本の現代文化に関する研究がいくつか取り上げられ、そのそれぞれの研究の位置付け、そこで用いられている研究の方法論、結論にいたるまでの具体的な研究手順とともに紹介されることによって、自らの所属する日本文化専攻の学びと日本文化研究の具体的な研究調査手順を概観するとともに、研究対象ではなく研究方法の観点から自らの所属するゼミ、ならびに2年次以降に自分の所属するゼミとは別に履修が可能な「応用演習2」「応用演習4・5」「卒業演習1・2」を選択するための指標を獲得する。	
講読演習 1	2年次第4クォーターに置かれ、専攻の各ゼミ担当者の研究領域において必須と位置付けられる重要な文献・論文を講読することによって、自身の卒業論文のテーマを決定する際の方向性を体得する。初回授業で文献・論文を担当教員が指示もしくは配布し、履修者は毎回の授業前の予習のなかで疑問点や議論を用意して授業に臨む。授業では、履修者から提出された疑問点について教員が解説することで履修者全員の共通理解を形成した後に履修者同士によるディスカッションを行なうことによって、各自が卒業論文で取り組むテーマを定める。	
講読演習 2	3年次第4クォーターに置かれ、専攻の各ゼミ担当者の研究領域において必須と位置付けられる重要な文献・論文を講読することによって、自身の卒業論文で用いる方法論を決定する際の方向性を体得する。初回授業で文献・論文を担当教員が指示もしくは配布し、履修者は毎回の授業前の予習のなかで疑問点や議論を用意して授業に臨む。授業では、履修者から提出された疑問点について教員が解説することで履修者全員の共通理解を形成した後に履修者同士によるディスカッションを行なうことによって、各自が卒業論文で用いる方法論を定める。	
長期フィールドワーク 1	調査の前提となる現地での生活と現地語の運用に慣れることを第一の目的としつつ、調査を進める上で利用することとなる交通機関や通信手段といったインフラ、さらに研究機関、図書館、博物館、アーカイブ、調査協力者といったリソースの現状を確認し、また現地でのみアクセス可能な情報なども反映しながら、事前に作成していたフィールドワーク計画を、指導教員による遠隔指導のもとで、いっそう具体的かつ実現可能なものに練り上げる。必要に応じて、現地の状況に即した調査計画の大幅な変更も行なう。	

長期フィールドワーク 2	「長期フィールドワーク 1」において練り上げたフィールドワーク計画に従って、参与観察、インタビューやアンケート、現地でのみ入手可能な資料や情報の収集といった調査を実行する。指導教員による遠隔指導のもとで、研究機関、図書館、博物館、アーカイブ、調査協力者といったリソースを利用するための具体的な手続きを行ない、事前に学習したフィールド調査の技法を実際に駆使しながら、予定されていた情報などを収集、整理、保存する。必要に応じて、調査の進展に即した計画の軽微な変更も行なう。	
長期フィールドワーク 3	「長期フィールドワーク 2」で行なったフィールドワークを通じておおよそ計画通りに情報が収集、整理、保存された段階で、その分析・解釈を現地で行なう。フィールドワーク計画を立案する際に参照した先行調査・研究等と、自身で行なった現地調査結果の分析・解釈とを対照させながら、暫定的な調査報告書をまとめ、指導教員に提出し、査読を受ける。調査報告書をまとめるなかで新たに得られた知見、さらに調査報告書を査読した指導教員からの指摘などに即して、追加の現地調査を立案・計画し、実行する。	
哲学概論	プラトンの対話篇に登場するソクラテスが説く倫理や、カントによる人間的思考の限界の追及、またフランクフルト学派による文化産業と現代社会の結びつきに対する糾弾など、各時代の主要な思想家を取り上げながら、哲学的思考にとって必要な基本概念を理解するとともに、それぞれが取り組んだ哲学的課題とその背景、さらに独自の思考の進め方を学ぶことによって、哲学そして哲学者が「時代」と切り結んだ関係が有していた「アクチュアリティ」を理解すると同時に、ひるがえって履修者自身が「現代」をアクチュアルに思考するための方法論を獲得する。	
倫理学	「善き生とは何か」という問いのうち、「幸福な人生とはどのような生か」という問いは、古代ギリシャ以来、多くの倫理学者たちにとって大きな問題だった。なぜなら、それは非常に難しい問題だからである。「幸せ」「幸福」とは一体どのようなものだろう。それは、ある一瞬の出来事だろうか、それとも一生の中でずっと続いているなければならない状態か。また、本人が満足していればその人は幸せだと呼べるのか、それとも何かそれ以外の条件を満たしていないと幸福な人とは呼べないのだろうか。講義では、古代から現代までの哲学者たちのテキストを紹介し、ビデオや映画なども見たりしながら、幸福について考えていく。	
心理学	心理学が個別科学として独立してから今日まで、人間の心理現象を実証科学的に探求する種々の試みがなされてきた。この授業では、「科学」としての心理学がどのように形成され、発展してきたのかについて紹介するとともに、実験心理学、発達心理学、社会心理学等、多岐にわたる心理学全般の基本的知見を概観することによって、心理学の目的と方法、さらに人間の生物学的基礎、心理的発達、感覚、知覚、意識、学習、記憶、言語と思考、動機づけ、情動、知能など、人の心の基本的な仕組みや働きを、日常生活の中で経験する様々な事柄と関連づながら生理解する。	
宗教学	本講義では、なによりも我々の「生活」をキーワードとし、宗教を捉える。21世紀を生きる我々にとっての日常「生活」と「宗教」を学び、これからの「宗教」の可能性と問題点を見いだしていく。現代社会の「生活」と「宗教」に求められているものとは何かを考えるため、これまでの宗教が果たしている機能とは何かを取り上げる。これらの目標を達成するために本講義では、基本的な宗教の概念および定義やその意味、宗教形態に関する概要をまとめ、宗教がもつ本来の役割とは何かを深く考察する。	
日本語学特講	この科目は、中世から近代の文献を対象として、日本語の歴史について、共時的・歴史的観点からそれぞれの時代の主要な作品をとりあげ、その言語的特徴を文字・表記・音韻・文法・語彙などの観点から具体的に説明する。そこから、現代日本語にかかわる様々な事象が、日本語の歴史的な変化・変遷につらなるものであることを理解し、日本語そのものについての深い知識を身につける。授業形態としては、プロジェクターを利用し、古典籍を含む日本語資料の画像を紹介する。	
漢文学	現代の日本語文は漢文（中国古典文）とは異なる言語でありながら、その影響を受けて成立している。講義では、中国文学・思想の特徴や、漢文が常態であった時代以降の日本文学における漢文学の受容の諸相などの基礎知識に加え、漢文を読む上で必要となる工具書や参考文献も紹介しながら、返り点、送り仮名の付いた漢文を正確に書き下し文にし、口語訳できるようになるための読解力を習得する。漢文法の基礎を習得しつつ漢文学の特質を理解するとともに、その伝統が日本文化に根強い影響を与えてきたことを再認識する。	

口承文化論	人間の普遍的な営みとしての口伝えについて、伝説・昔話・噂話などの具体的なテーマを取り上げながら、その民俗性、歴史性、ならびに現代的な意義に加え、その研究方法について理解する。東北には地震や津波の恐怖を語り継いできた地域があったことから分かるとおり、現代日本においても口承文化はその重要性を保っている。講義では、主に日本国内で伝承されてきた民話を中心に、話の展開に一定の「型」を見出し、話型を利用してさらに多くの類話を収集し、比較研究する方法を学ぶとともに、語り手一人一人にとっての語りの重要性についても理解する。	
古典文法	たんなる暗記の連続ではなく、具体的な古典作品を文学として味わいながら古典文法を理解していくことを通して、日本の古典文学を「正しく」読解するための文法知識を習得する。講義では、上代から近世までの具体的な文学作品の紹介を通じて、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・助詞などの様々な品詞の区別に関する基本的な認識にはじまり、それぞれの用法や敬語、ならびにそれらの変遷について理解することに加えて、文法史の基礎を学ぶことによって日本語の仕組みと変遷とを総合的・分析的に理解するための視野を習得する。	
書誌学	巻物や冊子など、さまざまな形態を備えるモノとしての書物について、主に和本を取り上げながら、紙を作る技術と書物の形態の関係、人々の読書への興味と印刷技術の発展といった時代の移り変わりと書物の変化の関係などについて学ぶ。実物および複製本・影印本などを用いながら、書物の成立・発展、印刷・製本・材質・形態、保管・分類といった側面に加え、書物がどのように流通し、どのように読まれたかといった側面についても理解し、書物のモノとしての価値と資料的価値をめぐって形成された文化について体系的に理解する。	
書道	文字、ならびに文字を書くという行為はたんなる意思伝達的手段としてではなく、そこには自己表現的な意義はもちろん、特定の文字にまつわる精神的な文化としての側面や、とりわけ東洋思想の具象化としての側面が内包されている。楷書、行書、草書、篆書、隸書の五書体による古典籍の臨書も交えながら、文字の筆法を習得することにとどまらず、「書」の歴史を概観し、東洋の文化において「書」がどのように捉えられ、扱われてきたのかも学ぶことによって、文字を書く行為そのものを見つめ直す視点の獲得を目的とする。	
日本文学史	日本文学史に関する基礎知識を習得した上で、作品の背景にある時代、社会、言語への理解、日本語を使って継続的に営まれてきた創造活動、さらには普遍的な人間の心理についての理解を深める。上代から近世までの主要な文学作品を講読しながら、その具体的な表現に触れ、日本文学の歴史的な展開や個々の時代の特色について学ぶとともに、文学ジャンルやその時代性、古今の文学の結びつき、東西文学の交流や相互影響、文学表現とそれを伝えるためのメディアとの関係など、日本文学の全体像を把握し、広く日本文化の本質とその担い手への洞察を養う。	
批評理論	主に文学における批評理論を体系的に学ぶことにより、テキストについて感想・印象を述べることを超えて、理論によりつつ「批評」できるようになることを目的とする。古典主義的な批評にはじまり、言語哲学、構造主義、記号論などの強い影響を受けて成立した文学理論、さらにそれを乗り越えようとするジェンダー批評、ポストコロニアル批評にいたるまで、文学表現を考察し評価するための主要な批評理論について、その基礎にある思想・言語哲学と個々の具体的な批評実践の紹介を通じて、それぞれの批評理論の特性と射程を俯瞰的に理解する。	
世界の文学 1	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、ポストコロニアル批評やジェンダー批評など現代の文学批評理論を紹介したうえで、アジアの文学と世界中に在住するアジア出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解いていく。	
世界の文学 2	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、アフリカの文学と世界中に在住するアフリカ出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解き、アフリカ地域文化に触れるとともに、これらの作品と特に関わりの深い「植民地主義」「越境と移動」といったテーマについて考察を進める。	

古文書解読	近世以前の日本史および日本文学研究においては、翻刻された史料集だけにとどまらず、くずし字で書かれた原本を広く読みこなす技能を習得することもきわめて重要である。講義では、主に江戸時代に作成された古文書・記録類、典籍などの版本などの写真版コピーを用いながら、日本における古文書を解読するための基礎的な知識と方法を学ぶ。旧字体、近世の古文書の形式、古文書に特徴的な表現・言い回しなど、必要な知識を学んだ上で、実際に演習形式で古文書を読み下していくことによって、古文書を解読する技能を習得する。	
日本史	古代、中世、近世、近現代までの日本史の流れを概観しつつ、民衆史や地域史といった近年の歴史研究の動向も簡単に紹介することによって、各時代の政治に加えて社会・文化・「日本」と周辺地域との関わりといった様々な分野のトピックを学ぶ。高校までの生徒が一般的に抱きがちな、著名な政治家や政治体制の変転にまつわる年号を暗記するという「歴史＝政治史」観から脱却するとともに、履修者が高校までの学習の中で形成した「日本の歴史」のイメージを各自で相対化するための視点を獲得する。	
歴史地理学	心理学や文化人類学の研究成果に関する積極的な紹介を交えながら、人文主義地理学の観点からの歴史地理学の研究史、歴史時代の地理的行動とその結果としての地理的空間を研究するための方法論、この方法論にもとづくフィールドワークの進め方について理解する。特に文化・民俗・環境に焦点を当て、私たちの祖先がどのように環境を知覚し、行動を起こし、環境と共存してきたのかを知ることによって、古代から現代にいたる人間集団の環境への接し方を総合的に理解し、さらに未来の人間と環境の関わりについて考察するための視座を獲得する。	
京都の歴史	京都とその周辺に位置する地域との関わり、また京都で暮らした多様な人びとの生活と社会関係について、京都市内で発掘された遺跡や残された様々な史料、関連する文献などを通じて学ぶことによって、古代から近代にいたる京都の通史と、地域に対する理解を培う。文献・史料や地図情報をもとに、現地を歩いて体感するフィールドワークも実施しながら、京都の都市空間がどのように変化していったのかを知り、その歴史的な連続性と段階性を踏まえつつ、現代京都の都市空間とそこで継承されている文化が形成されてきた経緯を理解する。	
日本民衆史	中央における政治と権力闘争を中心に歴史を綴るのではなく、生産者・被支配者に光を当てて歴史形成の主体として見直そうとする民衆史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。とりわけ民衆史では、対象となる「歴史に埋もれた人々」に関する史料が少ないことから、数多くの断片的な資料を掘り起こし、過去を再構成することが重要となる。講義では、日本における民衆史的アプローチの事例紹介を通じて、この方法論を進める上での調査手順、またこれによって何が明らかになるのかを理解する。	
日本地域史	奈良、京都、江戸／東京における中央権力の政治動向とそれにまつわる政治家・知識人らを中心に歴史を綴るのではなく、この権力との複雑な関係を保ってきた諸地域の歴史を掘り起こそうとする地域史の方法論とその成立経緯ならびに問題点に加え、この地域史に先立つ地方史、またこれらに近接する郷土史との相違、特定の地域史と現代の地域住民との関わりについて学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する地域史的アプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
日本社会史	著名な人物や彼らが関わった事件を連ねることによって歴史を綴るのではなく、それらの背景にあってその時代・地域の社会の全ての構成員、とりわけ普通の人々の日々の営みに意味を与えていた家族、性、出産、育児、衣食住、貧困、犯罪、死といった事象に目を向け、社会構造全体の変遷をたどり、歴史研究の全体性を取り戻そうとする社会史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する社会史的アプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
日本・アジア関係史	古代史・中世史・近世史・近代史それぞれにおける日本とアジアのあいだの人・物・文化の移動と交流、戦争や侵略の歴史、さらに「アジア」認識の変化などについて、とりわけ琉球、韓国、中国、台湾、フィリピン、タイなどからなる東アジア地域と日本との関係に焦点を当てながら通時代的に学ぶ。日本史をアジア史のなかで有機的に理解することによって、これを相対的に捉える視野を獲得するとともに、今日の日本が形成されるまでの経緯をそのダイナミズムとともに理解し、また現代の「歴史認識」をめぐる問題の根源についても理解する。	

歴史講義科目	西洋史	ヨーロッパは2000年以上前から世界の文化、政治、経済の中心として中国を中心とする東洋とともに世界をリードしてきた。この地域の歴史を知ることは、いわば世界の潮流の半分を知ることであり、現代世界を考えるうえでも大変重要である。しかし、歴史は高校世界史で学んだような、政治的イベントの連なりのみを見ればよいのではない。それぞれの時代にある、人びとの生活が見えるような歴史を学ばねば、生きた歴史とは言えない。この講義では、これらの背景に留意しながら、歴史学の考え方を学び、現代につながる西欧の歴史の連なりを概観していく。	
	東洋史	サイードによる「オリエンタリズム」の批判から、はヨーロッパ的な意味の「東洋」は解体され、これまで「東洋」とされてきた日本（極東）から北アフリカのマグレブにかけてを指す地域のそれぞれの歴史が研究されるようになってきた。しかし、これらの地域は古くから互いに密接な交流を重ねてきており、現在、世界の最大の人口規模、生産の中心である、この地域を理解する上で、巨視的な歴史理解は重要である。そこで、この講義では、「東洋」の一部の地域の地域史を学ぶだけでなく、「東洋」全体を理解することを目指す。	
専門講義・演習・実習科目	社会学	「社会学」とは、非常に広い意味を持った言葉である。「社会学」と名のつく学問領域も多岐にわたる（例えば医療社会学、家族社会学、環境社会学、教育社会学のように）。しかしそのような多岐にわたる学問体系、多様な専門領域をもつ「社会学」という学問の基盤には常に「現在の世の中に対する問い」という共通の問題意識が内包されている。講義では社会学の基礎、その思想的背景、具体的な研究例について学んでゆく。それらの教養は人文諸学を学ぶ上でいずれ必ず必要になるものである。	
	社会調査法	統計処理を前提としたデータを扱う量的調査と、個人的なドキュメントの分析や参与的観察などによる質的調査との双方にわたる調査方法を学習する。量的調査については、データの収集方法と分析方法、その手順と過程、統計処理の手段などの方法論、また質的調査については、インタビュー調査、参与観察法、ドキュメント分析、映像テキスト分析、会話分析などの方法論を習得するとともに、社会調査の基本的な性格やその系譜と歴史、さらにデータの収集と保存、公開にまつわる技術的・倫理的について具体的な事例の紹介を通じて学ぶ。	
	ジェンダー論	「ジェンダー」はしばしば「社会的な性別」や「社会・文化的な性の様態」などと説明されるが、現在、ジェンダーは「社会・文化」の下位概念を超え、「社会や文化がジェンダーを作り出す」のではなく「ジェンダーが社会や文化を構築する」と考えられるようになってきている。こうしたジェンダー論の展開は、20世紀以降の思想・哲学の進展と深い関係を有している。講義ではプラトン以降の西洋哲学史を概観した上で、東洋における性差の理解に加え、脱構築やクイア理論などの現代思想におけるジェンダー理解について検討する。	
	社会思想史	プラトンとアリストテレスに代表される古代ギリシアの国家論・政治学から、ホブズやロックが描いた近代市民社会論をへて、現代の社会理論にいたるまでの重要な社会哲学を、それらが生まれた時代背景や地域の特性などに即して体系的・包括的に理解することに加え、それぞれの社会哲学の方法論を現代の日本社会が抱える具体的な問題に適用することによって、その射程を見極めるとともに、現代の日本社会への理解を深める。社会を理解するための多角的な視点を身につけた上で、これからの現代社会の変貌を見通すことのできる視座を獲得する。	
	経済学	『国富論』のアダム・スミスが同時に『道徳感情論』の著者でもあり、またジョン・メイナード・ケインズの『一般理論』のなかに「美人コンテスト」の実例が登場するように、本来、経済学とは人間が何に価値を付与し、それら価値を付与されたものをめぐって個々人がどのように振る舞い、そしてそれらの振る舞いが集合することによってどのような社会現象が生み出されるのかに関する学問である。この講義では、難解な数式を避けながら、個々人の消費や労働、企業、政府・国の諸活動を履修生自身の生活から出発して考察するための基本的な考え方を獲得する。	
	自然地理学	地理学は、地表を探索して「世界」についての知識を拡げ、その地図を作ることに始まった。現在では自然地理、人文地理と大別されているが、空間という広がりの中で地形、気候、植生などの自然的条件を把握すること、そしてそれらの環境条件と人間生活との相互作用の関係を解明すること、さらにそうした知見を地図などによって表現し、世界の諸地域の理解やその地域の発展に資することが、この学問の基本であり存在意義であることに変わりはない。講義では、地理学のもつ様々な側面のなかでももっとも基礎的といえる、自然地理学と人間—環境関係学の部分を取り上げて、その見方・考え方を修得することを目指す。	
	社会講義科目		

NGO論	世界的に見れば、20世紀初頭にその原型が認められるNGO。その起こりは、戦傷者の治療、そして、恵まれない人へのチャリティーにある。日本においては、1995年に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに起こったボランティアのブームは、その後NGOの隆盛に繋がった。以降、NGOは20年以上に渡り日本国内のみならず、世界の各地で支援活動を展開するようになった。そして、現在のNGOはチャリティーの枠を大きく超え、国際社会における「市民社会」の代表者として、政治的な発言力を持つようになって久しい。この講義では、NGO史を概観して、近現代史における市民社会つまり、民主化の変遷を追うとともに、現代社会におけるNGOの新たな役割を学んでいく。	
地球環境学概論 1	地震や洪水など劇的な自然災害は人びとの生活を破壊し、多くのものを失わせる。それらばかりではなく、地球温暖化や大気・水質汚染といった人びとの生活を緩やかに脅かす自然災害も現代社会にとって重大な環境課題となっている。「地球環境学概論1」では、自然災害に対してレジリアンスを持ち、持続可能な社会とはなにかを考えることを目的とする。この課題を考えるため、本講義では、超学際的（トランス・ディシプリナリー）なアプローチから素材を提供する。	
地球環境学概論 2	地球上にある様々な「資源」は、お互いに関連しあい、「資源」に関わる問題は一つを解決しても全体の解決にはなることはない。「地球環境学概論2」では、国内外の農林水資源・生態資源を含む多様な資源の生産・流通・消費のあり方を考える。これら資源の問題は、「科学的」な正しさのみから解答を与えられるわけではなく、それらに関わるステークホルダー（利害関係者）の関与を強く意識する必要がある。この講義狙いは、科学者とステークホルダーが取り組む資源利用に関する事例から、資源の公正な利用と最適な管理とガバナンスを実現するための方策を考える。	
地球環境学概論 3	世界人口の7割以上が住まうアフリカ、アジア地域では、人間活動の急速な拡大により、環境破壊、生物多様性の消失を経験している。このプロセスでは、都市部への人口集中、農山漁村での過疎化が起り、両者の生活圏の劣化が加速している。「地球環境学概論3」では、社会・文化・資源・生態環境との相互連関の場としての生活圏の概念を再構築し、都市域や農村漁村域など多様な生活圏相互の連環を解明し、生活圏の様々なステークホルダーとともに、直面する諸問題の解決や生活圏の持続可能な未来像を描くことを目指す。	
人間の安全保障	冷戦の時代が終わり、私たちの「安全保障」の考え方は大きく変わった。21世紀にはいると、人間ひとりひとりの生存、生活、尊厳が守られることが現代的な安全保障の考え方とされ、その問題は、国民国家同士の争いから、貧困、環境、感染症、テロと言った、どの地域でも恒常的にリスクを抱える課題が重要なものとされるようになった。この講義では、人間の安全保障を脅かすリスクを私たちの生活世界の中から抽出し、そうした中で人間の安全保障がどのような考え方なのかを学ぶ。そして、どのように人間の安全保障を担保するのかという方法論を実例を交えながら議論していく。	
市民社会論	「市民社会（civil society）」は、公的領域で活動する人びとの自発的な運動の領域として、世界各地で発展してきた。これまで、「市民社会」はある意味、社会的弱者を支援する公共の福祉に関わる人びとを限定的に指す傾向にあったが、現代のグローバルな文脈において、そのアクターはグローバル企業、多国籍企業をも含め、NGO、企業、国家、国際機関を混然一体としたものとして理解する必要がある。本講義では、「市民社会」の基礎知識と歴史的展開を学ぶと同時に、多様化するアクターたちがどのように「市民社会」を構築するのか、その可能性について検討していく。	
平和学	人類史上、人間は平穏にその生を紡いでいくことを目指してきたにも関わらず、現在に至るまで絶え間なく争いを続け、それは時に多くの人の命を奪い、人びとを不幸のどん底に突き落としてきた。しかし、こうした争いのないことのみが「平和」の条件だろうか。平和の条件は、私たちが自由に往来し、暴力に妨げられることなく、自己実現することではないだろうか。この講義では、争いのない平和（消極的平和）のみならず、人間が自由に能力を発揮できる状態（積極的平和）を獲得するためにはどのようにすればよいかを、学際的な観点から考察する。	
エイジング研究概論	日本をはじめとするいわゆる「先進国」の多くの国で、極度な少子高齢化社会が進行している。老年学は「老いること」の心理学的な分析をその根幹に置くが、現在の社会状況を考えれば、「老い」そのものだけを考えるだけでは不十分である。老年学はそれほど新しいものではなく、日本でも戦後すぐにこの領域が生まれ、現在の時代背景の中でますます盛んになってきた領域である。そこで、この講義では、「老い」というすべての人間が将来的に経験する時間域を考えるだけでなく、福祉の意味を考えるうえで、国内外の政策や社会的な取り組みの事例を交えながら、「老い」の社会的意味を捉えることを目的とする。	

社会講義科目	子ども学概論	「子ども」の概念、「子ども」がオトナによって保護されるという、現在では当たり前となった「子ども」に対する考え方は比較的新しいものであることは、歴史学で明らかになり、私たちがイメージしがちな弱い存在としての子どもは、社会的に作られたものである。そこで、この講義では、一旦子どもに付与された弱者性を排除し、教育、生物学、発達心理学、文化人類学（「遊び」や「学び」）と言った多角的な視点からとらえる思考を鍛えていく。こうした学びから、子ども以外の後天的な弱者へのまなざしを客観的に考える思考を獲得していく。	
	先住民族研究	現在、世界中に少なくとも5,000の先住民族が、70カ国以上の国々に居住するとされる。本科目では、先住民が先祖伝来の土地のなかで維持してきた多様な思想、文化様式、社会制度などを学ぶ。また、これまで先住民族が弾圧、搾取の対象となり、社会に強制的に同化させられてきた歴史的背景を理解するとともに、先住民族の伝来の土地と民族的アイデンティティを維持・発展させる取り組みを学び、先住民族の文化理解と文化共生について考える。	
	国際開発論	第2次大戦後の戦禍の復興に始まる国際開発は、やがて貧困問題解決のための大きなうねりとなり、国際的な課題を担う領域となり、その学問領域も拡大していった。しかし、援助側、被援助側のこれまでの取り組みが功を奏し、状況は次第に変化し、過去の貧困問題とはその様相を異にするようになった。本講義では、貧困問題の本質を捉え、現代の貧困問題とそれに取り組む国際開発のアクターの施策の変容を考察していくことを目的とする。	
専門講義・演習・実習科目	文化社会学	いわゆる「高級文化」ではなく、概して娯楽や商品として消費されるがゆえに、その社会的価値や文化的な意味が見過されがちなテレビ番組や広告、映画、ポップミュージック、ファッション、アニメ、ゲームなどといった「大衆文化」を主たる対象としながら、そのそれぞれの特徴や分析方法、グローバル化における位置づけを、私たちの日常生活と社会との関わりのなかで理解するための様々な理論や概念、方法論を習得する。個別具体的な事例の紹介も取り上げながら、現代社会における多様な文化現象を批判的・多角的に分析できる思考力を養う。	
	文化政策論	国や地方自治体の政策の中で文化が扱われる過程とその意義について、関連する世界の動向ならびに歴史をも見据えながら考察し、現代日本における国と地方自治体の文化政策の基本的な枠組みとその方向性を概観する。とりわけ京都市・京都府に見出される文化政策の特徴と問題点を理解した上で、伝統文化と、さらに大衆文化における新しい文化事象が文化政策においてどのように扱われうるのか、また文化政策への地域住民の理想的な参与のあり方はどのようなものかについても考察し、将来の文化政策について一定の見識を習得する。	
	日本の文化遺産	「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」にもとづいて世界文化遺産に登録されたもののうち京都を中心に関西圏にあるものについて、特に下鴨神社・上賀茂神社・慈照寺など大学キャンパス近辺にあるものに関しては実見も実施しながら、その概要の紹介を通じて京都の文化に関する理解を深める。また、条約の理念や目的、世界遺産の登録要件、文化財を世界遺産に登録する目的と意義について、国内の文化財保護法との関連や地元住民や行政が直面している保全と活用の問題点なども視野に入れながら考察する。	
	観光学総論	観光産業は平和産業かつ成長産業として、グローバル化が進む現代において最も注目を浴びている産業の一つである。観光による地域振興は、日本のみならず世界的なパッケージとなりつつある。それゆえ、一般的な地域社会での観光振興のみならず、宗教やグローバル経済と言った、多様な文脈の中で語ることが可能である。さらに、観光はゲスト-ホスト関係という人間社会における普遍的なテーマを含みこむ。この講義では、いくつかのトピックから現代の観光を考察することを目的とする。	
	民芸論	大正から昭和初期にかけて興った民俗学や民具学といった学術的な動向、さらに英国のアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を受けた民芸運動や郷土玩具趣味のような文化的・趣味的な動向、そして農民美術運動のような社会運動的要素を持った動向などを踏まえ、その文化的価値が見直されてきた日本の各地域に伝承される手工芸を、その背景となる各地域固有の衣食住文化の特性と合わせて理解する。あわせて、これらの文化的価値の変容を、いわゆる「人間国宝」や無形文化財といった制度的な枠組み、観光や地域振興といった地域経済的な枠組みのなかで捉え直す。	
日本文化講義科目			

日本の現代文化	20世紀末以降の現代日本の文化状況を、主にポップカルチャーの変遷をたどりながら、いくつかのジャンルで展開されつつある文化実践を概観し、現代社会が大衆と文化産業との関わりの中で生み出してきた文化的な価値観を理論的に考察する。具体的にはアニメ、ライトノベル、ポピュラー音楽、SNSなど、現代文化を代表するジャンルにおいて複雑化・多様化しつつある動向を、大衆文化批評の主要な論点も紹介しつつカルチュラル・スタディーズなどの方法論を用いて構造的に理解し、現代文化の抱える諸問題について考察する。	
日本芸能史	田楽、神楽、風流、獅子舞から歌謡、平曲、能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎にいたる日本の様々な芸能を映像資料や実際の上演の見学などを交えつつ考察することによって、日本芸能の原点とも言える田楽・神楽その他の地域伝統芸能から歌舞伎・浄瑠璃に至る日本芸能文化を概観し、日本の芸能文化に通底する本質的な美学を理解する。それぞれの芸能の歴史的展開と相関関係、およびその背景をなす日本史上の出来事も知り、伝統文化を固定されたものとしてではなく、固有の文化的ダイナミズムとともに考察するための視座を獲得する。	
日本の風土	日本列島において人間が自然との関わりの中で生活を営み、その生活圏を拡大していく中で創出してきた文化を、「風土」という概念を中心に据えつつ人間と環境との関係の観点から理解する。まず、和辻哲郎の『風土論』における議論を概観した上で、日本の風土を自然、植生、基層文化、信仰、伝統、自然景観、文化的・歴史的景観、里山・里地、湿地といった多面的観点から見直すことによって、風土という概念およびそれを取り上げる意義を理解するとともに、現代においても日本文化の基底をなしている精神性について考察するための視座を獲得する。	
日本思想史	日本の思想史の根底にある自然観や死生観、また陰陽道や神仏習合といった独自の宗教思想、さらに儒教や道教といった中国からの思想的影響やキリスト教や啓蒙思想と行った西洋からの思想的影響などについて、重要なトピックを紹介する。これらの日本の思想史における特徴的なトピックを、各時代の国際環境の中で日本に影響を与えた外来思想も視野に入れながら概観することによって、現代の日本人のものの考え方や生活にも影響を及ぼしている倫理・宗教・政治思想の基底について理解する。	
アイヌ文化論	北海道ならびに極東ロシアとそれに隣接する島嶼群で営まれてきた伝統的なアイヌ文化を、生活習俗、生業、通過儀礼、コスモロジー、カムイの概念といった観点から考察した上で、この文化が近代以降の日本（松前藩および日本政府）とロシアおよびソビエト連邦との関わりの中で変化していった経緯とそのダイナミズムの紹介を通じて、アイヌ民族の現状ならびにアイヌ文化に関する基礎的知識を理解し、さらに周縁的な立場に置かれた文化一般が抱える諸問題を考察するための視座、加えていわゆる「日本文化」と文化一般を相対化する視座を獲得する。	
南島文化論	かつて奄美大島から台湾との国境に向かって弧状に連なる九州の南西海上の島嶼群に存続していた琉球王国の文化を、地理的・地政学的な諸条件、政治経済、神話体系、生活習俗といった観点から考察した上で、この文化が近世以降の日本（薩摩藩および日本政府）とアメリカ合衆国との関わりの中で変化していった経緯とそのダイナミズムの紹介を通じて、琉球文化に関する基礎知識とその現状を理解し、さらに周縁的な立場に置かれた文化一般が抱える諸問題を考察するための視座、加えていわゆる「日本文化」と文化一般を相対化する視座を獲得する。	
地域研究入門	地域研究は、異文化の社会について、生態環境、社会、文化、政治、経済、歴史など、複眼的に捉え、異文化に身を置くフィールドワークを通じて、対象とする社会を総合的に理解するものである。本科目では、異文化を学ぶ、地域を総合的に理解する、フィールドワークを行う意味を理解するとともに、生態環境、社会、文化などを関係づける方法、学際的な分野として異なる分野の方法や考え方の総合的な利用、フィールドワークの調査方法を学び地域研究を行うための素地を養う。	
アフリカ地域研究 1	本講ではアフリカにおける多様な文化・社会の理解を目的として以下の三点を主に学ぶ。第一に伝統社会における家族や民族文化、宗教について、第二に植民地時代から近代化への過程の中で、西洋や国際社会との関わりの中で生まれた新たな社会形態や文化について、第三に、国際化する現代アフリカ社会における都市文化やポピュラーカルチャー、メディア等を含む新たな文化の生成と発展について。西東、南アフリカなど地域間の違いも理解しつつ、アフリカ全体の社会・文化を概観する。	

<p>アフリカ地域研究 2</p>	<p>アフリカの異なる地域における社会・文化の多様性を理解しつつ、政治、経済について概観することを目的とする。本講義では以下の三点に着目する。第一に伝統社会における家族や民族文化等を含む政治形態や、それに根ざした経済のあり方について、第二に植民地支配から近代国家形成の経緯と、独立後の国家における統治と経済の変容について、第三に、現在の国際社会におけるアフリカの政治的、経済的役割について、特にヨーロッパや新興国(中国、ブラジルなどを含む)との関係を中心に学ぶ。</p>	
<p>アジア地域研究 1</p>	<p>アジアは世界の人口の半数以上を抱える地域である。東アジアから南西アジアまで広域に及び、異なる気候や自然環境のもと、様々な民族、言語、宗教、文化によって構成される。本科目では、アジア全域における地理的な基礎知識を修得するとともに、それぞれの地域に固有の文化や社会、人々の生活や生業の特性とその変容を総合的に学び、アジアの多様なあり方について考える。また、地域の固有性や特性の複合的な捉え方を理解する。</p>	
<p>アジア地域研究 2</p>	<p>現代のアジアは、グローバル化や経済発展、国内および国際的な政治変動の影響を受け、めまぐるしく変化している。また、急激な経済成長や都市化による環境劣化、格差の拡大、人口増加と少子化、宗教や民族間の確執などの新たな問題も生じている。本科目では、アジア各地域における政治、経済、社会、文化の状況と諸問題について概観するとともに、新たな国や地域間の関係や相互影響を学び、多角的な視点から変動する現代アジアに関する理解を深める。</p>	
<p>大洋州地域研究</p>	<p>大洋州とは、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋の島々を含む広範囲を含む。本科目では、大洋州の地理的な基礎知識、伝統社会から植民地化、独立国家成立への歴史の変遷を概観するとともに、島嶼国特有の自然環境と暮らし、地域固有の文化や慣習について学び、大洋州の多様性について理解する。また、グローバル化、自然災害や気候変動による影響など現代の島嶼国が直面する課題、日本や諸外国との関係について学び、小島嶼国としての発展のあり方について考察する。</p>	
<p>アメリカ地域研究 1</p>	<p>本講義の目的は、アメリカ合衆国の歴史、文化、社会、思想、宗教、政治経済等を総合的に学ぶことを目的とする。奴隷制時代から現代に至るまでの歴史理解を通し、米国における人種、階級、ジェンダー形成の問題について、これまで軽視されがちだったマイノリティ集団が果たしてきた役割も含め学ぶ。また、現代に至るまでの世界におけるアメリカの位置づけや、アジア太平洋地域との関係、日米関係に関しても考察する。</p>	
<p>アメリカ地域研究 2</p>	<p>かつてスペイン、ポルトガル、フランスなどヨーロッパ諸国の植民地であったラテンアメリカは、言語、文化、宗教や政治制度等に多くの共通点があるが、独立から国民国家形成の過程を経てそれぞれの国で多様な発展を遂げてきた。本講では、自然環境や人種、民族、階級、政治制度等、異なる要素に関して通史的に講義すると同時に、ナショナルな文化の形成過程とグローバル化社会の中で変容するラテンアメリカの役割について理解する。</p>	
<p>欧州地域研究</p>	<p>大小さまざまな国が隣接し、古くから攻防を繰り返してきたヨーロッパ地域において、ひとびとはどのように共存してきたのだろうか。本講義では、まず地域統合という観点から現在の欧州連合が成立するまでの同地域を歴史にたどり、現代の欧州地域の成り立ちを概観する。そのうえで、欧州連合の仕組みを、政治・経済・社会・文化の各方面から学ぶ。欧州連合は現代の国際社会の一つのモデルともなっているから、欧州のモデルを基準に、他の地域との比較の可能性について検討することが最終的な目標である。</p>	
<p>世界の宗教</p>	<p>いわゆる世界三大宗教(イスラーム、仏教、キリスト教)は、これまでも世界を動かし続けてきたが、21世紀に入り、政治経済的側面においてもそれらは性質を変えつつ、強大な影響力を保ち続け、私たちはこれまでと異なる宗教を理解することが必要となっている。この講義では、これら大宗教の基礎となる教義レベルの概略を学び、さらに地域ごとの動きを明らかにすることで、それぞれの宗教が多層的レベルでうごめいていることを理解することを目指す。</p>	

地域研究科目	アフリカ・アジア関係論	グローバル化の進行にともなって、世界の各地域間の情報、モノ、人の交流は近年ますます盛んになっている。しかし、アジアとアフリカに目を向ければ、いくつかの経路で脈々とその交流は続けられている。現代の文脈では経済的観点から語られることの多い両地域間の関係を、本講義では、さらに政治・文化・社会を含む歴史を起点として考察していく。現代世界のグローバル化の潮流を考えれば、経済に着目されがちであるが、そこには、経済的な事由に加え、宗教や文化と言った側面から考えることの重要性を読み取ることができるだろう。こうした両地域の歴史的交流に目を向けることで、普段とは異なる世界の見方を検討することが本講義の目的である。		
	グローバル・ビジネス論	現在のビジネスシーンにおいて、海外との関係を意識することは不可欠である。企業を取り巻く環境は変化し、企業経営やビジネス活動のグローバル化が急速に進んでいる。本科目では、グローバルビジネスの歴史の変遷や経済環境を概観するとともに、グローバルに展開する企業を取り上げ、その戦略や考え方、求められる人材能力などを理解する。また、現代社会が直面する様々な社会問題とそれに対応する新しいグローバル・ビジネスのトレンドを学ぶ。		
	グローバル化とメディア	ヒト、モノ、情報、サービス、カネ等が国境を越え移動するグローバル化社会において我々は様々なグローバル 이슈に直面するようになった。特にインターネットを利用した情報のやり取りは現代社会の日常生活に多大な影響を与えている。インターネット、テレビ、新聞、広告等のメディアの作り手はいかなる意図のもとに情報を発信するのか、またメディアが社会に与える影響は何か。グローバル化に伴うメディアの変容を理解すると同時に、理論と実践を通し、受信者、発信者として情報を作り出し、また読み解くための能力（メディア・リテラシー）を身に着ける。		
専門講義・演習・実習科目	世界文化科目	世界文化遺産	文化遺産は、人類の文化的活動によって生み出された有形・無形のものであり、多様な文化が共生する社会を実現するために、後世に伝えていく必要がある。本科目では、「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」「無形文化遺産の保護に関する条約」の成立と理念、登録の目的を理解し文化遺産保護の意義を学ぶ。また、国際的な枠組みにおける各ステークホルダーの役割を理解し、各地の「世界文化遺産」「世界無形文化遺産」を対象に、具体的な取り組みと現地で生じる課題を理解し、これからの文化遺産保護のあり方を考える。	
		アフリカ美術	アフリカ美術は我々の日常生活においてそれほど馴染みは深くない。アフリカ美術の多くは名もなき製作者によって生産され、オリエンタリズムに満ちたまなごしに晒されてきた。しかし、近年、多くのアフリカ出身のアーティストが様々な作品を手掛けるようになった。本講義では、アフリカを舞台に、アフリカの美術を取り巻く環境を紹介し、アフリカ的美術について学び、同時に、アーティストとは誰か、という問いに対して考察する。	
		マテリアル・カルチャー概論	かつて人びとの生活の中のマテリアル（物質）を収集することは、異文化を知る最も有力な方法とされた。この領域は文化人類学や民俗学で発展し、実存するモノを生産し、それを使う計画、方法、理由などを人びとに提供する人間の習性や行動を分析するとし、モノを起点に人間のあり様を哲学的に考える領域だと言える。モノが溢れた現代社会において、モノとは何か、そこにまつわる人間の生活がどのように構成されているかを考えるのが本講義の狙いである。この講義では、マテリアル・カルチャーの理論に加え、モノをどのように描写するかについても学んでいく。	
		比較服飾文化論	服飾は時代背景や地域、風土、そしてそれぞれの文化を反映すると同時に、それを生み出した社会の思想や生活を視覚的に伝達する。本講では、異なる歴史的背景（古代文明から現在まで）、また異なる地域や風土（アジア、アフリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アラブ地域など）における服飾文化の流れと変容を比較文化的視点から学ぶ。多様な時代や文化によって生み出された服飾文化について理解することで、今日のファッションにおいても異なる文化的要素を取り入れた新たなトレンドを発見することに繋がる。	
		比較建築文化論	建築物は、世界各地の自然環境、歴史と文化の多様性を示す。本科目では、人々の暮らしと密接に関わる住居を中心に、異なる地域の気候風土に適応する多様な建築形式、住居と家族形態、生活様式、信仰など社会文化的要素との関連を理解し、比較文化の視点から住居の地域固有性について学ぶ。また、現代社会における暮らしを取り巻く環境変化による住居への影響、現代の新たな住居の課題を理解し、地域の自然環境や文化に適応した持続的な住居のあり方を考える。	

専門講義・演習・実習科目	世界文化科目	民族音楽論	<p>世界中、ありとあらゆる社会に音楽は存在し、それぞれの様式美がある。芸能として発達し、西欧音階に転記されポップな音楽になったものがある一方、音楽の中には農耕や漁業と言った生業に密接にかかわるものも少なくない。しかし、私たちの生まれ育った場所で育まれた音楽は、いづいぶん縁遠い存在となってしまった。この講義では、まず、音楽理論を学び、これを基礎としながら、各民族に独特の様式やパフォーマンスを分析し、ある社会における音楽のあり方を理解することを目指していく。</p>	
--------------	--------	-------	--	--

授 業 科 目 の 概 要			
(国際文化学部グローバルスタディーズ学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
導入プログラム	フレッシュャーズ・キャンプ	この授業は1年次第1クォーターの必修科目にあたる。本学に入学したばかりの学生に対して、学生自身が他の学生とともにキャンパスを出、直接異文化の中に身を置きながら他の学生との情報共有などを経ることで、その後の学習において協力し合える関係性を学生間で持てることをめざす。加えて、本学の学びの中で特に重要な「自身の意思の伝達」、「他者の理解」、「自文化・多文化の認識」について身につけることを目的とする。この授業を経て大学の学びに向き合うことにより、教員、学生同士の関係を深め、より横断的な視野で学習することができる。	
	クリエイティブ・ワークショップ	本学での学びは、各専門分野にとじこもるのではなく、分野を超えた中での新たな価値観の発見を通じ、これからの社会をよりよくできる人間の育成を目的とする。そのために必要な相互理解と発展の第一歩として本授業においては今ともに学ぶ隣人がどのような専門性と将来像を描きながら学んでいるのかを各領域の教員の講義や上回生の事例を紹介しながら学ぶこととする。自らの専門の枠を超えた学びを描けることによる視野の拡張で、これ以後の学びの可能性を広げ、自らの学習計画の向上と改善ができることをめざす。	
共通教育科目	コミュニケーションスキル1	学問・芸術においては自らの思考を言語化し、発信し、コミュニケーションをとることが重要である。全学部生1年次必修となる本科目は、身近にある「読む」「書く」「話す」を通じて、ことばの多様性を理解し、自分のことばに関する強み、弱みを自覚し、エッセイや感想文、評論文により他者に向けて実践することを目的とする。1,000～2,000字で与えられたテーマをもとに繰り返し実践を行うことで、思考力を磨き、受け手を意識し、主体性を持つてことばを使える能力を身につける。	
	コミュニケーションスキル2	「コミュニケーションスキル1」で修得したことばを使う基礎能力をもとに、さらに「読む」「書く」「話す」の実践を深め、ことばを使える応用能力を身につける。自分の活動や思考した内容を膨らませて長文化したり、他者に伝えるトレーニングを行いながら、主体的かつ積極的にことばを使うコミュニケーション力を伸長させることを目的とする。最終段階では自身の生活や創作活動に関連した「ことば」の表現能力を高めていくことをめざす。	
	アカデミックスキル1	1年次第1クォーターの必修科目である本科目では、大学での学習の基礎となる「調べる」ことについての能力習得を目指す。「調べる」ことは私たちの日常的な営みのひとつであり、物事を多様な方法で知ることは、個々人にとっても社会にとっても重要なことである。この授業では、調査に関わる基本的な知識、技術を習得することによって、「調べる」ことの重要性、社会科学の基本的な考え方、量的調査・質的調査の方法論、調査倫理を学ぶ。さらに方法論の観点から実証研究を評価する視点を学び、現代の社会について主体的に考察する方法を学ぶ。	
	アカデミックスキル2	この授業では、「論文とはどのような文章なのか」といった初歩から始める。大学での学びは、「聴く」ことや「読む」ことといった受動的な学びに、「問う」ことや「書く」ことといった能動的な学びが伴って、初めて完結する。「考えるという行為」と「書くという行為」の相関を論じた基礎的な文献『知的複眼思考法』を教科書にして、大学で学ぶためのリテラシー能力の向上に努める。『知的複眼思考法』は全国の多くの大学で、「論文の書き方」の教科書として使われている。「『問い』を意識しながら読み、『問い』を意識しながら書く」という、すべての科目に共通する初年次教養教育を、少人数のゼミナール形式で展開する。	
	アカデミックスキル3	4年生の口頭試問や卒業発表展への参加、協力することを通じ、自らが4年次になった際のイメージを獲得するとともに、これまで培ってきた力を卒業論文、卒業制作へとまとめ、展示・発表へといたるために必要な表現力、プレゼンテーション能力を修得することをめざす。授業は4年次の卒業研究演習への参加と、授業内での模擬発表などを中心とするものであり、自身の先輩たちの姿を見ることで、次の年の同じ時期の自らを投影し、実感をもって4年次の学びへ向かうこととなる。	
表現科目			

アカデミックスキル4	卒業論文や卒業制作におけるポートフォリオなど、4年次ではこれまでの授業では求められなかったボリュームの論文を各学部でまとめなければならない。そのために必要な構成力、論理力、表現力を身につけることを本授業における目的とする。これらの力は卒業論文やポートフォリオの作成だけでなく、今後社会に出てからも必要となることだろう。各自はそれぞれの専門において取り組んできたテーマについて自身で振り返るとともに定期的な相互共有を通じ、他の専門で学ぶものたちの考え方やものの捉え方も同時に理解することとなる。培った専門的視野と他者から知る横断的な視野による複層的な視点をもって、これまで体験してこなかった論文の執筆へと向き合う力を獲得する。	
デッサン1	あらゆる表現の基本は「見ること」、「聞くこと」、「読むこと」、から始まる。対象を観察することにより、それまで気づかなかった世界がそこにあることに気づく。しっかりと対象を観察することを重視し、見えたもの捉えたものを伝えるために表現するデッサンの基礎を習得する。デッサン1では、そのために必要な知識や描写の基本を学び、幅広い様々なデッサンの表現を通じて観察力と描写力を養い、表現の礎を築く事を目的とする。	
デッサン2	表現を追求する上で、または思考を整理し編集・表現していく上において、対象物を良く観察し、見える形として表現する事は重要である。デッサン2では、デッサン表現の基礎要素となる、形、線、タッチ、調子、材質感、遠近感、構図、材料などの基礎を学び、描写する力、表現する力である、基礎描写力を身につけることを目的とする。また、より幅広い身近な環境、現象、興味に意識を向け、デッサン表現の幅を広げていけることを目標とする。	
デッサン3	デッサン表現は、対象を「観察する」ことから始まり、次に捉えた「要素を抽出・理解」し、手を動かし「表現する」といった一連の流れが複雑に往復しながら絡み合い成立している。この流れを繰り返すことにより、よりの確な表現として成立する。デッサン3では、表現するうえで必要となる、より深化させた観察力や描写力を様々なデッサンで養う事を目標とし、さらには解剖学的な知見から、人体の形態と機能、その外形と内部構造の関係などを知ることによって、表現力の効果的な向上を目指す。	
デッサン4	この授業では履修者が「デッサン3」までに獲得した力をもとに、デッサンによる表現のさらなる展開として、単に「描写する」、「表現する」だけにとどまらず、さまざまな「表現のパリエーション」を実践しながら、デッサン表現による「作品としての成立」までを目指すこととする。そのため、表現手段や手法といった構成要素も検討するだけではなく、モチーフやテーマの設定を構想し、デッサン表現の「可能性を追求する」ことを目標とする。	
グラフィックデザインソフトスキル	本授業では、コンピューターグラフィックの基本を修得する。具体的には、コンピューターグラフィック作成アプリケーションソフトのスタンダードである Adobe Photoshop®と Adobe Illustrator®の入門から基本操作の修得を目標とし、ビットマップ画像の補正・加工・合成、ベクトル画像によるロゴやイラストの作成をはじめ、印刷物作成をベースとしたグラフィックデザイン手法の基礎を学ぶ。本授業で修得したスキルは、個展やグループ展、コンサートなどの社会に向けてのアプローチを告知するポストカードなどの案内物の作成に活用が可能である。また、企画などのプレゼンテーション資料作成においても活用が期待できる。	
芸術学	本講義では、視覚的イメージをコミュニケーションのためのメディアと考え、ヴィジュアル・リテラシー（視覚的な読み書き能力）について理解を深めることを目標とする。扱う対象は、絵画、映画、マンガと多岐にわたるが、それらが「意味」をどのように作り上げているのか、そのメカニズムについて理解を深めていきたい。さらに、そのような理解の上で、近代における「芸術」という制度の成立や「デザイン」という概念の誕生、その変容を幅広く見ていくことにより、芸術と近代社会・文化との関わりを再考する。絵画、彫刻、デザイン、さらには音楽における近代主義（モダニズム）の確立と変容を通じて、私たちが今日受容している「芸術」というものがどのような歴史的、思想的プロセスを経て成立してきたのかを問いたい。このようなプロセスに関する知識を得ることで、受講生自らが学んでいる文化制作を相対化することを目標とする。	

美学概論	美学は論理学や倫理学と並んで人間の認識と行動を対象とする哲学の一分野である。とくに美学においては、美に代表される感性的な価値の判断を出発点として、様々な美的認識と芸術制作を対象とする。計算によって導き出される価値や、道徳や伝統によって定められた価値ではない、純粋な美的価値の存在とそれをめぐる議論について親しむことがこの授業の目的である。 授業全体は7つのテーマについて「問題提起」の回と「解説」の回を繰り返すことにより成り立っている。「問題提起」の回の終わりには扱っているテーマに関するアンケートを実施し、次の「解説」の回にその結果を発表・解説するので、そのテーマに対する自分の立場を客観視する手立てとすること。また後述の通り、計7回の「解説」の回で扱ったテーマに関するレポート課題を発表するので、授業時間外に取り組んで各テーマに関する復習とすること。
現代美術概論	本講義では、主に20世紀から21世紀の世界の美術を、履修者側の予備知識のないところから、具体的な作品に即して、説明する。ある作家が、どうしてそういう作品を作るにいたったのか（たとえば、どうして便器が「泉」（マルセル・デュシャン・1917年）なのか）、そのような作品が生み出された時代や世相などの背景や、作者自身の理由を学ぶことで、各地での美術館で開催される現代美術の展覧会をどう楽しむのかを解説する。
美術史	美術史 (art history) とは何か？ それをかみ砕いてみると、美術にまつわる「ひとびとの物語 (story) 」と理解することもできる。この「物語」は、空想やファンタジーではなく、事実として「過去にあったできごと」である。 この基本姿勢に基づいて、本講義では、世界各地の美術品 (=過去に人間の手で作られたもの) を彫刻、絵画、建築・工芸の三つのジャンルに分類し、それについて、最低限知っておくべき特徴、作者、制作背景を紹介する。授業を通じて有史から現代にいたる「美術の物語」のおおまかな見取図のインプットを目的とする。
日本美術史	日本の美術は世界の中でもたいそうユニークな性格をもっている。だが、根底にはアジアに共通するものがある。それは仏教美術である。古くインドを発祥としながら各地でさまざまな形で変化をしたこの大きな基盤の上に、アジア各地で独特の美術が育まれていった。したがって、日本の美術をより良く把握するためには、まず仏教美術について学ぶことが重要である。本講義ではまず仏教美術に関する概説を行ったのち、仏教美術の影響について解説しつつ、日本美術の特徴を見極めていきたい。
東洋美術史	わが国では近代以降、西洋からの影響が大きくなると、教育現場で東洋美術の歴史や実技を学ぶことがほとんどなくなってしまった。 今では多くの西洋の芸術家の名前や作品が一般的に知れわたっているのに対し、東洋については知られていることが極端に少ない。本授業ではまず、多くの人々が現在は忘れてしまった東洋の優れた作品を紹介するとともにそれらの作品の生まれた時代などの背景などを解説する。履修者にはまず東洋美術に興味をもってもらうことを目的とした。
西洋美術史	本講義では、西欧のルネサンスから十九世紀までの絵画様式を皮切りに美術史への理解を深めることを目的とする。単に個人的な好き嫌いだけでそれらの作品を判断するのではなく、複数の視点から作品を鑑賞する方法も身につけていく。それぞれの絵画にはそれらの作品が生まれた時代や地域ごとの特色がはっきり現われており、その時代その時代の背景や、各地域の当時の様子などをふまえつつ、その特徴を丹念に整理しながら把握していく。
工芸概論	古代から制作されてきた漆芸、染織、陶芸、木工、金工などは、明治時代（近代）になると「工芸」としてくくられることになる。この講義では、とくに漆芸、染織をモデル・ケースとして取り上げ、前近代から近代にかけて、これらのジャンルがどのように変化したか、あるいは、変化しなかったのかを検討し、それらの素材の特性や技術、デザインの変遷を理解する。さらに、各分野において、近代化にどのように向き合い、発展をとげてきたのかその歴史をまなぶことで、現代の工芸制作とデザインの方法を考える。また、適宜その日紹介した作品や事項について、自分の意見・感想をまとめてもらう。
デザイン論	今日のわれわれが日常生活に使う大抵の物には「デザイン」が施されている。そしてそれらはさまざまなメディアを通じて人々に対して紹介され、選択され、そして購入されている。この授業では、近年の情報メディアの変化と、デザインとの関係を軸としたうえで、現代社会において、デザインに求められていることとはなにかについて、考えていく。「人に対して望ましい状況であることを中心に考えて実践する」というデザイン本来の意義に対する認識を確かなものとしながら、デザイナーの視点や発想や手法への理解を深め、その社会的な価値を自覚することが当授業の目標である。

<p>素材論</p>	<p>ものづくりでは「素材」とその「加工技術」及び「応用」に関わる知識習得は重要である。更にそれらは技術の進歩とともに急速に変化しており、芸術計画、建築計画や商品開発、CMやアート制作における加工技術もその進歩に対応せざるを得ない。現在では複数技術の融合による多岐にわたる領域にまたがる技術の進歩がその礎になっている。芸術造形・デザイン・建築制作時に最低限必要な、伝統的素材と最新素材及びその加工技術を学習する。</p>	
<p>音楽概論</p>	<p>現在の音楽文化を知る上で、私たちが未知の音楽に出会ったときどのような姿勢で聴き、受け止めているのか、あるいは、私たちが慣れ親しんでいる音楽を私たちとまったく違うバックグラウンドをもつ人々がどのように聴き、受け止めているのかを考えることはとても重要である。技術の発達により音楽の行き来する範囲が大きく広がっている現在、世界中のあらゆる国々でそれまでふれることのない音楽に出会うことがあたりまえとなりつつある。この講義では、音楽や芸術、文化を考える方法について、世界のさまざまな地域で行われている音楽実践の事例を通して学ぶ。さらにそれを通して、自分たちの慣れ親しんできた音楽について、それを未知とする人々に対し、自分の言葉で説明する技術を身につけることを目指す。</p>	
<p>ポピュラー音楽論</p>	<p>『ポピュラー音楽史』では、「媒介～メディアーション」という考え方を中心に、音楽の制作、流通、聴取に係る技術がどのような歴史的変遷を遂げ、それがポピュラー音楽の作られ方、聴かれ方にどのような影響を及ぼして来たかを紐解いてゆく。レコードやCD、あるいはネットやラジオやテレビを通して耳に届くポピュラー音楽は、逆に言えばレコーディング技術やメディア技術なしには成立し得ない現象であり、作り手と聴き手を結ぶこれらの媒介がなければ、音楽は《表現》としてさえ成り立たない。本講義では音楽そのものに耳を傾ける一方で、社会学、政治経済理論、メディア論などの方法を通し、その音楽を可能にしている力学を見極める能力の獲得を目標とする。</p>	
<p>身体表現論</p>	<p>この授業では、身体表現における特に「演劇」を核として学ぶ。何かを「演じる」という行為は学生にとっては縁遠いものも多いことだろう。しかし、幼いころには、多くの子供たちが友人や兄弟、姉妹らとともに「ごっこ遊び」に興じた記憶をもっているのではないかと。しかし、いつの間にか子どもはごっこ遊びから「卒業」してしまう。一方で演劇は古代より続く文化の源流のひとつと言え、神話や文学、音楽などのさまざまな文化は演劇という行為とともに発達してきた。この授業では、子どもの遊びのひとつである「ごっこ遊び」と古代から続く演劇との共通点についてさまざまな演劇を紹介しながら感じてもらう。そして人々が演じることで、演者を見ることで感じてきたことを理解する。演劇を通じて広がった文化について知ること、文化に対する教養の枠を広げることへとつなげることを目的とする。</p>	
<p>身体文化演習 1</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に国内における諸文化について学ぶ。特に華道、茶道、柔道、剣道、などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>身体文化演習 2</p>	<p>身体を文化の問題として捉える視点、アプローチの仕方、理解の方法について学ぶ。全ての人間が等しく持つ「身体」であるが、文化的に異なる身体観や動かし方、感じ方、表現の仕方、伝え方などがある。本授業では、主に海外における諸文化について学ぶ。特にヨガ、太極拳などの身体の所作や動作による表現を行う具体的な事例を体験することで、自己の身体が文化とどのように関わっているのか、また自己の身体と他者の身体がいかなる文化的つながりを持つものであるのかを理解する。</p>	
<p>表現と社会</p>	<p>個人としての表現者が自身の作品を出す先は社会である。一方で表現者自身が属しているものもまた社会であり、たとえ表現者個人がその作品を生み出したとしても、そこには社会の影響が少なからずある。生み出されたさまざまな作品と社会とのかかわり、表現者自身と社会との関係性について、特に現代社会に焦点をあてて考えたい。授業では、さまざまなデジタル機器とインターネットの発達により、すべてのひとびとが表現者となり得、かつそれを手軽に社会に発信できる現代社会の特性についても考察する。</p>	

表現科目	表現と倫理	表現活動においては、常に倫理の問題がかかわってくる。ときにそれは表現者とその題材となった対象との関係であることもあり、時に法、社会との関係であることもある。とくに現代社会においては、多様な価値観の中で、ひとびとの倫理観も変化をかさねており、少し前には問題のなかったことでも、批判の対象となることもある。表現者は倫理的な問題を常に認識し、ときに対峙しながら活動を続けていくこととなる。この授業では、現代社会における表現活動と倫理のあり方について、歴史的な事例や、現代において生じた裁判、事件、マスメディアの批判、インターネット上での炎上などさまざまな事例を紹介し、考察していく。	
	表現と知的財産権	表現活動を職業にするということは、自らを好き勝手に外部に発信することではない。表現活動は、社会的行為である以上、社会を規律する法律と切り離すことはできない。表現活動を守り支える法律を知り、使いこなすことができること、それは、クリエイターが身につけるべきリテラシーとして重要な地位を占めている。著作権をはじめとする表現活動を規律する法律の基本的知識と、具体的な表現活動に法律がどのように影響しているかを、具体的事例を交えながら解説する。	
	写真技法	この授業では、カメラや写真表現の経験のない、あるいは浅い履修者を対象とし、写真表現やポートフォリオを作成するために必要な基礎知識と、技術を学ぶことを目的とする。実際に各自が持ってきたカメラを使い、そのカメラの機能と基本操作から授業を始め、ある程度の基本操作を学んだ後、写真スタジオなどを使ったライティングの習得と、Adobe Photoshopなどの写真編集ソフトを活用したデジタルレタッチテクニックの基礎を学ぶ。	
共通教育科目	日本文化概論	近年「日本文化」に関するテレビ番組や雑誌記事が数多く制作されるなど、国内外で「日本文化」に注目があつまっている。しかし、そうしたメディアの情報では、表面的な部分しかとりあげられないことも多い。本講義ではいわゆる「日本文化」について、現在ある事象と、そこにいたる歴史の変遷や背景について学び、「日本文化」について考えるための基礎的な知識を習得することを目標とする。「日本文化」と一言と言っても、分野もさまざまであり非常に幅広い。そのため、京都精華大学があり、受講生にも身近な場所である「京都」を中心におき、「京都」にかかわりの深いものを中心にとりあげる。	
	英語 1	「英語 1」では、まず、英語を使う上で必要となる基礎的なコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認したうえでレベル別にクラスを配当し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図り、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認することをめざす。	
	英語 2	「英語 2」では、「英語 1」に引き続き、英語を使う上で必要となるコミュニケーション能力を支える文法力や語彙力を強化することを目標とする。英語 1 と同じ習熟度別クラスのなかで履修者が高校までで学んだ英語の文法や語彙の知識を確認し、さらに高いレベルのコミュニケーションを可能にするための文法力・語彙力を身につける。語彙面では3,000語レベルの語彙の定着を図るとともに、文法面では基礎的な文法事項を整理・確認する。	
	英語 3	「英語 3」は必修科目として配置されている。日本語を母語とする国内学生を対象とした必修科目である「英語 2」までに身につけた能力をふまえ、英語による「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能の運用能力を発展的に高め、学術目的で使われる英語を理解するとともに、自分の考えを英語で的確に発信できるより高度な技術を身につけることを目標とする。また、授業を通して、多様な文化に関する知識と理解を深め、国際的な視野を身に付けることもめざす。	
	英語 4	必修科目である「英語 3」につづくこの「英語 4」においては、担当教員が紹介する資料や各自の持ち込んだ資料などを通じ、英語の文章構造とそれに伴う単語や文法について学習することを通じ、学問や芸術分野について履修者が英語でディスカッションできるようになることを目標とする。さらに英語によるライティングの力を伸ばすことで、自分自身の専門分野における研究活動や表現活動について、英語でプレゼンテーションできる力を身につけることを目的とする。	
グローバル科目			

日本語 1	「日本語 1」では、大学でレポートや論文を書くための基本的な技術を養う。与えられた情報を整理し、レポートや論文にふさわしい形式と組み立て方で、自分が言いたいことが読者に誤解なく伝わるようにまとめることを学ぶ。文体レベルで気を付けるべき句読点や記号の使い方について学び、さらに事柄に視点をあてた客観的な文、主述関係、引用のしかた、参考文献表の書き方、アウトラインの作り方、報告型のレポートの書き方などを学ぶ。レポートや論文にふさわしい基本的な「形式」を身に付けることを目標とする。	
日本語 2	「日本語 2」では、大学で学ぶために必要な、レポートを作成する方法を学ぶ。的確な表現を使い、正しい構造の文で、論理的な文章を書く力を身に付ける。また、さまざまなジャンルの作品における記述や批評をレポートし、合評における自分の作品のコンセプトや説明に役立てる。さらに、ショートショート、短編小説、エッセイ、新聞記事、論説文などさまざまなテキストを読み、あらすじをつかむ力を身に付け、解説文の必要な項目に着目する力を養う。また、簡単な批評や論文などを読み、作品のどこに着眼して批評が行われているかを考察する。	
日本語 3	「日本語 3」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。文字・語彙、聴解、文法、読解の問題を解きながら、日本語への理解を深める。また、現代小説やエッセイに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばし語彙力を身に付ける。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、本文について話し合いレポートを作成することで、アカデミックな文章を書く技術も養う。	
日本語 4	「日本語 4」では、日本語能力試験1級レベルの日本語能力の習得を目指す。漢字力と語彙力を伸ばし、時間や様子、関係性などを表す機能語について理解を深める。また、現代小説やエッセイなどに加え、新聞記事などの生きた教材を読み、日本語の読解力を伸ばす。読解問題に取り組む際には、まず語彙や表現について学習した上で、練習問題を解いて理解を深める。また、アカデミックな文章を書く技術を養うため、論理的なレポートを作成する実習を行う。	
中国語 1	日本においても中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。この授業では、中国語の発音や基礎文法とともに、実用的な会話を習得する。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力の向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。	
中国語 2	日本においても、中国語圏からの外国人留学生・旅行者が飛躍的に増加している。世界的な物価の変動に伴う円安によるショッピングなどを受けて、今後ますますこの傾向は高まるといわれている。そのような中、コミュニケーション能力を重視する中国語学習が求められている。「中国語 2」では、「中国語 1」で学習した内容を踏まえ、基本文法の習得を進める。異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を重視し、聞けて話せる中国語をめざす。	
韓国語 1	日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語固有の文字であるハングルの読み書きとともに、自己紹介などの基本的な会話ができることをめざす。また、朝鮮半島のことが理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地へ赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
韓国語 2	「韓国語 1」につづき、日本に最も近い朝鮮半島の人たちが使っている言葉と文化に親しんでもらうことが、この授業の大きなねらいである。この授業では、韓国語・朝鮮語の基礎文法の学習と会話の練習を通じて、基本的な日常会話と読解、作文ができることをめざす。また、朝鮮半島のことが理解できるように民族の風土や習俗などの紹介をおりまぜて、授業を進めていく。在学中に短期間でも実際に現地へ赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	

フランス語 1	この「フランス語 1」は、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、自己紹介や自分の住んでいる場所、好きなものなどについて初歩的な語句を使って会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、簡単な文章を読む練習をおこなう。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
フランス語 2	この「フランス語 2」は、「フランス語 1」に引き続き、発音の習得および基本構造の理解と必須語彙の習得により、量や時間の表現、未来や過去の表現、比較表現などについて会話による意思疎通ができることを目標とする。会話と並行して、「フランス語 1」よりも長い文章を読む練習を行う。また、フランスの美術、音楽、映画、ファッションなどにも触れ、フランス文化への理解も深めることで、在学中に短期間でも実際に現地に赴く意欲を刺激するような現地の情報なども提供しつつ、言語の基礎的な能力習得をめざす。	
タイ語	「タイ語」では、発音記号を用いて学習し、簡単な日常会話ができるようになることを目標とする。タイの文字は子音文字と母音符号によって成り立っている。授業ではタイ文字の書き方を練習し、簡単な読み書きができることも目指す。さらに、総合的な学習として、タイの文化を紹介し、タイをより身近に感じ、タイ語および文化への理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
ベトナム語	「ベトナム語」で履修者は、ベトナム語を学習するにあたって基礎となる発音、文字の読み方、書き方からはじめ、基本語句、基礎文法を学ぶ。ベトナム語の基礎文法、初歩的な表現を習得することを目標とする。授業では、発音、文字の読み書きを学んだ後、基礎的な文法事項を学んでいく。音声も用いた具体的な会話表現の中から文法事項を学んでいき、重要な定型表現は暗記することをめざす。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
インドネシア語	インドネシア語はインドネシア共和国の共通語として多くの人々に話されており、マレーシア語とマレー語とも非常によく似た言語で、それらの隣国でも通じる。表記は、アルファベットで、しかもローマ字読みすれば、大体通じるので、発音も構造も比較的簡単である。インドネシア語では、文字の発音から始め、初歩的な文法や文章を使って、インドネシア語の日常会話や旅行の時に役に立つ会話の修得を目標とする。授業は、口頭の練習を中心に進めていく。	
スワヒリ語	「スワヒリ語」は東アフリカ（タンザニア・ケニア・ウガンダなど）を中心に、地域共通語として広く話されている。この授業では、スワヒリ語の初級文法について学び、簡単なスワヒリ語文の作成の能力と、簡単な会話の能力を身につけることを目標とする。スワヒリ語にまつわるエピソードとして、タンザニアを中心とした、スワヒリ語圏の国の文化についても紹介する。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
ドイツ語	「ドイツ語」では、ドイツ語のアルファベットの紹介と発音練習からはじめて、ドイツ語の基礎的な文法事項について学ぶとともに、授業で出される練習問題をおこないながら、簡単なドイツ語の文章が読め、会話できることを目標とする。また、言語の学習と同時に、ドイツ語圏の国々のさまざまな文化や社会についても触れ、異文化理解を深める。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。	
スペイン語	スペイン語は20カ国以上、約4億人に話されており、国際共通語のひとつと言われている。「スペイン語」では「読み・書き」よりも「聞く・話す」ことに重点をおきながら、スペイン語の基礎を学んでいく。まず、スペイン語の音に慣れ、発音を身につけ、自己紹介、挨拶表現などを学ぶ。また、文法ではスペイン語に特徴的な点を学び、文法で学んだことを用いながら会話学習、聴解練習を通じて、自分の身の回りのことが表現できるようになることを目指す。	

共通教育科目	グローバル科目	イタリア語	「イタリア語」では、初めてイタリア語に接する学生を対象に、発音から始め、基本的な文法を学習しながら、さまざまなシチュエーションに応じたイタリア語表現を身につけ、簡単な会話ができるようになることを目標とする。言語の学習と並行して、イタリアの文化をより深く理解するとともに、イタリアと日本の文化間の違いや自己表現の違いなども学ぶ。履修者はこの授業を通じ、短期間の現地観光をする際に苦にはならない程度の言語の習得を目標とする。		
		サステナビリティと社会	人類の経済・社会活動に起因する地球環境問題が世界中で顕在化する中、現代の世代が将来の世代の利益や要求を充足する能力を損なわない範囲内で環境を利用、生活していく「持続可能性」が、人類がこの地球環境問題を克服するための一つの指針として重要視されている。 この授業では、各分野における持続可能な社会に向けての取り組みの状況と課題を学習する。 また受講生が大学4年間で獲得を目指す専門との関係も含めて、持続可能な社会のためにどう取り組むかを考える。 最終回の授業では、本人の理解を得たうえで受講生から提出された期末レポートを発表してもらい、その内容についてのディスカッションを行う。		
		現代社会の諸問題	現代社会の諸問題について、倫理、社会、文化、政治、経済など様々な観点からアプローチする。新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどのメディアで報道されている現在進行中のトピックスをケース・スタディとして取り上げながら、さまざまな立場・視点から考察を加える。対立構造にある問題については、自らの意見をまとめて表明できるようにするとともに、他者の立場や視点を俯瞰的に理解し、問題の本質をたどる姿勢・態度を身につける。		
		海外ショートプログラム入門	「海外ショートプログラム入門」では、現在のわたしたちを取り巻く世界の諸課題を改めて認識するとともに、短期あるいは長期の旅や留学等を通じた、海外への渡航体験の意義を考察する。履修者は各自の専攻や共通科目でこれから在学中に体験するであろう海外でのフィールドワーク等の調査技術を身につけるとともに、異文化適応のための心理学に触れ、危機管理の方法についても学び、各自のこれからの渡航、滞在と調査のための計画を発表する。		
		世界と食	2050年には世界の人口は100億人に達すると言われ、食の問題は益々注目を浴びていくことになる。しかし、食の問題は、カロリーの問題であるばかりか、共食による社会的紐帯を確かめ合い、加えて、味覚という人間の嗜好や快樂の問題にも結びつく。この講義では、世界の食文化を通じ、我われの食の問題を見直し、将来の食糧問題の解決策を探る。受講者は、自らの食生活を顧み、グローバルな問題として食の問題を考察することが求められる。		
		日本語学概論	この授業では、「日本語学」の基礎知識を学ぶとともに、周囲に溢れるさまざまな「言語現象」、学内にも多く在籍しているさまざまな米国から来ている外国人留学生の存在に目を向けることで、21世紀を生きる上で必要とされる論理的思考力および自らを相対化して客観的に物事を分析する力を養う。授業は主に講義形式でおこない、授業の指定教科書の第1部「社会・文化・地域」、第5部「言語一般」、第6部「日本語の構造」の内容を中心に進める。		
		言語学	この授業では、「ことば」について学ぶ。各回のテーマとしては、すべての言語に共通する特徴や、人間が使うことばに対し、動物はどのようなコミュニケーションをとっているのか、ことばはどのように、なぜ変化してきたのか、などの具体的な問題を取り扱うことを予定している。これら各回のテーマに触れることで、ことばとはそもそも何なのか、どのように働くのか、という根源的な問いについて、受講者自身がその答えを見出すことをめざす。		
		リベラルアーツ科目	自由論	この「自由論」は本学が標榜する「自由自治」ということばを自らのことばとして語れるようになるための入り口としての役割を担う。本講義の主たるテーマは、いわゆる意思としての自由ではない。本講義で論じるのは、誤解されやすい哲学用語でいう必然にたいしての意思の自由ではなく、市民としての自由、社会における自由についてである。逆にいえば、個人にたいして社会が正当に行使できる権力の性質、およびその限界を論じたい。	

<p>シティズンシップとダイバーシティ</p>	<p>「シティズンシップ」とは「市民権」を指すが、「日本では市民社会が不在である」あるいは「未熟である」と、常套句的に言われる。そのとき、「市民社会の不在」ないし「未熟」とは何を指しているのだろうか。そして、それが本当のことだとするならば、私たちは何を知り、考えなければならないだろうか。本講義では、毎回折々の時事ニュースを素材に、日本社会で起こる事件等の背景としての「日本の市民社会の諸問題」に接近する。</p>	
<p>創造的思考法</p>	<p>こんにちの多様化・複雑化が加速する社会では、問題解決や価値創出の手段として、様々な要素を有機的に組み合わせ、全体としての新しい価値を創出して行く創造的な思考が求められる。このような思考をはじめ、アートあるいはデザイン的な視点やアプローチなどを学び、世界を捉えることで、各自の属する専門分野を超えたクリエイティブな発想力と提案力を身につけることを目標とする。授業ではアートシンキングやデザインシンキングなどのさまざまな思考法とそれを活かすような事例などを紹介するとともに、各自の問題意識、専門分野などをもちよることで、視野の拡張と思考の深化、拡大をめざす。</p>	
<p>情報と倫理</p>	<p>今日のインターネットの普及は、電子メール、Webによる情報検索、オンラインショッピングなど、私たちの生活にさまざまな恩恵をもたらしている。しかし、便利になった反面、個人情報の流出、著作権の侵害、ネット上での詐欺など、いろいろな問題が起こっている。さらに、インターネットや携帯電話の利用者が低年齢化するとともに、児童や生徒を巻き込んだトラブルや事件も目立つようになってきた。 本講義では、初めに、インターネットの「光と影」（便利な点と危険な点）について解説する。次に、インターネット社会（情報社会）におけるルールやマナーを考えていく。ネット被害やセキュリティについても学習する。また、個人情報とプライバシー、知的財産全体について概説したい。</p>	
<p>人権と教育</p>	<p>人権とは「人が人として当然に有する権利」である。しかしながら、過去から現在に至るまで、規模の大小や国内外を問わず、日々人権侵害が発生しており、特に、マジョリティ（多数者）中心にシステムが構築されている現代社会においては、マイノリティ（少数者）は絶対的に社会的弱者の立場にあるがゆえに人権侵害を受けやすい傾向にある。そこで、こうした現状を踏まえ、マイノリティを巡る人権侵害事例を中心に扱いつつ、人権とはそもそも何なのか、そして、人権を守る手段には一体どういったものがあるのかについて学ぶことを目的とする。 なお、本講義では従来の一般的な講義形式にとらわれず、ビデオ教材などを使用することによって、より身近な問題として感じられるように配慮をし、また、グループワーク等を通じて、受講生自身が主体的に考え、学べるような授業を行う予定である。</p>	
<p>グローバル化と社会</p>	<p>私たちが住まう日本という国の抱えるさまざまな問いを皮切りに、世界の現状と来歴（どのような経緯で今ようになったのか）、これからどう変動していくのか、私たちはその奔流のなかで人間として尊厳を保ちあえるのか、といったことを考えてみたい。果たして日本は先進国なのか、「日本の常識は世界の非常識」といわれるのはなぜか、平和憲法を持ちながら戦争で利益を得ている矛盾、移民問題など、日本に暮らす中でもさまざまな問題を感じる機会があるだろう。あまり抽象的な次元で議論するのではなく、現代の国際社会が直面する具体的問題を手掛かりに、視野を広げる作業をしていく。</p>	
<p>障害学</p>	<p>現在の社会において、障害者は圧倒的に少数派（マイノリティ）である。少数派であるということは単に「数が少ない」という意味にとどまらず、多数派（マジョリティ）のことしか考えずにつくられた社会の中で、さまざまに抑圧されたり、不利益を受けていることを意味する。障害者の場合、「障害があるから、いろんなことができなくても仕方がない」と考えられてきた歴史が長くあった。さまざまな障害者が何を考え、どんなふうにも暮らしているのか、その「なまの声」を知らない人が圧倒的に多いのではないか。この授業では、さまざまな障害者の姿、経験、意見などを紹介し、その背景を考えることを通して、私たちをとりまく「社会のあり方」を多角的にみつめていく。「目からうろこ」の経験をした人、障害のことを考える・行動するのは「おもしろい、やりがいがある」と思えるためのきっかけを提供できればと思う。</p>	

哲学入門	<p>ポスト・トゥルース（真実の後）の時代、そう現在が呼ばれ始めている。真実や事実というものがないがしろにされ、政治的効果を狙った根拠がない誹謗中傷や噂話、すなわち「デマ」が猛威をふるっており、実際に世界中でその効果は大規模に出現している。だが、たとえば、諸君が愛するもの、愛する人についてデマしか知らなかったとしたらどうであろう。そのような悲しいことが他にあるだろうか。このような衰弱が、許されてしかるべきなのか。わたしたちは、このような趨勢に抵抗するために、芸術的な創造行為は政治的な創造行為と切り離せないことを確認しつつ、「真理の芸術（アート）」としての哲学を考えたい。端的に創造行為に「役に立つ」ように、具体的に芸術家や音楽家などの名前をあげつつ、「哲学的芸術入門」としても受講できるように配慮する</p>
政治学	<p>本講義では、現代政治の構造を、とりわけ「階級」と「ナショナリズム」に着目しながら、考察する。「階級」は、「1%と99%」の標語に象徴されるように、現代世界を引き裂く巨大な力として現れている。他方、「ナショナリズム」は、同胞意識を基礎として、分裂を縫い合わせることを期待されている。しかし当然、現実には、止めどなく分裂が進行し、ナショナリズムは排外主義へと転化しているのが実情である。なぜ、現実がこのような状況になっているのか。本講義では、近代の政治史を振り返りつつ、日々現れる時事的トピックにも言及しながら、現代世界の政治状況を解析する。</p>
法学	<p>この授業では、身近なニュースや問題を題材に、憲法・刑法・民法という代表的な3つの法律を学習する。法律について日常的に身近に感じることはまれかもしれない。日ごろ、無縁に感じる法律について、「難しい」と思っている方も多いだろうが、一方で、我々は知らず知らずのうちに法律のバリアに守られ、法律にしたがいながら生活をしている。刑事裁判とも無縁なつもりでいても裁判員として関わることも起こり得、些細な日常のやりとりにおける損害でも法律が機能する事もある。選挙権は憲法改正への投票権をもつこととなる。普段の何気ない風景や場面に潜む「法」を発見し、「法学」という視点からものごとを考える力を養うことを目標とする。</p>
日本国憲法	<p>「憲法」はテレビや新聞で見聞きするものだけでなく、私たちの「あたりまえ」の生活にも「憲法」が大きく関係している。そうした「憲法」の働きを広く知り、それに基づいて考える能力を身につけることが、この授業の狙いである。現在、「憲法」を改正しようという議論もさかんになっている。そうした議論を少しでも身近なものとして考えられるようになるため、授業では、身近なニュースや問題を題材に、そこに潜む「憲法」を発見し、最終的には「憲法」についての自分の意見を表現できる力を身につけることを目指す。</p>
物語論	<p>「物語」の発生と展開を知り、その特色について、関連する諸事情にも広く目を向けて考えられるようにする。世界各地で生まれた「物語」はどのようにして生みだされたか、生み出された物語が神話、演劇、文学などへと発展し、生成されていったか、各地のさまざまな事例を紹介しながら学ぶ。世界中で生み出された物語について、地域、時代などの背景に触れ、その類型化などの分析を行う。加えて、現代でも生み出されるさまざまな物語についてもこれらの物語と比較することで、「物語」とひとつひとつのかかわりについて考える機会とする。</p>
考古学	<p>考古学とは、その地に生きていた人々が地上や地下に残したさまざまな痕跡（遺跡・遺構・遺物）から歴史を考える学問である。考古学の「遺跡や遺構や遺物のような物質的な資料から歴史を読み取る」という独特な手法は、文献資料から歴史を見る方法とは根本的に異なる方法である。授業では、このような考古学の特質とその方法を具体的に解説したうえで、環境と道具に関連してエジプトを、思想と文化に関連して中国を取り上げた後、日本の古代はどうとらえられるのかを探っていく。</p>
民俗学	<p>「民俗学」というと、古いことや過去について学ぶ学問であると考えられることが多いが、この授業では、現代を生きるわたしたちの問題として「民俗」を考える。そのためにこの講義では、盆や正月の行事など、私たちにとってできる限り身近な民俗的事象を多く取り上げる。それらの行事の検討を通じて、現代の生活と民俗との深い関わりを認識し、自分自身の考え方や行動を、民俗の視点から、今一度見つめなおすことを目的とする。</p>
情報科学概論	<p>この「情報科学概論」では、情報科学技術のさまざまな基礎事項を理解し、コンピュータ・ソフトウェア、知識情報処理、情報理論、数理科学とその応用、ネットワーク、データマイニング、アルゴリズム、モバイルシステムでの情報伝達等の現代社会に広がるさまざまな分野の概要や研究動向を学ぶ。履修者は現在社会において生活の中に溶け込むものの中にある技術的な面を知ることから、これからの時代におけるさまざまな表現活動と技術の関係性を理解し、在学中の表現活動における広がりや可能性を見出すとともに、社会の可能性と問題を認識する事を目的とする。</p>

データサイエンス入門	データサイエンスは、21世紀を切り拓く分野であり、ビッグデータ分析、人工知能などの新技術を包含するだけでなく、社会、ビジネス、自然環境における意思決定、問題解決に不可欠な基盤的な科学となってきた。本講義は、データサイエンスの今日的な意義、歴史・将来展望、基礎的な知識、学習方法を俯瞰的に学習するとともに、実際にデータサイエンスのもたらすビジネス・社会的なインパクト事例や最先端な研究トピックスを紹介する。これらの講義を通じてデータサイエンスの重要性について理解を深める。
統計的思考法	あらゆる学問分野、産業分野で、調査・実験・観測などの様々なデータを数学的に扱うには、確率と統計が必要となり統計によりデータを整理・分析するための手法が提供され、確率はその基礎的数理となる。この「確率統計的思考法」においては、統計データ解析をおこなう際に必要となる確率と統計の基礎を、扱う。入学するまで数学を苦手とする学生においても、コンピュータの基本ソフトを活用しながらその数字の意味や背景を知ること、自然と思考方法を習得できるようになることを本授業の目的とする。
プログラミング 1	こんにちの社会において、ひとびとの誰もが日常的に触れているインターネットだが、このインターネットにおいては、ウェブ上のプログラミングは欠かせない。プログラミング分野において得に身近なものであるこのインターネットについて、この授業ではWeb標準技術であるHTML5、CSS3、JavaScriptの基礎的な要素をまんべんなく修得して、この授業の合間や、修得後も自学・自習をしながらプログラミング開発できることをめざす。
プログラミング 2	今日の社会において日常の中に隠れているプログラミングについて理解するため、「Python」などのプログラミングに慣れていない履修者でも取り組みやすいアプリケーションを用いたデータの加工、分析、可視化技術を身につける。このようなスキルを修得することを通じ、問題解決力や論理的思考力、創造力を養うために、オンラインコンピュータゲーム上で建造物や自動装置、論理回路などの製作をプログラミングで実現する演習を実施する。
プログラミング 3	コンピュータは、極めて高度な情報処理を人手を介さず行っているように見えても、どのような手順で情報を処理・加工するかを指定する命令の列（プログラム）に従ってのみ動作している。プログラミングとは、コンピュータを思い通りに動作させるためにプログラムを作成する行為である。本授業では、演習を通して実際にプログラムを作成することで基本的なプログラミング技術を習得し、コンピュータの基礎知識を習得することを目的とする。なお、本授業では、プログラムを記述する言語（プログラミング言語）として、現在最も勢いのある言語のひとつであるPythonを用いる。
プログラミング 4	今日の社会においてさまざまな場所でデジタル画像は普及している。特に、スマートフォンの爆発的な普及でより身近なものになった。一方で技術的な進歩もめざましく、計算機による画像処理は科学から娯楽まであらゆる分野で積極的に研究されている。この授業では、授業で紹介するいくつかの課題を通して、画像処理とそのプログラミングによる実装を学ぶ。またグループワークによって実際に動作するシステムの構築に挑戦し、理解を深める。
情報テクノロジー 1	スマートフォンなどの情報端末は、情報社会において生活やビジネスに欠かせないツールとなりつつあり、通信の技術革新と生産技術の進化で今や社会基盤として世界的にも広く浸透するに至った。また今後も新しい技術により、情報端末はウェアラブル端末などの新しい形に進化し、益々生活に浸透するものとなると思われる。 本科目では、情報端末の歴史をたどりながら、情報端末の通信方式やサービスの仕組みについて学習する。また、スマートフォンによるアプリやインターネットサービスの活用、画像や動画などのマルチメディアコンテンツの作成方法などを通じてビジネスへの有効活用ができることを目指す。
情報テクノロジー 2	デジタル技術の発展とインターネット利用の拡充は、様々な情報サービスや新しいビジネスモデルを創出しただけでなく、人間社会へ多大な影響をもたらした。本科目では、アナログ情報のデジタル化から圧縮技術の基礎を学び、その上でインターネットの利便性の広がりに伴う様々な技術的取り組みを理解する。さらに、これらの技術革新が産業構造や一般生活にもたらした影響と変化について、事例を以って理解し、様々なサービスモデルの創成と人々のITスキルの向上が今後の社会をどのように変化させていくのか、その考察も試みる。

人類と人工知能	本講義はビッグデータと人工知能についてこれまでの歴史、我々との関わり合いを事例を挙げながら紹介する。人工知能とは人間の思考プロセスをモデル化した処理を含むソフトウェア技術である。ビッグデータに人工知能を適用することにより、これまで知られてない新たな知識の発見、蓄積、統合、配信を実現している。ビッグデータ分析は人工知能が適用されることにより、次世代の新たな人智を築く基礎となりつつある。本講義では、実際のビッグデータに人工知能を適用することによってどのような知識エコシステムを生むのか、事例を紹介しながら、その適用手法について学ぶ。
教職コンピュータ入門	教職課程履修者を中心に、マルチメディアを扱うためのソフトウェアの使い方を学ぶ。画像処理、3DCG、表計算ソフトを用いた二進数十六進数の計算などを理解することで、コンピュータの使い方だけではなく構造を学習する。以上の講義をふまえて教職課程上必須となる知識を学ぶとともに、教職免許取得後の教育現場において、各々が生徒へコンピュータの操作や仕組みを説明できるだけの技術と知識を修得する事を目的とする。なお、教職課程履修者を主な対象とした科目であるが、今日の社会において必要不可欠なものとなるこれらの技術を修得することは教職課程対象者でなくとも必要な知識では全くない。
自然科学概論	人類は自然科学と向き合い、その発達とともに今日の社会を築いてきたといえる。この「自然科学概論」では、物理学、科学、生物学、地球科学、天文学など自然科学の各分野それぞれの成り立ちや体系、解明をめざす問題、自然科学全体や社会とのかかわりなどについて学ぶ。自然科学全体を概観し、情報化時代の現代において、「人間とは何か」、「科学的認識とは何か」、科学技術が人間に何をもたらしているのかについて理解を深める。
科学史	この授業では、古代から現在に至る科学の歴史を概説する。現代の科学や科学技術を考えるうえで、17世紀のヨーロッパにおいて起こった「科学革命」は重要なイベントである。この科学史上の特出すべき事象を焦点としながら、近代科学の方法論と自然観がどのように形成されてきたかを具体的に理解し、その特徴と問題点をさぐる。授業では、各時代に起きた特筆すべきできごとを紹介し、それらのできごとと現代社会との関係性などを紹介し、「歴史」と自身とのつながりについても考える機会とする。
生物学	現生生物は長い地球の歴史の中で、40億年近い時間をかけて多様に進化をしてきた。その長い時間の中で、生物領域に特有の様々な仕組みや形や働きが選択され分岐してきた。この講義では、生物多様性の重要性や、ひいては「ヒト」という生物の特性を理解していくことを目指す。具体的には、生物現象の一定の領域の諸事例を提示しながら、どのような構造と機能が、それを支え、そこからどういふ生物学的意義が明らかになるのかを考える。
数学的思考法	現代社会では、種々の社会現象、自然現象の分析に数学的方法や数学的思考がもちられている。数学とその基礎となる数学的思考は、さまざまな学問分野の基盤のひとつといってよいだろう。この講義では、数学と数学的思考の歴史を概観し、数学的思考の基礎となる数学的論理や方法を学び、芸術的文化的学問との関係や異同について、具体的な数学の領域を参照しながら学んでゆく。授業においては履修者自身が実際に数学的な思考につながるワークに取り組むことで、実践的に思考法を身につける時間を設ける。
行動心理学	心理学の中の特に「行動心理学」は、意識を対象とする「心理学」に対し、「全体的行動の科学」としての心理学を総称するものにあたる。この授業では、その入口として、比較心理学、動物心理学、エソロジー、行動生態学、比較認知科学、人類学、進化生物学などの諸領域で明らかにされた知見を総合して、行動の機能、発達、進化について概説する。進化心理学についても簡単に紹介する。さまざまな領域を知ることにより、発達してきた心理学の体系を理解し、さらに心理学を考える上での入口としたい。
スポーツ実習 1	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツや身体表現の実践を通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進をはかる。動きと表現、動きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサルなど一般のスポーツ競技だけでなく、ダンスや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラスを構成する。自身が各種種目、競技を体験することで、教員をめざすものにおいては、生徒を指導する際の技術を実践的に学ぶものとする。

リベラル アーツ 科目	スポーツ実習2	特に教職課程における必修科目であるこの授業では、スポーツ実習1につづき、スポーツや身体表現の実践を通して身体運動能力を養うとともに、健康の保持・増進をはかる。動きと表現、動きとリズム、動きと身体構造を学ぶため、卓球、バスケットボール、テニス、バレーボール、バドミントン、フットサルなど一般のスポーツ競技だけでなく、ダンスや身体科学等の要素を取り入れた授業も含めてクラスを構成する。自身が各種種目、競技を体験することで、教員をめざすものにおいては、生徒を指導する際の技術を実践的に学ぶものとする。	
	大学連携プログラム	この授業は集中授業として開催を予定している。主に夏季休暇期間などを利用し、国内外の大学間で連携した授業を開講する。各大学における共通した専攻分野あるいは異なる分野の学生が一同に会し、共同で1つの目的に沿ったワークショップや演習などを通じ、それぞれの分野における学びを共同体験する中で生まれる新たな知見や技術を修得する。授業はグループワークなども取り入れたものとなるが、各グループは原則として別々の大学、学部のもの同士で構成されるものとし、授業を通じた新たな視野の獲得に重きを置いた形で開催する。	
	インターンシップ1	この科目では、自由で創造的な未来を築くためにはどのような社会へのかかわりが求められていくのか、社会問題解決に向けたイノベーションを実践するNGO・NPOでの活動を通して、「組織人」としてではなく「社会人」「地球人」としての社会の関わり、働き方を考える。日ごろの大学での学びが社会でどのように役立つのか、その社会的な役割や意義を解するとともに、学ぶ楽しさや面白さの気づきを、「幅広い業種での職場体験」を通じて検証する。	
	インターンシップ2	企業や行政機関が独自に募集を行うインターンシップ先や、全国の経営者協会等が斡旋するインターンシップ先の中から、希望するインターンシップ先を探し出し、許可を得てきた学生に対して、その自主的な活動をバックアップすることを目的にして開講されている科目である。自らが受け入れ先を探し、交渉まで取り組むことにより、自らの取り組みたい関心を深め、意欲を高め、より充実した体験を通じた自らの職業観、社会人としての能力向上をめざす。	
	海外ショートプログラム	この授業では本学が用意する世界各地が舞台となる。海外の現場での学修を通じ、学生がグローバルな視野を獲得する契機とする。学修目的を大きく「語学研修型」と「テーマ設定型」の2種類に分け、それぞれのプログラムごとの目標に向けて、1週間から4週間程度、海外の教育機関等の現場で受ける実地研修を通じ、異文化での生活を体験しながら行う学びによって、グローバルな視野を獲得し、より高度な学修への動機づけを行う。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れる前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。	
	国内ショートプログラム	この授業は本学が用意する日本各地が舞台となる。前期・後期ともに国内のフィールドを選定し、担当教員による事前指導の後、現地での約一週間の引率指導、地域研究を実施する。歴史、文化、自然、環境、生活、社会問題などを切り口にテーマを設定し、現地での見学、交流、体験、実践を通して、各フィールドにおける知識、理解を深め、そこから日本あるいは世界を相対視することを目的とする。この授業は現地でのものを基本とするが、現地に訪れる前には現地の文化や諸制度を理解するための事前学習と、事後の報告会などを予定している。事前の理解と事後の共有を通じ、体験を学修へと結晶化させる。	
	産学公連携PBLプログラム1	チームで活動するとはどういうことかを理解した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、本学が連携先とする企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自己肯定感」「自在に人と関わる力」を身につける。企業等からの課題は具体的であり、学内だけではなく学外でも積極的に活動することが求められる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。	
	産学公連携PBLプログラム2	「産学公連携PBLプログラム1」の受講を経て課題解決活動とはいかなるものかを体得した学生が、10～15名程度のチームを1つのクラスとし、企業から提供いただく実課題を解決することを通じて、「社会人基礎力」「自己肯定感」「自在に人と関わる力」をさらに伸ばすための科目である。特に受講生自身が設定した成長目標をどのように達成するかに重点が置かれる。授業の最後には企業への報告とプレゼンテーションの機会を設け、授業で得られたさまざまな知見やアイデアを実際に協力企業の方に伝えその評価を得ることで実践的な学びへとつなげる。	
	社会実践力育成プログラム		

キャリア1	1年次の第1クォーターに置かれる、全学生対象の必修科目である。卒業生の実例をもとに卒業後の多様な進路の可能性を示すことで、入学者が抱える将来に対する不安を和らげ、進路に対する視野を広げ柔軟な考えを持てるよう促す。また、学生一人一人の強みや弱み、傾向を把握したうえで「将来何がしたいか」を考え、そのために「大学生活をどう過ごすか」の各々の目標設定を行い、大学での学びや生活と社会、進路との連続性に対する意識を醸成する。
キャリア2	インターンシップに関心を持つ学生を対象とし、インターンシップ参加前には学外企業や団体等とやりとりをする上で必要不可欠なメールや電話対応、文書作成等の一定のビジネスマナーを身につける。「インターンシップ1」「インターンシップ2」を受講する学生は本科目を必修とし、インターンシップ参加後はインターンシップで体験、観察、獲得したことについて振り返り、成果を報告書としてまとめ発表を行うことで、インターンシップに関心を持つ他学生への情報共有も行う。
キャリア3	主な進路として国内外の企業への就職を希望する学生が対象となる。業界や職種の種類や仕事内容、多様な働き方やその仕事に必要な要素に関する理解を深める。そのうえで、社会で自身がどのような役割を果たしたいか、それをどのような仕事を通して実現させたいか、大学時代のこれまでの学びから生かせる自身の強みは何か、その仕事をどう探すか、など、仕事に対する考えや意識を具体的に明確にし、それを他者に言語化して伝えPRにつなげるための実践的な授業を行う。
職業研究	この授業は、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、まず職種研究として、「営業職」「企画・管理職」「事務職」「サービス・販売職」などのいわゆる「職種」について理解することからはじめる。その次に、実際に仕事に従事している人をお招きし、個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。
ベンチャー・ビジネス論	高度な成熟化社会の到来とグローバルな視点での経営環境の変革期を迎えた中で、日本経済の持続的な成長のためには、イノベーションを成し遂げ新規事業を創造していくことが求められる。そして、その担い手として期待されるのが、企業家精神あふれるアントレプレナーに率いられたベンチャー企業の存在である。本講義では、ベンチャー創造の枠組みについて、先進事例の紹介などもまじえ、イノベーションやアントレプレナーシップ、ベンチャー企業の誕生と成長など、幅広い視点で講義を進め、事業創造の主体としてのベンチャービジネスに求められるマネジメント能力などに関する知識の習得を図る。
スポーツとビジネス	スポーツ産業における、特にイベントビジネスの位置づけと特性、イベントの構造や優れたイベント運営についての理解を深め、市民レベルのイベントを運営する際に必要な知見を学習する授業である。履修者は、本講義を受講することによって、(1)イベントの運営を評価する力や、(2)イベントの持つ社会的機能について考える力を身につけることができる。さらに、優れたイベントとするための運営ノウハウを習得することができる。
表現活動と経済	「芸術と経済」は「水と油」のような関係として理解されるかもしれない。しかし、芸術活動も歴とした経済活動である。芸術の創造者は経済学の言葉で表わせば供給者であり、芸術作品を購入したり楽しんだりする鑑賞者は需要者である。このような供給者と需要者が、モノの売買取引する場を「市場」と呼んでいる。そこで、この授業では芸術作品に焦点を当てながら、市場取引の経済学的なメリットとデメリットを理解して欲しい。さらに、芸術を含めた文化財が市場主義に馴染まない側面についても言及していきたい。
クリエイティブの現場	この授業では、市井の人から仕事の多面性を学び、働くことの本質に迫ることを目的とする。授業では、主に「クリエイティブ」業界と言われる分野の職種について理解する。次に、特に履修者が卒業後の自身をイメージできるような卒業生を中心に、実際に仕事に従事している人から個別具体的に仕事の実例をうかがい、そのゲストのキャリアを通して、仕事人生の生き方や仕事の本質にふれることにより、自己のキャリア構想のヒントを得る。

キャリア科目	日本の企業文化研究	本学で多数在籍する外国人留学生の中には日本での就職をめざす学生も多い。これから就職活動をはじめめる3年生の留学生には特にその点において苦戦する学生も多いことだろう。この授業では、外国人にはわかりづらい日本企業独特の制度や文化について学び、以後の就職活動における心理的な負担の解消と諸制度理解の不足による事務的な手続き等の失敗の防止を支援する。授業では、進路を決定した4年生の留学生をゲストとして招き、先輩からの助言を直接受ける機会も置くこととする。	
	ポートフォリオ実習1	デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。厳しいクリエイティブ職採用の中、本格的な就職活動が始まってからでは準備不足が原因で本意な結果が予想される。一度制作しても就職活動をしながらい業界・職種別に更にブラッシュアップが必要となってくる。この授業ではポートフォリオ制作初心者が、最低限、今後の就職活動に必要な、採用に関わるポートフォリオの土台作りとして、必要な知識、スキルを身につける。	
	ポートフォリオ実習2	デザイナーをはじめとするクリエイティブ業界に就職するには「作品ポートフォリオ」が必要である。「ポートフォリオ実習1」の履修者を対象とする。したがってこの授業はポートフォリオ制作の経験を有するものを対象とする。デザイナー、プランナーなどのクリエイティブな企業をめざす学生に対して、今後の就職活動で必要となる採用に関わるポートフォリオについて、効果的に伝えるために必要な知識、スキル、テクニックやノウハウを身につける。	
	コミュニケーション実践演習	この授業は、相手の考えや意見をきちんと理解し、自分の気持ちやアイデアをわかりやすく説明できる「コミュニケーション力」をアップさせることを目的とする。コミュニケーションのスキルは、定形を覚えるだけのマナー講座などでは身につかない。即興演劇、インタビュー、グーグルの社内研修で用いられているマインドフルネスなどさまざまな手法を使って、人前で自分をオープンにする姿勢を築き、その場しのぎではない本物の聞く力、話す力を養っていく。	
マイナー科目	美術概論1	「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。この授業は、本学で学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野を通じて、人間がなぜ美術を必要とし発展してきたかといった、美術と社会、美術と生活などとの関わりを知り、芸術としての美術について理解を深めながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。	
	美術史1	この講義では、本学の学ぶことのできる分野である洋画、日本画、彫刻、陶芸、染織、版画、写真、映像など美術に関わる分野の表現の歴史とその作品や成り立ち、表現技法との関わりから現代にいたるまで、各分野における美術表現の変遷についてを学ぶ。また制作表現を行う上で重要な関係にあるこれらについて、理解を深めるとともに各自が自身の表現の立ち位置を確認しながら、美術に対する基礎知識を身につけることを目的とする。	
	美術リテラシー1	「造形芸術」あるいは「造形美術」は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。この授業では、本学で学ぶことのできる洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる分野それぞれの表現の基礎知識と、その表現方法を実践を通じて学ぶことによって、創造的な表現と作品の鑑賞の能力を身につけることで、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
	美術リテラシー2	造形芸術あるいは造形美術は様々な素材に働きかけることによって創造される視覚的、空間的な美の表現を目指す芸術である。美術リテラシー2では、美術リテラシー1に続き、洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、写真、映像表現など、美術に関わる各分野の表現の基礎知識とその表現方法を実践を通じて学ぶことによって、さらなる創造的な表現と鑑賞の能力を身につけ、芸術としての美術の意義を学ぶことを目的とする。	
共通教育科目			

美術特講 1	20世紀半ば以降、文化や芸術に関わる理論的探究は、その裾野を狭義の美学や芸術学を超えた領域（たとえば記号論、精神分析、ジェンダー論、ポスト・コロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ、メディア論、など）にまで押し広げた。こうした経緯を念頭に、まず「表現」と「表象」の違いについて理解した上で、美術にとどまらず映画、音楽、演劇、文学などの幅広い領域から作品、作家、運動を紹介しながら、自らの「表現」の素材や契機として時代と社会から何かを掘み取るための思考を促す。	
美術特講 2	「現代アート」は、従来の枠組みを破壊し、新たな表現を求めることで発展してきた。それは、わたしたちの感性に訴え、理性的に問題を提起するとともに、一方で私たちの欲望を掻き立てている。こんにち、私たちの社会においてそうしたアートや芸術はどのような意味をもつのだろうか。あるいは、それをどのように経験することができるのか。この授業では、主に20世紀後半から現在までのアート作品を通じたこれらの問いへの答えを考察する。	
デザイン概論 1	デザイン学部にある、ビジュアルデザイン、プロダクトデザイン、建築、イラストをはじめ、ゲーム・アプリ・Webなどのインタラクティブデザイン、動きをデザインするモーションデザイン、地域や社会をデザインするソーシャルデザイン、インフォメーションデザイン、UIやUXなどの行動デザイン、人と人をつなぐコミュニケーションデザイン、デザインシンキングなど、世の中には様々なデザインと名前のつく物事がある。それら様々なデザインの事例と内容を紹介し、デザインの領域やデザインの役割など、デザインについての理解を深めデザインについての基礎知識を身につける。	
デザイン史 1	本講義では、産業革命以降のプロダクト、建築、インテリア、ファッションなどの近代デザインの歴史をたどっていく。住宅、車、テレビ、スーツ、椅子、スプーンなどのデザインされたものの生産史だけではなく、そのものがどのように流通し、私たちの生活空間のなかに受け入れられてきたのかを学んでいく。さらに、展覧会などを通して実例を紹介することで、それらの素材の特性や技術の仕組みを理解する。このような講義を通じて、作り手の立場から、いかにして近代デザインの歴史から今日のデザインを読み解くことができるのかを探っていききたい。	
デザインリテラシー 1	デザインという行為には目的とプロセスがある。デザインの目的は様々な課題を解決するためにある。そして、デザインを行うには考え方や進め方にプロセスがある。課題を見つけ出し、理解を深め、リサーチを行い、アイデアを導き出し、プロトタイプを制作して、テスト運用を行う。デザインの目的とプロセスを理解することで、デザインと人との関係、デザインと社会との関係、デザインとビジネスとの関係など、デザインの意義を学ぶ授業。	
デザインリテラシー 2	デザインは社会とつながっており、社会とつなげるために必要な基礎的な概念の1つがマーケティングである。マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し（製品、サービス、そしてアイデアという形をとる）、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、主にマーケティングの基本概念的ななかから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身や自身の作品などを価値のある魅力的な商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
デザイン特講 1	デザインという行為を届けるためのしくみがメディアである。メディア (media) という単語の単数形、メディウム (medium) には、死者の言葉を現世に伝える「霊媒」という意味もあるように、それは発信者と受信者の「間」にあって、何らかのメッセージを運ぶ乗り物のような存在である。普段の生活ではあまり意識はされていないが、私たちはメディアを通じて、世界を理解し、世界にメッセージを送っている。本講義では、視覚文化研究 (ヴィジュアル・カルチャー・スタディーズ) の視点から、視覚的イメージと人間の関係、社会のなかでのはたらきを考えることを目指したい。	
デザイン特講 2	考古学や人類学などの領域において、物質文化 (マテリアル・カルチャー) 論は、以前より重要な方法論として存在してきた。文献を資料とする歴史学とは違って、それらの分野は、過去の遺品や、異文化において使われた物品など——すなわち「モノ」——を第一次資料として、研究の対象としてきた。たとえば現代人が使っているさまざまなモノも、また物質文化として研究対象となりうるのである。本講義では、物質文化論の視点から、デザイン、建築、都市と人間との関係を再考することを目指す。	

マンガ概論 1	マンガをマンガたらしめるものは何だろうか。現代において、マンガは絵画・文学・映画など様々な表現領域から影響を受けながら今日の隆盛を迎えるに至った。この授業では、それらのジャンルとマンガの共通点と相違点を踏まえ、マンガとはどのような表現領域なのかを考察する。またマンガと他の領域とのインタラクティブな関係に目を向け、こんにちの社会や文化の中でマンガが果たしている役割とこれからの可能性について多面的に考察する。
マンガ史 1	マンガについて理論的に学び批評・制作を行なっていく上で、基礎知識となるマンガの作品・作家、出来事や研究状況について歴史的に考察する。ただし「歴史的に考察する」とは言っても、単に関連情報を年代順に羅列して覚えていくわけではない。視覚表現・メディアとしてのマンガを構成する諸要素やその時代的变化に注目しつつ、「マンガを読む」という行為が日常生活に定着するまでの歴史について、多角的に考察していくことを目標とする。
マンガリテラシー 1	マンガは線、コマ、フキダシ、擬音など様々な要素から構成されている。マンガに日ごろ触れることのない人がはじめて目にした際、「読めない」と聞く。この授業では、マンガが発展の中で生み出されてきたそれらの諸要素や効果をどのように活用し、意味やメッセージを伝えているのかを分析する。またその諸要素からどのようにしてキャラクターや世界観が生み出されているのかについても考察し、マンガを描くこととマンガを読むことがどのような営為であるのかを根本から考えることを目的とする。
マンガリテラシー 2	アニメーションとマンガは似ているようで異なる表現手段である。日本においてはマンガを原作とするアニメーション、あるいはアニメーションのコミカライズなどが多数生み出されてきた。本講義では日本のコンテンツにおいてマンガとともに発展してきたアニメーションに焦点をあて、その表現がどのようにして成立したかを歴史的に考察し、また技術的側面からもアニメーションという表現の特異性を探る。連続した絵や立体から動きを生み出すアニメーションという表現領域の持つ魅力を深く知ることを目的とする。
マンガ特講 1	マンガはその時代の社会が持つ様々な問題を内包し、それらと関わりながら発展してきた。本授業ではマンガと社会の関わりを様々な角度から考察し、マンガが社会の中でどのような役割を果たしてきたか、そして今後どのような役割を果たしうるのかを実践的に考える。その中で特に今日の社会において課題となるジェンダーや人権について改めて学ぶことで、その時代その時代における価値観の中で生み出されてきたマンガを批判的に読み、制作する態度を身につけることを目的とする。
マンガ特講 2	日本は世界有数のマンガ大国であり、質・量ともに高いレベルのマンガを生み出し、読者はそれを享受してきた。しかし世界各地に目を向けると、それぞれの地域にはそれぞれのマンガ文化が存在し、それもスマートフォンなどのさまざまな技術の進化や各地の事情により変化してきた。それらはその地域の伝統も踏まえ、日本マンガにはない様々な魅力を有している。本講義ではそれら世界のマンガについて学び、マンガの持つ可能性を改めて認識し、また翻って日本のマンガの特異性を考えることを目的とする。
メディア表現概論 1	この授業では、「メディア」とはどのようなものであるかについて概説する。具体的には、メディアと情報に関する環境と歴史を概観したうえで、メディアをどのように活用し、「コンテンツ」を作成していくかの表現技能について触れる。この授業を入口とし、専門的な学びに触れていく中で、最終的には、新しい価値を創造するための知識・思考力・表現技能を身に付けることで、他者理解や社会の課題解決に寄与する人材の育成を目指す。
メディア表現史 1	この授業では、「メディア」を成り立たせている技術と表現の歴史的な相互作用について、人類史の観点から概観する。印刷技術や写真、録音等、情報の記録や複製を可能にするメディア技術は、社会の仕組みを再構成し、現在に至るまで生活の中に深く組み込まれている。そうしたメディアの歴史的背景や、メディアの普及とともに生まれた表現を理解することで、現在のメディア環境がもつ可能性についても洞察を深められるようになることを目指す。

メディア表現リテラシー 1	<p>大学におけるさまざまな授業では多様な機材を使用する。日常的に使用する機器の多くは、取扱説明書を読まなくとも使用できるものも多い。また、ユーザーは使用するうえで支障がなければ、機器の仕様などについても把握せずに使用しているものもいだろう。しかし、授業で使用する専門的な機材においては、そのスペックを把握し、使用方法を熟知しておくことで格段に完成度の変わるものもある。本授業では、実際に使用する各種機器を使いながらその取扱説明書の読み方、スペックの把握を通じ、それらの機材の性能を100パーセント引き出すための術を身につけることを目的とする。</p>	
メディア表現リテラシー 2	<p>この授業では、授業で使用する機材に関する取扱説明書を作成することに取り組む。取扱説明書はその機材に関する性能や、期待される効果について熟知し、そのうえで、他者にわかりやすく伝えるための資料である。取扱説明書の作成を通じ、使用する機材について「完全に」その性能を理解するとともに、使用中に起こりうるさまざまなトラブルなどを検証する。この授業を通じ、学生は自ら、情報を獲得する術と、使用者の理解、他者へ伝える力を身につけることを目的とする。</p>	
メディア表現特講 1	<p>この授業では、「メディア表現」をめぐる今日的话题を取り上げ、さまざまな事例をもとに、多面的かつ徹底的に論じる。特に、音楽や映像、ゲーム、インタラクティブアートといった領域における先進的な表現に焦点を当て、メディアデザインを駆使したクリエイティビティについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、当事者であるデザイナーやアーティスト自身を授業内でゲストに招き、講演やワークショップ形式による授業を実施する。</p>	
メディア表現特講 2	<p>この授業では、「メディア表現」をめぐる今日的话题を取り上げ、多面的かつ徹底的に論じる。特に、メディアを活用したビジネスやサービス、社会活動といったさまざまな領域における先進的な実践事例に焦点を当て、メディアデザインを通じた社会との関わりについて考察する。授業でとりあげるトピックによっては、実際に事業に取り組む企業などの当事者をゲストにお招きし、講演やグループワーク、ワークショップ形式による授業を実施する。</p>	
和の伝統文化論	<p>この授業は、日本の伝統的な文化や芸術の特質と意義を深く考察することで、今ある私たちの文化のあり方を見つめ直すことを目的とする。現代に脈々と受け継がれてきた能楽、歌舞伎、茶の湯、生け花など、幅広いジャンルの伝統文化について学習する。さまざまな伝統文化は、時代をさかのぼることで、その根底においてつながっていること、現代社会においてどう活かされているのかについて学ぶことで、現代に生きる我々の文化とのつながりを理解することをめざす。</p>	
京都のまちづくり	<p>この授業では、日本における京都の「都」としての位置づけとその後の展開過程について、各時代の変遷をたどりながら、地形、景観、建築、産業構造などさまざまな視点を軸とし、まちづくりの進められ方を考察する。また伝統文化や建造物が多く存在する「まち」として、その都市計画や景観づくり、産業、交通等が各時代においてどのように検討されてきたかを歴史的にたどり、現代の都市としての京都が形成される経過を学び、日本において特異な変化を重ねた京都と、他の都市との共通点、差異などを知る端緒とする。</p>	
京都の伝統工芸講座 1	<p>この授業では、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。</p>	
京都の伝統工芸講座 2	<p>この授業では、「京都の伝統工芸講座 1」につづき、担当する教員のもと、京都の伝統産業・美術・工芸の現場から、伝統工芸士、作家、技術者、研究者を毎回講師として招き、各講師の専門分野での実経験に基づいて「伝統とは何か、伝統を受け継ぐとはどういうことか」を中心に講義が行われる。長年培われてきた京都の伝統産業・美術・工芸の歴史と現状を理解することで、私たちの生活の中で、伝統産業・美術・工芸がどのような意味を持ち、また持つべきなのかを考察する。</p>	

京都の習俗	京都には、人々の暮らしの中で、食、住まい、ならわし、季節の行事、祭りといった様々な伝統文化が今なお息づいている。この授業では、それぞれの習俗がどのような歴史的な背景を持ち、現代まで継承されているのか、また途絶えようとしているのか、その意義と変遷について文献や聞き取り調査の資料を基に検証しながら解説する。変化する社会の中で変わり続ける価値観などを知り、現在に生きる我々にとっての習俗の意味について考察する。	
京都の伝統産業実習	この授業は、1200年以上の歴史を持つ京都の伝統工芸、伝統産業の現場で実習をするインターンシップを軸とする授業である。事前指導を受けた後に、受講生は本学が指定するさまざまな伝統工芸、伝統産業の現場で直接指導を受ける。「手技を学ぶ」、「歴史・文化的背景を学ぶ」、「環境を学ぶ」など、日ごろ、制作活動を学びの中心とする学生から、日ごろはことばを軸とした学びに取り組む理論系の学生まで、様々な学部、専攻の学生が実習できるプログラムとする。	
ファイナンス論	現在の日本では、証券市場やそれに関連する事柄が大きな注目を集めており、企業活動においても、また個人の生活においても浸透している。この講義の内容は、それを理解するために必要であるとともに、ファイナンス分野を理解するための基礎となるものである。授業では、(1) 証券に関する基本的知識をつける、(2) 債券と金利の基本概念を理解する、(3) 企業財務の基本的知識をつける、という3つの大きなテーマについて学ぶ。	
マーケティング論	マーケティングとは、個人・企業あるいはその他の組織が消費者のニーズを具体化し（製品、サービス、そしてアイデアという形をとる）、その具体化したものを消費者に伝達する一連のプロセスである。そして、それは消費者と企業組織間の情報と製品の流れを考察し、両者にとって効果的かつ効率的に行うにはどうしたらよいか、という目的意識を強く持つ。本講義は、マーケティングの基本概念のなかから、発想法とフレームワーク、その原理を学ぶとともに、自分自身の作品を商品にする方法をグループワークを通じて構想する。	
ビジネスモデル論	ビジネスモデルは、企業が収益を上げるためだけでなく、競争優位の確立・維持においても大変重要な概念である。特に近年、消費者と企業間の連絡手段として、インターネットなどの新たな情報技術を活用し、一連の商行為を整理、システム化し、収益性を高めた新規性のある事業形態が登場したことで、注目されるようになった。この授業ではビジネスモデルとは何かを理解し、それを踏まえて、各人が特定のビジネスモデルを想定し、現実的に創業できるレベルのプランを作成する。	
イノベーション論	国内外における企業のイノベーションの事例、国内地域の行政やNPO法人におけるソーシャル・イノベーションの実例を学び、イノベーションが何故生じたか、それらが如何なる工夫の中で完遂され、新たな価値創出が成されたかについて学ぶ中から、イノベーションの本質を自らのものとしていく。また事業化するための考え方・方法論を具体的なケースを通して知ることにより、現在学んでいる自分の専門について、将来の可能性を模索する。	
ソーシャルビジネス演習1	近年、ソーシャル・ビジネスの台頭、営利企業のCSR/CSV戦略化、非営利組織の事業化、というように、異なる基盤を持つ多くの組織が「事業性」と「社会性」の両ミッション（デュアル・ミッション）追求という共通の方向性を見出すようになってきている。 この授業ではソーシャル・ビジネスを、これらを含んだ大きなムーブメントの中でとらえ、その関連する諸概念、発展過程、経営の実際、課題を多面的に事例を紹介しながら検討する。	
ソーシャルビジネス演習2	環境問題や少子化、高齢化、貧困、地域再生など、複雑化し成熟化した社会において浮上している昨今のさまざまな社会的課題は、これまでのように国や自治体が担う公共サービスや営利企業が市場の中で提供する商品やサービスだけで解決することは難しくなりつつある。すなわち、これまでの枠組みや仕組みに基づいてより良い社会を構想し、形作っていくことはもはや困難であり、従来とは異なる対処方法が求められている。こうした状況の中、近年、NPOや社会的企業、企業の社会貢献活動、各セクターの協働等、社会をより良くしていくことを目指したさまざまな取り組みが広がってきている。このような社会をより良く変えていくこうとするさまざまな営みのひとつにソーシャルビジネスがある。 本授業では、各種事例や諸研究からソーシャルビジネスを概観し、特にその主たる担い手であるNPOに着目し、組織の特徴、意義、歴史、諸制度等の基本事項を学習し、そのマネジメントについて考える。マネジメントを考えるにあたっては、行政や企業など外部との関係に着目するとともに、一般論を踏まえ、できる限り具体的な事例に基づき考究する。	

<p>アフリカ・アジア概論</p>	<p>2000年代以降の世界の政治経済、そして文化の台風の目となったアフリカ・アジア地域。これらの地域の「発展」の過程は、欧米のそれと同じものではない。テクノロジー、経済、政治、そのすべてが、20世紀までの大国の影響を受けつつ、これらの地域独自の路線を歩んできた。この講義では、これからこの地域について、あるいはこの地域で学ぶ学生の前提となる知識、すなわちアフリカ・アジアの歴史、地理、政治経済、そして人びとの生活に関する知識を学び、これらの地域に関して包括的に理解することを目指していく。</p>	
<p>アフリカ・アジア史</p>	<p>かつて開発途上国と呼ばれたアジア諸国、最貧国と呼ばれたアフリカ諸国は、過去には想像もつかないほどの「発展」を遂げつつあり、もはや「貧困」という枠組みだけからは、これらの地域を語ることは正しくない。そこで、本講義は、アフリカ・アジア諸地域の現在の概略を紹介し、現代のアフリカ・アジアの躍動の原動力を明らかにし、これからアフリカ・アジアを舞台に活躍する受講者が、どのようにアフリカ・アジアを理解すべきかを考察する足掛かりをつかむことを狙いとする。</p>	
<p>アフリカ・アジアリテラシー1</p>	<p>文化が「知識、信条、芸術、法、道徳、慣習などすべてを含みこむ複雑な総体」(タイラー)であるとすると、その多くは宗教によって下支えされてきた。私たちが学ぶアフリカ・アジア地域は、三大宗教が生まれ、そして現在までその形を様々に変えて宗教が人びとの生活に根付いている。そこで、この講義では、アフリカ・アジアにおける宗教動態に着目し、宗教と文化の関係を人びとの生活レベルからせり上げて理解することを目的とする。講義は、文化人類学や宗教社会学、そして宗教学の文献を読み込むことによるが、講師の生の体験は、履修者のアフリカ・アジアで受けるカルチャーショックを和らげることも目的とする。</p>	
<p>アフリカ・アジアリテラシー2</p>	<p>21世紀に入り、中国の経済的台頭に伴い、世界の政治経済のパワーバランスは大きく変革した。今後、インド、アフリカの経済力上昇に伴い、さらにこのバランスは大きく変わっていくことが予測され、私たちの生活は、アフリカ、アジア抜きには語れなくなってくるだろう。この講義では、中国をはじめとするアジア諸国を中心とした現在の世界の政治経済の状況を踏まえつつ、インド、アフリカの将来展望を学び、未来志向型の政治経済のあり方を模索していく。</p>	
<p>アフリカ・アジア特講1</p>	<p>アフリカ・アジアの多くの地域が温帯から熱帯気候の温暖な気候帯に位置している。人びとは豊かな自然から農林水産資源を享受し、巨大な人口を維持してきた。しかし、例えば、砂漠化や洪水、さらに土壌海洋汚染など、この地域の環境問題は近年益々深刻な問題となり、それは人びとの生活を脅かそうとしている。この講義では、現在アフリカ・アジアで起こる環境問題を概観し、現在の環境問題への取り組みを解説する。そして、現状を理解した上で、持続可能な社会を作るためにはどのようにすればよいかを考察していく。</p>	
<p>アフリカ・アジア特講2</p>	<p>その国、その地域の歴史を知ることは、その文化や人を知る第一歩となる。しかし、本学科で着目するアフリカやアジアの歴史を、これまでどれほど学んできたか？受講者の多くが、これから活躍するアフリカやアジアがどのような過去をたどり、現在、どのような方向に進もうとしているのか。巨大な地域と人口を抱える、この地続きの大地には多様な歴史が埋もれているが、西欧との関係で考えたとき、共通項は思いのほか多いはずである。そこで、本講義では、近代以降のアフリカ・アジアの歴史の大きな流れをつかみ、講師が専門とする地域のいくつかの事例を学ぶことで、アフリカ・アジア地域の理解の端緒を開くことを目的とする。</p>	
<p>日本事情理解</p>	<p>現在、日本を取り巻く環境は刻々と変化している。特に近年は外国人技能実習制度や日本に住む外国人の子どもなどの日本語教育の問題等、これからの日本のあり方を考えていく上で無視できない喫緊の課題が山積みとなっている。このような状況を踏まえ、本講義では、国際社会と日本の実情とを比較しつつ、これからの日本における「多文化共生」のあり方について様々な視点から深く考え、それらと日本語教育の実践とを関連づける能力を養う。</p>	
<p>言語と心理</p>	<p>本講義では、日本語教育において重要である日本語学習者の言語理解を実現する情報処理のプロセス、推測能力、記憶のメカニズムをはじめ、言語教育に必要な言語習得の理論、認知過程に関する心理学、認知言語学等の基礎的知識について学ぶ。また日本語学習者が異文化との接触によって表面化する「心と文化」の問題について、特に発達心理学や異文化間教育の観点から深く考察し、言語教育における(心理的)学習のメカニズムについて学ぶ。</p>	

共通教育科目	マイナー科目	言語と社会	本講義では、広く国際社会の動向から見た国や地域間の関係性を踏まえ、現代社会においてはあたりまえに発生する「異文化接触」に伴って起こる「言語現象」や各国の「言語政策」、「言語変種」、「言語運用のルール」、「言語・非言語行動」、「社会文化能力」等を学ぶ。履修者は、さまざまな社会文化的背景を視野に入れ、個々人の言語使用を具体的な社会文化的状況の中で捉える力を養うことで、日本語教育において必要な基礎的な知識を獲得する。	
		日本語学	本講義では、日本語教育において必要とされる現代日本語の音声・音韻、語彙、文法、意味、運用等に関する基礎的な知識を学ぶことを第一の目的とする。これに加えて、一般言語学、対照言語学等の知見を活かして、日本語と他の言語とを比較する能力、さらには「言語現象」を客観的に分析する能力を養う。講義全体を通して、日本語学習者の誤用の原因を探り、履修者が日本語教育を担う際に、適切な指導を行うための基礎力を養成する。	
		日本語教育演習 1	この演習では、比較的少人数の授業で、日本語教員をめざす履修者に対し、日本語教員として必要とされる資質・能力をはじめ、コースデザインや各種シラバス、教授法、評価等についての基礎的な知識を学ぶ。また教案作成や模擬授業等の実践活動を通じて具体的な日本語の教え方を学ぶとともに、学習者にとってどのような活動が教育的効果が高いかを考える。以上の学びを通じて、変化の激しい現代の日本語教員として必要とされる総合的な教育能力を養う。	
		日本語教育演習 2	この演習では、「日本語教育演習 1」につづき、日本語教員をめざす履修者を対象に、日本語学習者の具体的な学習活動や教授法・評価の問題、学習者の誤用に関する問題、教材に関する問題等、日本語教育における様々な課題について、これまで蓄積されてきた研究論文等を精読し、それらの問題を解決するための具体的な方策について受講生全員で議論を行う。そこから得られる学びを通して多様化する日本語教育のいかなる現場でも柔軟に対応できる人材の育成を目指す。	
専門演習科目	基礎演習科目	グローバルゼミ	1年次第1クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、意見交換などの基礎的な研究方法を学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。グローバルスタディーズ学科を構成する「アフリカ・アジアの文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」3専攻のうち、1つの専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、グローバルスタディーズ学科の学びの一端を理解する。	
		海外短期フィールドワーク	本科目では、海外フィールドワークの入門として、教員の引率にて近隣国に2週間渡航し、協定締結大学・機関と連携して企画されるグループワークを基本とした共同プログラムに参加する。渡航前には、オリエンテーションに参加し、フィールドワークの目的を理解し、個々での安全管理に備える。また、グループごとに渡航先の国の文化や社会、グループワークに必要な情報を収集するとともに、個々で目標を設定する。帰国後には、フィールドワークの経験や得た知見を報告会で発表するとともに、個々で設定した目標の達成度を確認し、3年次の海外長期フィールドワークに向け習得すべき事項を確認する。	
		基礎演習 1	1年次第3クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、意見交換などの基礎的な研究方法を学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。グローバルスタディーズ学科を構成する「アフリカ・アジア文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」3専攻のうち、1つの専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、グローバルスタディーズ学科の学びの一端を理解する。	
		基礎演習 2	1年次第4クォーターに置かれ、学部の初年次教育の中心となる演習形式の必修科目である。教員1名あたり約20名の学生による少人数クラスを編成し、情報検索、現地調査、意見交換などの基礎的な研究方法を学ぶことにより、大学生活へのスムーズな導入を図る。グローバルスタディーズ学科を構成する「アフリカ・アジア文化」「グローバル関係」「グローバル共生社会」3専攻のうち、1つの専攻の学びの内容を紹介し、これに即して上記の基礎的な研究方法を習得するとともに、グローバルスタディーズ学科の学びの一端を理解する。	

基礎演習科目	基礎演習 3	2年次第1クォーターに置かれ、アフリカ・アジア文化専攻、グローバル共生社会専攻、グローバル関係専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。履修生は自身が所属する専攻の中で2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。		
	基礎演習 4	2年次第2クォーターに置かれ、アフリカ・アジア文化専攻、グローバル関係専攻、グローバル共生社会専攻それぞれを構成するゼミの学びにとって基本となる文献・資料を講読することによって、各ゼミの学びの基礎を理解するための演習形式の必修科目である。基礎演習3と同様に、履修生は自身が所属する専攻のなかで、異なるゼミ担当者が開講するクラスに2つ参加した上で、2年次第3クォーター以降に所属するゼミを決定するとともに、専門性のいっそう高まった内容を学ぶことによって、自身の所属する専攻への帰属意識を養う。		
専門演習科目	応用演習科目	応用演習 1	2年次第3クォーターに置かれ、自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習1」は、これ以降、ゼミ内で取り組む卒業論文の作成にとっての第一歩であり、その意味では自らが定めたテーマを専門に研究するための導入科目となるため、所属するゼミの専門的な学びにとって基本となる文献の講読や現地調査、作品研究などに取り組むことによって、自身の卒業論文の作成にとって必須の専門知識や方法論を習得する。	
		応用演習 2	2年次第4クォーターに置かれ、「応用演習1」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習2」では、3年次第1および/あるいは第2クォーターで履修する「海外長期フィールドワーク」での学びを、所属ゼミの学びに引きつけながら計画する。また、所属専攻内であれば、他のゼミの同科目も並行して履修できるため、多角的な視点から自らの専門的な学びを発展させることができる。	
		応用演習 3	3年次第1クォーターに置かれ、「応用演習2」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習3」では、自身が履修している「海外長期フィールドプログラム」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「海外長期フィールドプログラム」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
	応用演習科目	応用演習 4	3年次第2クォーターに置かれ、「応用演習3」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。とくに「応用演習4」では、自身が履修している「海外長期フィールドワーク」での学びの進捗状況についてゼミ担当教員に定期的に報告し、それに対する教員からの指導のもとで調査・研究を並行して行なうことによって、「海外長期フィールドワーク」の履修を所属ゼミの学びへと接続し、自らの専門的な学びに重層的な厚みを加える。	
		応用演習 5	3年次第3クォーターに置かれ、「応用演習4」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習5」では、各ゼミ内での専門的な学術書の講読と並行して、「卒業研究演習3」での上級生の卒業論文の口頭試問を聴講し、それについてのゼミ内でのディスカッションを行なうことによって、自身の卒業論文のイメージを確定させるとともに、これを完成させるために4年次の「卒業研究演習1」ならびに「卒業研究演習2」において習得すべき技能や知識や、実行すべき作業を自覚する。	
		応用演習 6	3年次第4クォーターに置かれ、「応用演習5」に引き続いて自身が所属するゼミでの卒業論文の作成を念頭に、専門的な学びを深めていくための演習形式の必修科目である。特に「応用演習6」では、3年次第1から第2クォーターの間に履修した「海外長期フィールドワーク」での学びと、これと並行して「応用演習3」で取り組んだ調査・研究とに関する報告書を作成する。また、その内容を他者を意識しながら視覚的にも理解しやすい展示形式へと落とし込むことを演習形式で体験することによって、自らの学びの成果を他者へ伝達するための技能を習得する。	

専門演習科目	卒業研究演習科目	卒業研究演習 1	4年次第1クォーターに置かれ、「応用演習6」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文の構想の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の作成を進めていく。	
		卒業研究演習 2	4年次第2クォーターに置かれ、「卒業研究演習1」に引き続いて卒業論文の執筆に必要な学術的スキルを演習形式で習得するための必修科目である。各履修者の卒業論文とテーマ・方法論を共有する先行研究論文の講読を通じて、当該領域に固有の学術論文の形式を熟知するとともに、自身の卒業論文作成の途中経過の発表、それに続くゼミ内でのディスカッションを通じて、他のゼミ生の卒業論文の内容や進捗状況との比較を行ない、各自の卒業論文に欠如している部分を自覚しながら学術論文の完成、さらに提出までを行なう。	
		卒業研究演習 3	4年次第3クォーターに置かれ、「卒業研究演習2」の終わりに提出した卒業論文について、自身の所属する専攻のすべてのゼミからなる合同クラスのなかで、この専攻に所属する教員全員による口頭試問を受けるための必修科目である。所属するゼミ内での口頭試問の準備を通じて自身の卒業論文の優れた点と不十分な点を把握するとともに、他の学生の口頭試問を聴講することによって、自らの所属ゼミでの学びをいっそう広い専攻の学びの中に位置付け、学術的な視野を広げる。	
		卒業論文	4年次第3クォーターに置かれ、グローバルスタディーズ学科における4年間を通じた学修・研究・調査の成果をまとめ、学術論文として提出する。学生個人でテーマや課題を設定し、それに応じた研究・調査・論文作成計画を立て、一定の書式を整えた学術論文の作成に必要な知識や技能、研究・調査方法を身につけた上で、ゼミ担当教員の指導のもとで、24,000字から48,000字程度の分量で卒業論文を書き上げる。自らの4年間の学びについて、その内容を専門的知識や技能に依拠しながらわかりやすく説明するスキルを獲得する。	
		卒業発表	4年次第4クォーターに置かれ、自らが作成した「卒業論文」の内容を分かりやすく、かつ印象的に他者に伝えるための方法を演習形式で実践的に学ぶための必修科目である。自身の「卒業論文」の主張ないし仮説、そしてそれを論証するための論理展開と説明とを、限られた情報量のなかで要約することに加え、これを視覚的にも理解しやすい発表形式へと落とし込むことを演習形式で体験し、他者の視線を意識しながら自らの学びの成果を客観的に伝達するためのスキルを習得する。	
専門講義・演習科目	国際文化基礎科目	国際文化概論 1	グローバル化の時代と呼ばれるようになり久しいが、人びとの暮らしは、すでに何千年も前から様々な地域との交流の中で成り立っている。私たちがその地域独特の文化だと考える人びとの文化的営みは、思いのほか様々な地域、文化の影響を受ける中で作り上げられている。この講義では、歴史、文化、政治、経済といった文化を構成する複合的な要素を概観し、現代社会の成り立ちを概説する。受講者は、そこから自らの興味関心を明らかにし、専門領域の基礎を作り上げることが望まれる。	
		国際文化概論 2	日常的に私たちが接する様々な芸術。例えば、音楽や絵画、映画や詩は、作家の頭の中だけで構成されたものではなく、外の世界の様々な事象を異なる形に再構成し、表象されたものであると捉えることが可能だ。この講義では、世界的に影響をもったいくつかの芸術作品を事例とし、作家や作品がいかに構成されたか、また、それらが社会にどのような影響を及ぼしたかを知り、文化が持つ力を理解し私たちの生活における文化の位置づけを習得することを考えていく。	
		国際文化史 1	わたしたちが日ごろ地域特有のものと思っている文化は、実は複数の文化が地域外から伝わり、長い時間をかけてその土地に根差していったものであることが多い。本講義では、いくつかの地域の文化交流史を紐解き、いかにその文化が交流し、変化し、固定化されていったのかをたどってみたい。そして、これらの文化交流が単なる偶然の産物ではなく、交流の背景には様々な文脈が隠されているはずである。この講義では、まず、歴史学的な分析方法を習得し、いくつかの事例を通じ、文化を史的な観点から理解することの重要性を理解することを目指す。	

国際文化基礎科目	国際文化史 2	この講義では、現存するアフリカ・アジアの文化事象を例にとり、その背景にある「宗教-政治-文化」や「社会運動-文化」と言った複合的な文化構成を学ぶ。これらの文化現象は、上部構造から押し付けられたものではなく、人間一人一人の生活や、人びとの交流からせり上げられたものであることが理解できるはずである。こうした視点に立てば、文化史は、年代記を超えた多文化間の交渉の観点から国際関係の変遷をとらえなおすし、グローバル社会の仕組みを習得することにもなる。本講義受講者は、事前、ないし同時に歴史学の基礎を学ぶ科目を受講していることが望ましい。	
	国際文化リテラシー 1	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められられる。「国際文化リテラシー 1」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。アジアやアフリカの文化を事例として取上げ、多様な文化の存在を知り、その学び方を修得するとともに、自文化との差異を理解し、対等・平等に考える姿勢を身につける。	
	国際文化リテラシー 2	グローバル化・国際化が進む現代において、日常生活から職場など様々な場面において、異なる文化的背景を持つ人々と相互理解し協働することが求められられる。「国際文化リテラシー 2」では、実際に異なる文化的背景を持つ人々と接し、文化の差異を実体験するとともに、どの言動がどのようなロジックに基づくものなのかを理解する。言語、信仰、価値観、生活習慣の違いから生じる課題を理解し、文化を超えて相互理解し協働するために、どのような工夫ができるかを対話を通じて探索し、その方法を習得する。	
	国際文化特講 1	人類がまだ誕生していなかった時代にも、「文化」と呼べるものがあつた。しかし現生人類が登場して以降、「文化」は人類社会の物質的、精神的な展開に必須のものとなった。この授業では人類出現以前の「文化」から、現代の「文化」まで、時間的にも、空間的にも縦横にテーマをとりあげ、さまざまな領域に関連させながら、人類にとっての「文化」の諸相を学ぶ。具体的には、「文化」の定義を明確化し、その定義が前提とする生物学的特徴を確認すること。「文化人類学」の諸分野について理解を深めることを狙う。	
	国際文化特講 2	グローバル化にともない、日本にも外国人留学生や労働者が増えると同時に、海外に出る日本人も増えてきた。今後日本の生活文化についてその他のアジアの国や欧米の文化などと比較し、理解し説明することができる能力が必要とされている。本講座では、もっとも身近な日本文化を手がかりにしながら、常に世界の文化に興味を持つ姿勢を身につけ、それぞれの特徴や現代の課題を幅広い視点から探究することを目的としている。文化圏は、アジア諸国、欧米、アフリカ、南北アメリカ、アラブ地域など、テーマは伝統文化、宗教、現代社会、ジェンダー、芸術やメディアなど。	
	Business English	情報化社会では世界中から発信される様々な情報を的確に読み解く外国語リテラシーが必要となる。本授業は、「聞く・話す・読む・書く」の英語の4技能の側面からビジネスの場面で必要となる基礎的なコミュニケーション力を養成することを目的とする。ビジネス英語特有の語彙・表現を身につけると同時に、多様な価値観や異文化への理解を深め、異なる意見に耳を傾け、多角的に判断する思考力を身につけることで様々な場面で応用可能な英語による交渉力を向上させる。	
フィールドワーク科目	English discussion	この「English discussion」では、少人数のクラスにおいて、英語によるスピーキング力を徹底して強化し、アカデミックな環境で必要とされるディスカッション能力の育成を目標とする。この授業はすべて英語でおこなう。各回で講師が紹介するテーマに関するリーディングもおこなった上で、履修者の身近な関心事など、さまざまなテーマについて話しあう練習を重ねることで、学生自身が英語でディスカッションできるようにしていくことを目的とする。	
	Effective presentation	この「Effective presentation」では、各自がそれぞれの題材を設定し、構成方法、視覚資料の使い方、効果的な言語・非言語メッセージの伝え方など、英語での他者へのプレゼンテーションにおいて不可欠なスキルを学んでいく。授業においてはノートパソコンの持込を必須とし、各自のパソコンにインストールされたプレゼンテーションソフトを利用する。また、基本パターンをベースにアウトラインを作成し、回を追うごとに徐々に長いプレゼンテーションができるようにする。	
専門講義・演習科目			

English for studying abroad	この授業は、主に海外大学への留学希望者のための授業である。留学時に必要となるTOEFLやIELTSなどの試験対策、スピーキングセッションの訓練などを行うとともに、ノートテイキングや口頭発表など、留学先の大学でのアカデミックな活動にスムーズに参加できるための英語によるコミュニケーション能力を養成する。すでに留学先についての候補が決まっている学生についてはその留学先に適したテーマなどをもとに授業の課題を設定するなどの指導もおこなう。
フランス語圏事情理解	本講座は、主に聞くこと、話すことに重点を置きながら、仏語圏への生活や留学などに必要な語学力の習得を目的とする。その為の語彙力や文法理解を進めると同時に、実際にスキットを使った日常会話の講習を行う他、アンケートやフィールド調査に必要なフランス語でのプレゼンテーション技法や集団でのディスカッションの技法等を学ぶ。また、異なるシチュエーションでのメールや電話での相手とのやり取りなど、実用的なフランス語コミュニケーションのスキルを習得する。
フランス語圏文化理解	本講義は、辞書を使ってフランス語中級レベルの文章を読むことができるようになることを目標とする。フランス語の文学作品、フランスの時事に関する新聞や雑誌の記事等を原文で読むことで、フランス語の読解力、語彙力を高める。同時に仏語の文章読解を通し、フランス語圏の文化や社会、政治的背景について理解を深める。また、購読を通しフランス語の語彙や表現を豊かにすると同時に、フランス語を用いて自分の意見を表現する能力を高める。
フランス語圏経済理解	現在フランス語圏における日本映画や漫画、アニメやゲームを含むエンターテインメントに関する需要が高騰してきている一方、日本語で表現されたメディア媒体を的確に仏語圏の消費者へ向けて商品化しビジネスにするための人材が極端に不足している。本講義では主にエンターテインメントの業界に焦点を当て、仏語圏でのビジネスに必要な語学力の習得を目的とする。日本語で表現されたメディア媒体を適切に通訳するためのノウハウを学ぶと同時に、仏語でのプレゼンテーション技法やコミュニケーションの技法、企画書作成などについても講習と演習を通じて学ぶ。
フランス語圏のメディア	本講座は仏語の記事やラジオ・TVのニュースなどの文章や、音声・映像資料を含むメディア素材を用いてフランス語の基礎力を上げながら仏語圏に関する知識を深める。そのために、社会や政治、メディアに関する基礎講義に加え、各自が興味をもったテーマに関し、主体的に情報媒体にアクセスするノウハウを学び、得られた情報を通して語彙力、語学力を鍛える。講義で扱う素材は、社会、文化、ビジネス、政治、環境問題や教育など。授業では文化的背景に関する講義で基礎知識を補完しつつ課題をグループワークで読解していく。また各自が興味を持ったテーマを中心として仏語のメディア媒体で得られた情報に関するプレスレビューを作成し批評会を行う。
フィールドワーク入門	本科目では、3年次に実施する海外フィールドワーク（長期）への準備とし、渡航先の選定、海外フィールドワーク（長期）の計画の作成、渡航中の報告、帰国後の報告会までの一連の流れを理解するとともに、ビザの取得や予防接種など発生し得る事前手続き、海外滞在中の安全管理・健康管理について学ぶ。また、各地域を担当する教員が、渡航先の候補となる地域、受け入れ先の提携大学・機関、活動テーマなど順次紹介する。個々の関心と適性に基づき、渡航先の候補を検討する。
フィールドワーク方法論	本科目では、3年次に実施する海外フィールドワーク（長期）への準備とし、担当教員の指導のもと、メールやウェブ会議を通じて現地受け入れ先の担当者を変えて、個々の海外フィールドワーク（長期）の目標、計画を作成する。渡航先の地域に関して、担当教員や出身者へのヒアリング、国や地域に関する文献を読むことで、情報を知識として蓄積するとともに、現地での生活に必要な基本言語、固有の慣習への理解、フィールドワークに必要な参与観察やインタビューなどの調査手法などを修得する。
海外長期フィールドワーク 1	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。

フィールドワーク科目	海外長期フィールドワーク 2	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 3	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 4	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 5	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	海外長期フィールドワーク 6	海外長期フィールドワークは、協定締結大学・機関を受け入れ機関とし、3年次の1クォーター、2クォーターにかけて実施する。海外長期フィールドワークは、個々の関心と適性に合わせて、個人もしくはグループとして、大学が提供するプログラムに参加する留学型、現地でのフィールド調査を実施する調査型、企業やNGOにおける研修に参加する実践型のいずれかに参加し、海外での実経験を得る。参加期間中は、日々の活動、進捗や所感を週報を作成するとともに、定期的なウェブ会議にて担当教員に報告する。帰国後には、個々の研修の成果をまとめ報告会で発表する。	
	地域研究科目	地域研究入門	地域研究は、異文化の社会について、生態環境、社会、文化、政治、経済、歴史など、複眼的に捉え、異文化に身を置くフィールドワークを通じて、対象とする社会を総合的に理解するものである。本科目では、異文化を学ぶ、地域を総合的に理解する、フィールドワークを行う意味を理解するとともに、生態環境、社会、文化などを関係づける方法、学際的な分野として異なる分野の方法や考え方の総合的な利用、フィールドワークの調査方法を学び地域研究を行うための素地を養う。
地域研究特講		私たちが住む世界は様々な単位で分節化することが可能であるが、ある人びとの集団を理解する上で、地域という単位は、世界を鳥瞰的に理解する上で、有用な単位である。宗教や政治、生態はこうした単位でより明確に特色や問題の理解を進める。この講義では、特にアフリカ・アジアの特定地域を事例とし、文化、政治経済、生態など、複眼的な視点から一つの地域を深く理解することを目的とする。また、こうした事例研究を通じて獲得した分析手法を、受講者が専門とする地域に当てはめていくことを目指していく。本講義の受講生は、「地域研究入門」を受講していることが望ましい。	
アフリカ地域研究 1		本講ではアフリカにおける多様な文化・社会の理解を目的として以下の三点を主に学ぶ。第一に伝統社会における家族や民族文化、宗教について、第二に植民地時代から近代化への過程の中で、西洋や国際社会との関わりの中で生まれた新たな社会形態や文化について、第三に、国際化する現代アフリカ社会における都市文化やポピュラーカルチャー、メディア等を含む新たな文化の生成と発展について。西東、南アフリカなど地域間の違いも理解しつつ、アフリカ全体の社会・文化を概観する。	

専門講義・演習科目

<p>アフリカ地域研究 2</p>	<p>アフリカの異なる地域における社会・文化の多様性を理解しつつ、政治、経済について概観することを目的とする。本講義では以下の三点に着目する。第一に伝統社会における家族や民族文化等を含む政治形態や、それに根ざした経済のあり方について、第二に植民地支配から近代国家形成の経緯と、独立後の国家における統治と経済の変容について、第三に、現在の国際社会におけるアフリカの政治的、経済的役割について、特にヨーロッパや新興国(中国、ブラジルなどを含む)との関係を中心に学ぶ。</p>	
<p>アジア地域研究 1</p>	<p>アジアは世界の人口の半数以上を抱える地域である。東アジアから南西アジアまで広域に及び、異なる気候や自然環境のもと、様々な民族、言語、宗教、文化によって構成される。本科目では、アジア全域における地理的な基礎知識を修得するとともに、それぞれの地域に固有の文化や社会、人々の生活や生業の特性とその変容を総合的に学び、アジアの多様なあり方について考える。また、地域の固有性や特性の複合的な捉え方を理解する。</p>	
<p>アジア地域研究 2</p>	<p>現代のアジアは、グローバル化や経済発展、国内および国際的な政治変動の影響を受け、めまぐるしく変化している。また、急激な経済成長や都市化による環境劣化、格差の拡大、人口増加と少子化、宗教や民族間の確執などの新たな問題も生じている。本科目では、アジア各地域における政治、経済、社会、文化の状況と諸問題について概観するとともに、新たな国や地域間の関係や相互影響を学び、多角的な視点から変動する現代アジアに関する理解を深める。</p>	
<p>アメリカ地域研究 1</p>	<p>本講義の目的は、アメリカ合衆国の歴史、文化、社会、思想、宗教、政治経済等を総合的に学ぶことを目的とする。奴隷制時代から現代に至るまでの歴史理解を通し、米国における人種、階級、ジェンダー形成の問題について、これまで軽視されがちだったマイノリティ集団が果たしてきた役割も含め学ぶ。また、現代に至るまでの世界におけるアメリカの位置づけや、アジア太平洋地域との関係、日米関係に関しても考察する。</p>	
<p>アメリカ地域研究 2</p>	<p>かつてスペイン、ポルトガル、フランスなどヨーロッパ諸国の植民地であったラテンアメリカは、言語、文化、宗教や政治制度等に多くの共通点があるが、独立から国民国家形成の過程を経てそれぞれの国で多様な発展を遂げてきた。本講義では、自然環境や人種、民族、階級、政治制度等、異なる要素に関して通史的に講義すると同時に、ナショナルな文化の形成過程とグローバル化社会の中で変容するラテンアメリカの役割について理解する。</p>	
<p>大洋州地域研究</p>	<p>大洋州とは、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋の島々を含む広範囲を含む。本科目では、大洋州の地理的な基礎知識、伝統社会から植民地化、独立国家成立への歴史の変遷を概観するとともに、島嶼国特有の自然環境と暮らし、地域固有の文化や慣習について学び、大洋州の多様性について理解する。また、グローバル化、自然災害や気候変動による影響など現代の島嶼国が直面する課題、日本や諸外国との関係について学び、小島嶼国としての発展のあり方について考察する。</p>	
<p>欧州地域研究</p>	<p>大小さまざまな国が隣接し、古くから攻防を繰り返してきたヨーロッパ地域において、ひとびとはどのように共存してきたのだろうか。本講義では、まず地域統合という観点から現在の欧州連合が成立するまでの同地域を歴史にたどり、現代の欧州地域の成り立ちを概観する。そのうえで、欧州連合の仕組みを、政治・経済・社会・文化の各方面から学ぶ。欧州連合は現代の国際社会の一つのモデルともなっているから、欧州のモデルを基準に、他の地域との比較の可能性について検討することが最終的な目標である。</p>	
<p>グローバル関係概論</p>	<p>世界はどのように動くのか。近年まで盛んに使われた「国際」という言葉は、多くの場合、「グローバル」という語に置き換えて考えられるようになった。グローバル化が我々の生活に浸透するにつれ、「国」だけでは世の中をとらえきれなくなっている。この講義では、「国家」という近代以来、我々が依拠してきた枠組みを含みつつ、複雑に絡み合う様々な権力媒体によって動く現代世界の関係性を考察していくことを目的とする。</p>	

グローバル歴史概論	<p>高校までに習う歴史の内容は、各地の政治イベントを起点とした年代史であることが多い。歴史が人びとが織りなした営みの群れを理解する学問であるなら、ある階層のイベントのみを扱うだけでは不十分である。そこで生まれたのが、グローバル・歴史という考え方である。本講義では、グローバル・歴史という考え方（長期の歴史動向を捉えること、広域地域を考察対象とすること、西欧中心史観に代わる視座を提示すること、各地域の互換性に注目すること、地域横断的な問題等、多様な問題設定を行うこと）を習得することを目的とする。</p>	
グローバル歴史特講	<p>本講義では、グローバル・歴史の思考方法を基礎とし、特に脱植民地以降のアフリカ、アジア、中南米のディアスポラ世界の史的動態を、ヨーロッパ世界による植民地帝国の枠組みだけではなく、グローバルかつローカルな動きを組み合わせながら解説する。その方法論として、従来の歴史的分析手法に加え、文化人類学や政治学、経済学と言った複数の視覚から切り込み、ディアスポラ世界の成り立ちを複眼的にとらえることを目指していく。本講義の受講生はグローバル・歴史概論を受講し、グローバル・歴史がどのような考え方なのかを理解していることが望ましい。</p>	
多国籍企業論	<p>グローバル化が浸透するにつれ、国境を越えた経済活動や企業のグローバル化はさらに加速している。こうした世界において、多国籍企業は、政治・経済・社会の各側面において重要な役割を果たしている。本講義では、民間企業のグローバル展開を、直接投資やマーケティング、人材育成などの視点から考察し、現在のサプライチェーンや政治面での影響力、さまざまな社会変容について明らかにする。指定されたテキストを読み込むことを基礎とし、講師の経験から、具体的な事例を挙げながら多国籍企業論について学ぶ。</p>	
社会運動論	<p>アメリカの公民権運動、ネルソン・マンデラらによる反アパルトヘイト運動…常にその時代の新たな価値を提示してきたのは、市民たちによる社会運動だった。時に暴力が介在した社会運動は、その形を大きく変え、現代社会への異議申し立ての方法も大きく変化した。この講義では、社会運動の起こる仕組みや、社会運動の歴史を学び、私たちが目指すべき社会像を考えるための素養を身につけることを目的とする。社会運動を遠い世界のものとせず、自らの問題として考える視点を身につけることが本講義の目的である。</p>	
世界の宗教	<p>いわゆる世界三大宗教（イスラーム、仏教、キリスト教）は、これまでも世界を動かし続けてきたが、21世紀に入り、政治経済的側面においてもそれらは性質を変えつつ、強大な影響力を保ち続け、私たちはこれまでと異なる宗教を理解することが必要となっている。この講義では、これら三大宗教の基礎となる教義レベルの概略を学び、さらに地域ごとの動きを明らかにすることで、それぞれの宗教が多層的レベルでうごめいていることを理解することを目指す。</p>	
アフリカ・アジア関係論	<p>グローバル化の進行にともなって、世界の各地域間の情報、モノ、人の交流は近年ますます盛んになっている。しかし、アジアとアフリカに目を向ければ、いくつかの経路で脈々とその交流は続けられている。現代の文脈では経済的観点から語られることの多い両地域間の関係を、本講義では、さらに政治・文化・社会を含む歴史を起点として考察していく。現代世界のグローバル化の潮流を考えれば、経済に着目されがちであるが、そこには、経済的な事由に加え、宗教や文化と言った側面から考えることの重要性を読み取ることができるだろう。こうした両地域の歴史的交流に目を向けることで、普段とは異なる世界の見方を検討することが本講義の目的である。</p>	
国際政治学	<p>国際社会の様相は、地域経済共同体の形成、新興国の台頭、多国籍企業の拡大などの影響により変化し、国や地域間に新たな対立や緊張が生まれている。本講義では、国際政治の成立から歴史的变化、その理論や思想の基本を学ぶとともに、現代社会の民族間の紛争、資源、環境問題などを取り巻く国際政治の様相を俯瞰し、グローバル化、トランスナショナル化に直面する国際社会における国際政治の課題やこれからのあり方について考える。</p>	
国際社会の法秩序	<p>私たちの社会は法により規律され、国家間においても法的拘束力の有無を問わず、様々な規範が共有されている。国家間のそれは、国家を罰することではなく、より良い世界を目指すための規律であり、例えば、人権やグローバルな課題を解決するための指針、また紛争を予防解決するための規則である。本講義では、国際法をはじめとする国際社会が規律される仕組みを学び、これらの法が発出される国連組織の現代的意義についても学ぶ。本講義の課題を通じて国際的に認められる問題を明確にし、さらには平和とは何か、を考える。</p>	

グローバル関係科目	人口動態論	現在、世界的には人口は増加しつつも、それぞれの国や地域においては人口変動は多様である。人口動態は、社会、経済的諸条件と密接な関係を持ち、社会の諸特徴を示す一つの指標である。本科目では、人口学が対象とする人口規模、人口構造（年齢や地域分布）、人口過程（出生、死亡、移動等）の基本的性質を理解するとともに、現代社会における人口変動（人口増加、死亡率・出生率の低下、高齢化、都市化、結婚と家族の変化等）の動向を学び、変動の要因を考察する。また、経済的側面、環境的側面に対する人口動態による影響を学ぶ。	
	人口政策論	世界各地では、地域や国で見ると、多様な人口変動が見られ、その要因は様々である。人口減少による経済成長の停滞、人口増加による食料・エネルギーの不足、貧困の拡大など、過剰な人口変動は社会発展に深刻な懸念を生じさせる。本科目では、具体的事例をとらえて現代社会における人口変動による課題を学ぶとともに、人口変動の要因（出生・死亡・移動）への対応および人口変動によって生じる社会経済現象への対応の2つの側面から人口政策を考える。	
	比較社会学	私たちはなぜ他の社会を学ぶのか。それは、単に他者を知る、ということにとどまらず、他の社会を知ること、私たち自身が所属する社会を相対化し、自らをよりよく知るためではないだろうか。ここに本講義の大きな目的を置き、そこに至るプロセスとして、まず、比較社会学の分析方法として、マクロ・レベルと、よりミクロな社会体系の比較軸の建て方を習得する。この分析手法を用い、本講義ではアフリカ・アジアの教育・福祉を事例にとりそれぞれの社会の仕組みを解説した上で、受講者は自身の出身社会の同領域の事例を調べ分析する。	
専門講義・演習科目	先住民研究	現在、世界中に少なくとも5,000の先住民民族が、70カ国以上の国々に居住するとされる。本科目では、先住民が先祖伝来の土地のなかで維持してきた多様な思想、文化様式、社会制度などを学ぶ。また、これまで先住民が弾圧、搾取の対象となり、社会に強制的に同化させられてきた歴史的背景を理解するとともに、先住民の伝来の土地と民族的アイデンティティを維持・発展させる取り組みを学び、先住民の文化理解と文化共生について考える。	
	ポストコロニアル概論	サイードによる植民地主義的言説批判に端を発するポストコロニアル理論は、現在の政治や世論の形成に大きな役割を果たした。この考え方は、現在では、植民地主義に対してのもののみならず、自社会における階級や差別を固定化しようとする様々な枠組みに対する批判理論として理解され、ポストコロニアル理論に基づく様々な文学作品を生み出している。この講義では、ポストコロニアル理論の成り立ちを理解し、近年発表されたいくつかの文学作品を読み、それらの作品で語られる権力構造、さらに、それらに対する批判を解説する。	
	国際開発論	第2次大戦後の戦禍の復興に始まる国際開発は、やがて貧困問題解決のための大きなうねりとなり、国際的な課題を担う領域となり、その学問領域も拡大していった。しかし、援助側、被援助側のこれまでの取り組みが功を奏し、状況は次第に変化し、過去の貧困問題とはその様相を異にするようになった。本講義では、貧困問題の本質を捉え、現代の貧困問題とそれに取り組む国際開発のアクターの施策の変容を考察していくことを目的とする。	
	マイノリティ研究概論	マイノリティとはだれか？経済的な標準化が進むと言われるグローバル化した世界において、それまで隠されていた格差と排除の構造が発見され、我われの生きる世界には多様な特色をもった生があることがわかってきた。人が構造的排除や格差から逃れ、他の人びとに迎合せずに、ありのままの生を生きるためには、他者・当事者・支援者として、こうした人びととどのように関わっていけばよいのか。この講義では、マイノリティ問題にアプローチするためのフィールド・ワークの方法を学び、マイノリティの立場から出発し、マイノリティ、しいては私たち自身が自由に生きるための生活圏づくりを考察していく。	
	グローバル・ビジネス論	現在のビジネスシーンにおいて、海外との関係を意識することは不可欠である。企業を取り巻く環境は変化し、企業経営やビジネス活動のグローバル化が急速に進んでいる。本科目では、グローバルビジネスの歴史の変遷や経済環境を概観するとともに、グローバルに展開する企業を取り上げ、その戦略や考え方、求められる人材能力などを理解する。また、現代社会が直面する様々な社会問題とそれに対応する新しいグローバル・ビジネスのトレンドを学ぶ。	
グローバル共生社会科目			

グローバル化とメディア	ヒト、モノ、情報、サービス、カネ等が国境を越え移動するグローバル化社会において我々は様々なグローバルイシューに直面するようになった。特にインターネットを利用した情報のやり取りは現代社会の日常生活に多大な影響を与えている。インターネット、テレビ、新聞、広告等のメディアの作り手はいかなる意図のもとに情報を発信するのか、またメディアが社会に与える影響は何か。グローバル化に伴うメディアの変容を理解すると同時に、理論と実践を通し、受信者、発信者として情報を作り出し、また読み解くための能力（メディア・リテラシー）を身に着ける。	
エイジング研究概論	日本をはじめとするいわゆる「先進国」の多くの国で、極度な少子高齢化社会が進行している。老年学は「老いること」の心理学的な分析をその根幹に置くが、現在の社会状況を考えれば、「老い」そのものだけを考えるだけでは不十分である。老年学はそれほど新しいものではなく、日本でも戦後すぐにこの領域が生まれ、現在の時代背景の中でますます盛んになってきた領域である。そこで、この講義では、「老い」というすべての人間が将来的に経験する時間域を考えるだけでなく、福祉の意味を考えるうえで、国内外の政策や社会的な取り組みの事例を交えながら、「老い」の社会的意味を捉えることを目的とする。	
子ども学概論	「子ども」の概念、「子ども」がオトナによって保護されるという、現在では当たり前となった「子ども」に対する考え方は比較的新しいものであることは、歴史学で明らかになり、私たちがイメージしがちな弱い存在としての子どもは、社会的に作られたものである。そこで、この講義では、一旦子どもに付与された弱者性を排除し、教育、生物学、発達心理学、文化人類学（「遊び」や「学び」）と言った多角的な視点からとらえる思考を鍛えていく。こうした学びから、子ども以外の後天的な弱者へのまなざしを客観的に考える思考を獲得していく。	
地球環境学概論 1	地震や洪水など劇的な自然災害は人びとの生活を破壊し、多くのものを失わせる。それらばかりではなく、地球温暖化や大気・水質汚染といった人びとの生活を緩やかに脅かす自然災害も現代社会にとって重大な環境課題となっている。「地球環境学概論1」では、自然災害に対してレジリエンスを持ち、持続可能な社会とはなにかを考えることを目的とする。この課題を考えるため、本講義では、超学際的（トランス・ディシプリナリー）なアプローチから素材を提供する。	
地球環境学概論 2	地球上にある様々な「資源」は、お互いに関連しあい、「資源」に関わる問題は一つを解決しても全体の解決にはなることはない。「地球環境学概論2」では、国内外の農林水資源・生態資源を含む多様な資源の生産・流通・消費のあり方を考える。これら資源の問題は、「科学的」な正しさのみから解答を与えられるわけではなく、それらに関わるステークホルダー（利害関係者）の関与を強く意識する必要がある。この講義狙いは、科学者とステークホルダーが取り組む資源利用に関する事例から、資源の公正な利用と最適な管理とガバナンスを実現するための方策を考える。	
地球環境学概論 3	世界人口の7割以上が住まうアフリカ、アジア地域では、人間活動の急速な拡大により、環境破壊、生物多様性の消失を経験している。このプロセスでは、都市部への人口集中、農山漁村での過疎化が起こり、両者の生活圏の劣化が加速している。「地球環境学概論3」では、社会・文化・資源・生態環境との相互連関の場としての生活圏の概念を再構築し、都市域や農村漁村域など多様な生活圏相互の連環を解明し、生活圏の様々なステークホルダーとともに、直面する諸問題の解決や生活圏の持続可能な未来像を描くことを目指す。	
NGO論	世界的に見れば、20世紀初頭にその原型が認められるNGO。その起こりは、戦傷者の治療、そして、恵まれない人へのチャリティーにある。日本においては、1995年に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに起こったボランティアのブームは、その後NGOの隆盛に繋がった。以降、NGOは20年以上に渡り日本国内のみならず、世界の各地で支援活動を展開するようになった。そして、現在のNGOはチャリティーの枠を大きく超え、国際社会における「市民社会」の代表者として、政治的な発言力を持つようになって久しい。この講義では、NGO史を概観して、近現代史における市民社会つまり、民主化の変遷を追うとともに、現代社会におけるNGOの新たな役割を学んでいく。	
平和学	人類史上、人間は平穏にその生を紡いでいくことを目指してきたにも関わらず、現在に至るまで絶え間なく争いを続け、それは時に多くの人の命を奪い、人びとを不幸のどん底に突き落としてきた。しかし、こうした争いのないことのみが「平和」の条件だろうか。平和の条件は、私たちが自由に往来し、暴力に妨げられることなく、自己実現することではないだろうか。この講義では、争いのない平和（消極的平和）のみならず、人間が自由に能力を発揮できる状態（積極的平和）を獲得するためにはどのようにすればよいかを、学際的な観点から考察する。	

グローバル共生社会科目	市民社会論	「市民社会 (civil society)」は、公的領域で活動する人びとの自発的な運動の領域として、世界各地で発展してきた。これまで、「市民社会」はある意味、社会的弱者を支援する公共の福祉に関わる人びとを限定的に指す傾向にあったが、現代のグローバルな文脈において、そのアクターはグローバル企業、多国籍企業をも含め、NGO、企業、国家、国際機関を混然一体としたものとして理解する必要がある。本講義では、「市民社会」の基礎知識と歴史的展開を学ぶと同時に、多様化するアクターたちがどのように「市民社会」を構築するのか、その可能性について検討していく。	
	人間の安全保障	冷戦の時代が終わり、私たちの「安全保障」の考え方は大きく変わった。21世紀にはいると、人間ひとりひとりの生存、生活、尊厳が守られることが現代的な安全保障の考え方とされ、その問題は、国民国家同士の争いから、貧困、環境、感染症、テロと言った、どの地域でも恒常的にリスクを抱える課題が重要なものとされるようになった。この講義では、人間の安全保障を脅かすリスクを私たちの生活世界の中から抽出し、そうした中で人間の安全保障がどのような考え方なのかを学ぶ。そして、どのように人間の安全保障を担保するのかという方法論を実例を交えながら議論していく。	
専門講義・演習科目	観光学総論	観光産業は平和産業かつ成長産業として、グローバル化が進む現代において最も注目を浴びている産業の一つである。観光による地域振興は、日本のみならず世界的なパッケージとなりつつある。それゆえ、一般的な地域社会での観光振興のみならず、宗教やグローバル経済といった、多様な文脈の中で語ることが可能である。さらに、観光はゲスト-ホスト関係という人間社会における普遍的なテーマを含みこむ。この講義では、いくつかのトピックから現代の観光を考察することを目的とする。	
	世界の文学 1	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、ポストコロニアル批評やジェンダー批評など現代の文学批評理論を紹介したうえで、アジアの文学と世界中に在住するアジア出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解いていく。	
	世界の文学 2	従来の「国民文学」の枠組みを超え、多様なバックグラウンドを持った作家の文学作品を通して、国境を越えて存在する今日的課題について考え、地域文化とグローバル世界との関わりを再検討することが本講義の目的である。本講義では、アフリカの文学と世界中に在住するアフリカ出身の作家の作品を中心に、その背景にある歴史・社会的文脈を読み解き、アフリカ地域文化に触れるとともに、これらの作品と特に関わりが深い「植民地主義」「越境と移動」といったテーマについて考察を進める。	
	世界文化遺産	文化遺産は、人類の文化的活動によって生み出された有形・無形のものであり、多様な文化が共生する社会を実現するために、後世に伝えていく必要がある。本科目では、「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」「無形文化遺産の保護に関する条約」の成立と理念、登録の目的を理解し文化遺産保護の意義を学ぶ。また、国際的な枠組みにおける各ステークホルダーの役割を理解し、各地の「世界文化遺産」「世界無形文化遺産」を対象に、具体的な取り組みと現地で生じる課題を理解し、これからの文化遺産保護のあり方を考える。	
	アフリカ美術	アフリカ美術は我々の日常生活においてそれほど馴染みは深くない。アフリカ美術の多くは名もなき製作者によって生産され、オリエンタリズムに満ちたまなごしに晒されてきた。しかし、近年、多くのアフリカ出身のアーティストが様々な作品を手掛けるようになった。本講義では、アフリカを舞台に、アフリカの美術を取り巻く環境を紹介し、アフリカ的な美術について学び、同時に、アーティストとは誰か、という問いに対して考察する。	
	マテリアル・カルチャー概論	かつて人びとの生活の中のマテリアル（物質）を収集することは、異文化を知る最も有力な方法とされた。この領域は文化人類学や民俗学で発展し、実存するモノを生産し、それを使う計画、方法、理由などを人びとに提供する人間の習性や行動を分析するとし、モノを起点に人間のあり様を哲学的に考える領域だと言える。モノが溢れた現代社会において、モノとは何か、そこにまつわる人間の生活がどのように構成されているかを考えるのが本講義の狙いである。この講義では、マテリアル・カルチャーの理論に加え、モノをどのように描写するかについても学んでいく。	

グローバル文化科目	民族音楽論	世界中、ありとあらゆる社会に音楽は存在し、それぞれの様式美がある。芸能として発達し、西欧音階に転記されポップな音楽になったものがある一方、音楽の中には農耕や漁業と言った生業に密接にかかわるものも少なくない。しかし、私たちの生まれ育った場所で育まれた音楽はずいぶん縁遠い存在となってしまう。この講義では、まず、音楽理論を学び、これを基礎としながら、各民族に独特の様式やパフォーマンスを分析し、ある社会における音楽のあり方を理解することを目指していく。	
	比較服飾文化論	服飾は時代背景や地域、風土、そしてそれぞれの文化を反映すると同時に、それを生み出した社会の思想や生活を視覚的に伝達する。本講では、異なる歴史的背景（古代文明から現在まで）、また異なる地域や風土（アジア、アフリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アラブ地域など）における服飾文化の流れと変容を比較文化的視点から学ぶ。多様な時代や文化によって生み出された服飾文化について理解することで、今日のファッションにおいても異なる文化的要素を取り入れた新たなトレンドを発見することに繋がる。	
	比較建築文化論	建築物は、世界各地の自然環境、歴史と文化の多様性を示す。本科目では、人々の暮らしと密接に関わる住居を中心に、異なる地域の気候風土に適応する多様な建築形式、住居と家族形態、生活様式、信仰など社会文化的要素との関連を理解し、比較文化的視点から住居の地域固有性について学ぶ。また、現代社会における暮らしを取り巻く環境変化による住居への影響、現代の新たな住居の課題を理解し、地域の自然環境や文化に適応した持続的な住居のあり方を考える。	
専門講義・演習科目	哲学概論	プラトンの対話篇に登場するソクラテスが説く倫理や、カントによる人間的思考の限界の追及、またフランクフルト学派による文化産業と現代社会の結びつきに対する糾弾など、各時代の主要な思想家を取り上げながら、哲学的思考にとって必要な基本概念を理解するとともに、それぞれが取り組んだ哲学的課題とその背景、さらに独自の思考の進め方を学ぶことによって、哲学そして哲学者が「時代」と切り結んだ関係が有していた「アクチュアリティ」を理解すると同時に、ひるがえって履修者自身が「現代」をアクチュアルに思考するための方法論を獲得する。	
	倫理学	「善き生とは何か」という問いのうち、「幸福な人生とはどのような生か」という問いは、古代ギリシャ以来、多くの倫理学者たちにとって大きな問題だった。なぜなら、それは非常に難しい問題だからである。「幸せ」「幸福」とは一体どのようなものだろうか。それは、ある一瞬の出来事だろうか、それとも一生の中でずっと続いているなければならない状態か。また、本人が満足していればその人は幸せだと呼べるのか、それとも何かそれ以外の条件を満たしていないと幸福な人とは呼べないのだろうか。講義では、古代から現代までの哲学者たちのテキストを紹介し、ビデオや映画なども見たりしながら、幸福について考えていく。	
	心理学	心理学が個別科学として独立してから今日まで、人間の心理現象を実証科学的に探求する種々の試みがなされてきた。この授業では、「科学」としての心理学がどのように形成され、発展してきたのかについて紹介するとともに、実験心理学、発達心理学、社会心理学等、多岐にわたる心理学全般の基本的知見を概観することによって、心理学の目的と方法、さらに人間の生物学的基礎、心理的発達、感覚、知覚、意識、学習、記憶、言語と思考、動機づけ、情動、知能など、人の心の基本的な仕組みや働きを、日常生活の中で経験する様々な事柄と関連づけながら理解する。	
	社会学	「社会学」とは、非常に広い意味を持った言葉である。「社会学」と名のつく学問領域も多岐にわたる（例えば医療社会学、家族社会学、環境社会学、教育社会学のように）。しかしそのような多岐にわたる学問体系、多様な専門領域をもつ「社会学」という学問の基盤には常に「現在の世の中に対する問い」という共通の問題意識が内包されている。講義では社会学の基礎、その思想的背景、具体的な研究例について学んでゆく。それらの教養は人文諸学を学ぶ上でいずれ必ず必要になるものである。	
	社会調査法	統計処理を前提としたデータを扱う量的調査と、個人的なドキュメントの分析や参与的観察などによる質的調査との双方にわたる調査方法を学習する。量的調査については、データの収集方法と分析方法、その手順と過程、統計処理の手段などの方法論、また質的調査については、インタビュー調査、参与観察法、ドキュメント分析、映像テキスト分析、会話分析などの方法論を習得するとともに、社会調査の基本的な性格やその系譜と歴史、さらにデータの収集と保存、公開にまつわる技術的・倫理的について具体的な事例の紹介を通じて学ぶ。	
学科基礎講義科目			

経済学	『国富論』のアダム・スミスが同時に『道徳感情論』の著者でもあり、またジョン・メイナード・ケインズの『一般理論』のなかに「美人コンテスト」の実例が登場するように、本来、経済学とは人間が何に価値を付与し、それら価値を付与されたものをめぐって個人がどのように振る舞い、そしてそれらの振る舞いが集合することによってどのような社会現象が生み出されるのかに関する学問である。この講義では、難解な数式を避けながら、個人々の消費や労働、企業、政府・国の諸活動を履修生自身の生活から出発して考察するための基本的な考え方を獲得する。
批評理論	主に文学における批評理論を体系的に学ぶことにより、テキストについて感想・印象を述べることを超えて、理論によりつつ「批評」できるようになることを目的とする。古典主義的な批評にはじまり、言語哲学、構造主義、記号論などの強い影響を受けて成立した文学理論、さらにそれを乗り越えようとするジェンダー批評、ポストコロニアル批評にいたるまで、文学表現を考察し評価するための主要な批評理論について、その基礎にある思想・言語哲学と個人々の具体的な批評実践の紹介を通じて、それぞれの批評理論の特性と射程を俯瞰的に理解する。
ジェンダー論	「ジェンダー」はしばしば「社会的な性別」や「社会・文化的な性の様態」などと説明されるが、現在、ジェンダーは「社会・文化」の下位概念を超え、「社会や文化がジェンダーを作り出す」のではなく「ジェンダーが社会や文化を構築する」と考えられるようになってきている。こうしたジェンダー論の展開は、20世紀以降の思想・哲学の進展と深い関係を有している。講義ではプラトン以降の西洋哲学史を概観した上で、東洋における性差の理解に加え、脱構築やクイア理論などの現代思想におけるジェンダー理解について検討する。
宗教学	本講義では、なによりも我々の「生活」をキーワードとし、宗教を捉える。21世紀を生きる我々にとっての日常「生活」と「宗教」を学び、これからの「宗教」の可能性と問題点を見いだしていく。現代社会の「生活」と「宗教」に求められているものとは何かを考えるため、これまでの宗教が果たしている機能とは何かを取り上げる。これらの目標を達成するために本講義では、基本的な宗教の概念および定義やその意味、宗教形態に関する概要をまとめ、宗教がもつ本来の役割とは何かを深く考察する。
社会思想史	プラトンとアリストテレスに代表される古代ギリシアの国家論・政治学から、ホブズやロックが描いた近代市民社会論をへて、現代の社会理論にいたるまでの重要な社会哲学を、それらが生まれた時代背景や地域の特性などに即して体系的・包括的に理解することに加え、それぞれの社会哲学の方法論を現代の日本社会が抱える具体的な問題に適用することによって、その射程を見極めるとともに、現代の日本社会への理解を深める。社会を理解するための多角的な視点を身につけた上で、これからの現代社会の変貌を見通すことのできる視座を獲得する。
自然地理学	地理学は、地表を探索して「世界」についての知識を上げ、その地図を作ることに始まった。現在では自然地理、人文地理と大別されているが、空間という広がりの中で地形、気候、植生などの自然的条件を把握すること、そしてそれらの環境条件と人間生活との相互作用の関係を解明すること、さらにそうした知見を地図などによって表現し、世界の諸地域の理解やその地域の発展に資することが、この学問の基本であり存在意義であることに変わりはない。講義では、地理学のもつ様々な側面の中なかでもっとも基礎的といえる、自然地理学と人間環境関係学の部分を取り上げて、その見方・考え方を修得することを目標とする。
文化政策論	国や地方自治体の政策の中で文化が扱われる過程とその意義について、関連する世界の動向ならびに歴史をも見据えながら考察し、現代日本における国と地方自治体の文化政策の基本的な枠組みとその方向性を概観する。とりわけ京都府・京都府に見出される文化政策の特徴と問題点を理解した上で、伝統文化と、さらに大衆文化における新しい文化事象が文化政策においてどのように扱われるのか、また文化政策への地域住民の理想的な参加のあり方はどのようなものかについても考察し、将来の文化政策について一定の見識を習得する。
文化社会学	いわゆる「高級文化」ではなく、概して娯楽や商品として消費されるがゆえに、その社会的価値や文化的な意味が見過されがちなテレビ番組や広告、映画、ポップミュージック、ファッション、アニメ、ゲームなどといった「大衆文化」を主たる対象としながら、そのそれぞれの特徴や分析方法、グローバル化における位置づけを、私たちの日常生活と社会との関わりのなかで理解するための様々な理論や概念、方法論を習得する。個別具体的な事例の紹介も取り上げながら、現代社会における多様な文化現象を批判的・多角的に分析できる思考力を養う。

学科基礎講義科目	西洋史	ヨーロッパは2000年以上前から世界の文化、政治、経済の中心として中国を中心とする東洋とともに世界をリードしてきた。この地域の歴史を知ることは、いわば世界の潮流の半分を知ることであり、現代世界を考えるうえでも大変重要である。しかし、歴史は高校世界史で学んだような、政治的イベントの連なりのみを見ればよいのではない。それぞれの時代にある、人びとの生活が見えるような歴史を学ばねば、生きた歴史とは言えない。この講義では、これらの背景に留意しながら、歴史学の考え方を学び、現代につながる西欧の歴史の連なりを概観していく。	
	東洋史	サイードによる「オリエンタリズム」の批判から、ヨーロッパ的な意味の「東洋」は解体され、これまで「東洋」とされてきた日本（極東）から北アフリカのマグレブにかけてを指す地域のそれぞれの歴史が研究されるようになってきた。しかし、これらの地域は古くから互いに密接な交流を重ねてきており、現在、世界の最大の人口規模、生産の中心である、この地域を理解する上で、巨視的な歴史理解は重要である。そこで、この講義では、「東洋」の一部の地域の地域史を学ぶだけでなく、「東洋」全体を理解することを目指す。	
専門講義・演習科目	日本史	古代、中世、近世、近現代までの日本史の流れを概観しつつ、民衆史や地域史といった近年の歴史研究の動向も簡単に紹介することによって、各時代の政治に加えて社会・文化・「日本」と周辺地域との関わりといった様々な分野のトピックを学ぶ。高校までの生徒が一般的に抱きがちで、著名な政治家や政治体制の変転にまつわる年号を暗記するという「歴史＝政治史」観から脱却するとともに、履修者が高校までの学習の中で形成した「日本の歴史」のイメージを各自で相対化するための視点を獲得する。	
	日本地域史	奈良、京都、江戸／東京における中央権力の政治動向とそれに関わる政治家・知識人らを中心に歴史を綴るのではなく、この権力との複雑な関係を保ってきた諸地域の歴史を掘り起こそうとする地域史の方法論とその成立経緯ならびに問題点に加え、この地域史に先立つ地方史、またこれらに近接する郷土史との相違、特定の地域史と現代の地域住民との関わりについて学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する地域史のアプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
	日本社会史	著名な人物や彼らが関わった事件を連ねることによって歴史を綴るのではなく、それらの背景にあつてその時代・地域の社会の全ての構成員、とりわけ普通の人々の日々の営みに意味を与えていた家族、性、出産、育児、衣食住、貧困、犯罪、死といった事象に目を向け、社会構造全体の変遷をたどり、歴史研究の全体性を取り戻そうとする社会史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。日本の特定の具体的な時代・地域に対する社会史のアプローチの事例紹介を通じて、この方法論によって何が明らかになるのかを理解する。	
	日本・アジア関係史	古代史・中世史・近世史・近代史それぞれにおける日本とアジアのあいだの人・物・文化の移動と交流、戦争や侵略の歴史、さらに「アジア」認識の変化などについて、とりわけ琉球、韓国、中国、台湾、フィリピン、タイなどからなる東アジア地域と日本との関係に焦点を当てながら通時代的に学ぶ。日本史をアジア史のなかで有機的に理解することによって、これを相対的に捉える視野を獲得するとともに、今日の日本が形成されるまでの経緯をそのダイナミズムとともに理解し、また現代の「歴史認識」をめぐる問題の根源についても理解する。	
	日本の文化遺産	「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」にもとづいて世界文化遺産に登録されたもののうち京都を中心に関西圏にあるものについて、特に下鴨神社・上賀茂神社・慈照寺など大学キャンパス近辺にあるものに関しては実見も実施しながら、その概要の紹介を通じて京都の文化に関する理解を深める。また、条約の理念や目的、世界遺産の登録要件、文化財を世界遺産に登録する目的と意義について、国内の文化財保護法との関連や地元住民や行政が直面している保全と活用の問題点なども視野に入れながら考察する。	
	歴史地理学	心理学や文化人類学の研究成果に関する積極的な紹介を交えながら、人文主義地理学の観点からの歴史地理学の研究史、歴史時代の地理的行動とその結果としての地理的空間を研究するための方法論、この方法論にもとづくフィールドワークの進め方について理解する。特に文化・民俗・環境に焦点を当て、私たちが祖先がどのように環境を知覚し、行動を起こし、環境と共存してきたのかを知ることによって、古代から現代にいたる人間集団の環境への接し方を総合的に理解し、さらに未来の人間と環境の関わりについて考察するための視座を獲得する。	
	日本文化科目		

京都の歴史	京都とその周辺に位置する地域との関わり、また京都で暮らした多様な人びとの生活と社会関係について、京都市内で発掘された遺跡や残された様々な史料、関連する文献などを通じて学ぶことによって、古代から近代にいたる京都の通史と、地域に対する理解を培う。文献・史料や地図情報をもとに、現地を歩いて体感するフィールドワークも実施しながら、京都の都市空間がどのように変化していったのかを知り、その歴史的な連続性と段階性を踏まえつつ、現代京都の都市空間とそこで継承されている文化が形成されてきた経緯を理解する。
日本民衆史	中央における政治と権力闘争を中心に歴史を綴るのではなく、労働者や女性といった生産者・被支配者に光を当てて歴史形成の主体として見直そうとする民衆史の方法論とその成立経緯ならびに問題点について学ぶ。とりわけ民衆史では、対象となる「歴史に埋もれた人々」に関する史料が少ないことから、数多くの断片的な資料を掘り起こし、過去を再構成することが重要となる。講義では、日本における民衆史のアプローチの事例紹介を通じて、この方法論を進める上での調査手順、またこれによって何が明らかになるのかを理解する。
日本文学史	日本文学史に関する基礎知識を習得した上で、作品の背景にある時代、社会、言語への理解、日本語を使って継続的に営まれてきた創造活動、さらには普遍的な人間の心理についての理解を深める。上代から近世までの主要な文学作品を講読しながら、その具体的な表現に触れ、日本文学の歴史的な展開や個々の時代の特色について学ぶとともに、文学ジャンルやその時代性、古今の文学の結びつき、東西文学の交流や相互影響、文学表現とそれを伝えるためのメディアとの関係など、日本文学の全体像を把握し、広く日本文化の本質とその担い手への洞察を養う。
漢文学	現代の日本語文は漢文（中国古典文）とは異なる言語でありながら、その影響を受けて成立している。講義では、中国文学・思想の特徴や、漢文が常態であった時代以降の日本文学における漢文学の受容の諸相などの基礎知識に加え、漢文を読む上で必要となる工具書や参考文献も紹介しながら、返り点、送り仮名の付いた漢文を正確に書き下し文にし、口語訳できるようになるための読解力を習得する。漢文法の基礎を習得しつつ漢文学の特質を理解するとともに、その伝統が日本文化に根強い影響を与えてきたことを再認識する。
口承文化論	人間の普遍的な営みとしての口伝えについて、伝説・昔話・噂話などの具体的なテーマを取り上げながら、その民俗性、歴史性、ならびに現代的な意義に加え、その研究方法について理解する。東北には地震や津波の恐怖を語り継いできた地域があったことから分かるとおり、現代日本においても口承文化はその重要性を保っている。講義では、主に日本国内で伝承されてきた民話を中心に、話の展開に一定の「型」を見出し、話型を利用してさらに多くの類話を収集し、比較研究する方法を学ぶとともに、語り手一人一人にとっての語りの重要性についても理解する。
書誌学	巻物や冊子など、さまざまな形態を備えるモノとしての書物について、主に和本を取り上げながら、紙を作る技術と書物の形態の関係、人々の読書への興味と印刷技術の発展といった時代の移り変わりと書物の変化の関係などについて学ぶ。実物および複製本・影印本などを用いながら、書物の成立・発展、印刷・製本・材質・形態、保管・分類といった側面に加え、書物がどのように流通し、どのように読まれたかといった側面についても理解し、書物のモノとしての価値と資料的価値をめぐって形成された文化について体系的に理解する。
古典文法	たんなる暗記の連続ではなく、具体的な古典作品を文学として味わいながら古典文法を理解していくことを通して、日本の古典文学を「正しく」読解するための文法知識を習得する。講義では、上代から近世までの具体的な文学作品の紹介を通じて、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・助詞などの様々な品詞の区別に関する基本的な認識にはじまり、それぞれの用法や敬語、ならびにそれらの変遷について理解することに加えて、文法史の基礎を学ぶことによって日本語の仕組みと変遷とを総合的・分析的に理解するための視野を習得する。
書道	文字、ならびに文字を書くという行為はたんなる意思伝達の手段としてではなく、そこには自己表現的な意義はもちろん、特定の文字にまつわる精神的な文化としての側面や、とりわけ東洋思想の具象化としての側面が内包されている。楷書、行書、草書、篆書、隸書の五書体による古典籍の臨書も交えながら、文字の筆法を習得することにとどまらず、「書」の歴史を概観し、東洋の文化において「書」がどのように捉えられ、扱われてきたのかも学ぶことによって、文字を書く行為そのものを見つめ直す視点の獲得を目的とする。

<p>専門講義・演習科目</p>	<p>日本文化科目</p>	<p>古文書解読</p>	<p>近世以前の日本史および日本文学研究においては、翻刻された史料集だけにとどまらず、くずし字で書かれた原本を広く読みこなす技能を習得することもきわめて重要である。講義では、主に江戸時代に作成された古文書・記録類、典籍などの版本などの写真版コピーを用いながら、日本における古文書を解読するための基礎的な知識と方法を学ぶ。旧字体、近世の古文書の形式、古文書に特徴的な表現・言い回しなど、必要な知識を学んだ上で、実際に演習形式で古文書を読み下していくことによって、古文書を解読する技能を習得する。</p>	
------------------	---------------	--------------	--	--